

国立民族学博物館研究報告

49 卷 3 号

2025 年

目 次

論文

異教の神を語り，社会課題を歌う

—インド・ベンガル地方の絵語りポトウアにみる経年変化と社会的レジリエンス—

.....岡田 恵美 311

研究ノート

Late Pleistocene to Holocene Seafaring in Near Oceania and Wallacea:

Archaeological and Ethnographic Evidence

.....Rintaro Ono and Tomoya Akimichi 389

投稿規程・執筆要領 433

BULLETIN OF THE NATIONAL MUSEUM OF ETHNOLOGY

Vol. 49 No. 3

2025

Article

- Okada, Emi Singing about Hindu Gods and Social Issues:
Changes and Social Resilience of the Bengal Patua 311

Research Note

- Ono, Rintaro Late Pleistocene to Holocene Seafaring in Near Oceania
Akimichi, Tomoya and Wallacea:
Archaeological and Ethnographic Evidence 389

異教の神を語り，社会課題を歌う
——インド・ベンガル地方の絵語りポトゥアにみる
経年変化と社会的レジリエンス——

岡 田 恵 美*

Singing about Hindu Gods and Social Issues:
Changes and Social Resilience of the Bengal Patua

Emi Okada

かつてインド各地には，絵画を用いた吟遊の口承芸能が存在した。近代化に伴い，その多くは需要を失って消滅したが，西ベンガル州西メディニプル県ノヤ村の一集落に暮らすポトゥアは，伝統的生業である絵師・絵語り師を現在も継承する職能集団である。ノヤ村のポトゥアはイスラームを信仰しつつもヒンドゥー名をもち，ヒンドゥーの神々を描いた絵巻物を携え，ベンガル語の定型詩で物語を歌う。また絵語りを通して災害や感染症といった社会問題を農村の人々に訴え，啓蒙する。彼らはなぜ伝統的生業で生き延びてこられたのか。

本論文では，1988年から1991年にかけてノヤ村で調査を実施した文化人類学者・金基淑^{キム・キスク}の研究と，筆者が2022年および2023年に得た調査内容を，経年変化に着目して3つの側面から考察した。第一に絵師であり旋律を伴って歌う絵語り師としての「担い手」，第二にヒンドゥー文化に基づく伝統的な主題と社会的主題が描かれたポト絵とその語り歌という「内容」，第三に絵語りの場や聴衆との関係を含む「実践」と絵語りをする「目的」である。これらの経年変化を踏まえ，イスラームとヒンドゥー社会の狭間で，急激な社会変化や需要の変容という逆境に直面しながらも，絵師・絵語り師の職能集団としてノヤ村のポトゥア集落が淘汰されず，伝統的生業を復興させた過程を明らかにした。さらに，「社会的レジリエンス」を分析概念として援用し，変化に対する柔軟な対応力や個人主義と集団主義を巧みに使い分けるポトゥアの能力が，経済的側面と個人的・集団的アイデンティティの側面におけるウェルビーイング獲得や伝統

* 国立民族学博物館

Key Words : Patua, poet-singer, Bengal Muslim, well-being, social resilience

キーワード : ポトゥア，絵語り，ベンガル・ムスリム，ウェルビーイング，社会的レジリエンス

的生業の復興と関係していると結論づけた。

The Patua of Naya village, located in the West Medinipur district of West Bengal, India, is a small community of storytellers who sing using scroll paintings. Traditionally Muslim, until approximately 30 years ago, they travelled to neighbouring Hindu villages with *pata* (scrolls) depicting Hindu mythology and contemporary social issues.

This paper examines changes in the Patua tradition by comparing earlier fieldwork conducted by cultural anthropologist Kim Ki Sook in Naya between 1988 and 1991 with the author's own research from 2022 and 2023. The analysis focuses on three aspects: 1) the aspect of 'bearer', focusing on the individuals who serve as both painters and storytellers, singing with melodies; 2) the aspect of 'content', exploring the *pata* and songs that convey both traditional and socially enlightening themes; 3) the aspect of 'practice', which considers the settings of picture storytelling and the relationship between the storytellers and their audiences.

Through a longitudinal perspective, this study reveals how the Patua community in Naya, as painters and storytellers, has managed to sustain its traditions. Additionally, it explores how this community has persisted despite facing adverse conditions such as rapid social change and shifting demands since the 1990s between Islamic and Hindu societies. Furthermore, by employing 'social resilience' as an analytical concept, this study concludes that the Patua's ability to flexibly adapt to change and skillfully balance individualism and collectivism is linked to the attainment of well-being in both economic and personal/collective identity dimensions, as well as to the revival of their tradition.

1 研究概要	3.4 作品制作における戦略
2 増加するノヤ村の絵師・絵語り師	3.5 語り歌の比較分析
2.1 世代の異なるボトゥア夫妻の事例	3.6 集団歌唱の復興
2.2 イスラームとヒンドゥー社会の狭間で生きる柔軟性	4 伝統的生業の復興とウェルビーイング
2.3 女性ボトゥアの社会進出と絵師・絵語り師の専門化	4.1 絵語りは何のために行われるのか
2.4 アーティストとしての新たな展開	4.2 個人主義と集団主義を巧みに使い分ける力
3 ボト絵と語り歌にみる経年変化	4.3 パンデミックを越えて
3.1 伝統的テーマと社会的テーマの共存	4.4 絵語りボトゥアの未来
3.2 ヒンドゥー文化に根ざした伝統的テーマ	結論——ノヤ村のボトゥアにみる社会的レジリエンス
3.3 社会的テーマとボトゥアが描く共生社会	

1 研究概要

ポトゥアとは

ポトゥア (patua)¹⁾ は西ベンガル州を中心に、インド東部の他州やバングラデシュ西部にも広く分布する職人のジャーティ (jati) である。その多くは、ヒンドゥーの神像製作や絵師・絵語り師を主な伝統的生業としてきた。ジャーティとは「生まれ」を意味し、インドを中心に南アジアに浸透する職能集団を指す概念である。これは出自によって帰属が決まる世襲制の職能集団であり、特定の地域社会を基盤とした共通の慣習をもつ内婚集団でもある (鈴木 2024: 6)。ジャーティ間には序列関係が存在し、元来ポトゥアという職人のジャーティはヒンドゥー社会の下位に位置付けられていた。こうしたヒンドゥー社会での社会的差別や経済的不利益を避けるために、各地のポトゥアは 13 世紀から 18 世紀にかけてのベンガル・スルターン朝やムガル帝国といったムスリム政権下で、社会的保護や経済的恩恵を求めてイスラームへ改宗したとされる。だが、イスラームへの改宗時期を示す明確な記録は存在しない。ポトゥアは 20 世紀に入っても、1901 年のインド国勢調査ではヒンドゥーのカーストおよびサブカーストとして分類され、1951 年の国勢調査においても「西ベンガルの職人カースト (Artisan Castes of West Bengal)」と明記された (Bhattacharjee 1980: xii)。このようにポトゥアはヒンドゥー教からイスラームに改宗した集団や、20 世紀以降にヒンドゥー教へ再改宗した集団など多様な宗教帰属がみられることも特徴である。

ノヤ村のポトゥア集落と絵師・絵語り師

ポトゥアの中でも本論文が対象とするのは、インド東部の西ベンガル州西メディニプル県ノヤ (Naya)²⁾ 村に暮らす、絵師・絵語り師を生業とするムスリムの職能集団である。

ノヤ村 (図 1) は、西メディニプル県ピングラ市 (Pingla) の水田稲作地帯に位置し、大都市コルカタから約 130km、車で 3 時間ほどの距離にある。村の人口は、2011 年のインド国勢調査に依拠すれば、3,960 人 (指定カースト SC 20 人、指定トライブ ST498 人含む)、962 世帯である (Census of India 2011)。村にはポトゥアが暮らす集落のほか、ムスリムの集落、ヒンドゥー教徒の各ジャーティの集落、



図1 調査地ノヤ村（筆者作図）

先住民サンタルの集落が点在し、村の人口規模から見ればポトゥア集落は決して大きくはない。

ノヤ村のポトゥア集落は全員がスンナ派ムスリムであるが、今日では大半はイスラーム名を持たず、ヒンドゥー名を名乗り、ベンガル語で絵師を意味するチットロコル（chitrakar）を自称する。彼らは自らが描いたポト絵（pata/patachitra）を携え、母語のベンガル語で物語を歌う。すなわち、ノヤ村のポトゥアはポト絵を制作する絵師であると同時に、物語を歌唱する絵語り師でもある。ポト絵の多くは縦長の巻物状で、物語は複数のコマ割りによって上から下へと展開する。該当する場面のコマを指で示しながら、ポトゥアは声を張り上げ、旋律とともに定型詩を紡ぐ。かつてインド各地には、紙や布に描かれた絵を用いて物語を語る口承芸能が存在した。だが現在では、インド北西部ラージャスターン地方のボーパ（bhopa）によるパド絵（phad）を用いた絵解き語り³⁾（田森 2024; 三尾 1995）など、現存するものはわずかである。その中でも、ノヤ村のポトゥアが特に興味深いのは、絵と絵語りを同一人物が手掛けることや、ムスリムでありながらヒンドゥーの神々が登場する物語をポト絵の主題とすること、さらにその時々々の社会問題を積極的に作品に導入して、人々を啓蒙してきたことである。

ノヤ村のポトゥアは近隣のヒンドゥー教徒の村々を巡り、自作のポト絵を用いて絵語りを披露し、村人から主食である米や野菜といった食糧の施しを受けていた。1980年代前半頃までは、ポトゥアの絵語りは農村における数少ない娯楽の一

つであり、ヒンドゥーの神々への信仰や道徳的・教訓的な教えを伝える手段でもあった。食糧を差し出すことは、村人にとっては宗教的な喜捨の意味をもち、吟遊するポトゥアにとっては日々生きるための食糧獲得の機会でもあった。しかしながら、1980年代後半頃から絵語りは緩やかに衰退傾向に陥り、1991年の経済自由化政策以降はその傾向が顕著となる。内需拡大やグローバル化の進展によって経済成長が続いたインドでは、都市部のみならず農村部にもケーブルTVやインターネット、スマートフォン普及の波が次々と押し寄せ、農村における娯楽のあり方も大きく変化した。絵語りの需要や価値は徐々に低下し、ノヤ村のポトゥアは一人、また一人と村々への吟遊を止めた。転業する者も相次ぎ、一時は絵師や絵語り師の数も減少した。絵語りが斜陽にあった1990年前後、ポトゥア集落の人口は22世帯・115人、そのうち絵師・絵語り師に従事するのは22人（うち女性は4人）であり、日雇いの農業従事者など多種兼業者が多かったことが先行研究で指摘されている（金1992: 152; 2000: 54）。

西ベンガル州メディニプル県やビルブム県各地に、少なくともそうした1990年前後、ポト絵を描き、絵語りを生業とするポトゥアは珍しい存在ではなかった。しかしながら、2025年現在、絵師・絵語り師という伝統的生業を継承する集落は、筆者が知る限り、ノヤ村のポトゥア集落以外にはない。さらに、2020年にノヤ村のポトゥアの組合が作成した資料（Chitrataru 2020: 9）によれば、ポトゥア集落は70世帯にまで増え、絵師・絵語り師として従事する者は254人（うち女性は124人）と1990年前後から10倍以上に増加している。近年では絵師・絵語り師としてノヤ村のポトゥアの知名度が高まり、毎年ポトゥア集落で主催される祭の観光資源効果もあって、「ノヤ村=チットロコル（ポトゥア）の村」と認識されることも少なくない。

先行研究と本論文の位置付け

絵語りを生業とするポトゥアに着目した研究は、大きく2つに分類できる。一つは、先住民サンタル⁴⁾を聴衆として、彼らの創世神話などを語る「サンタル・ポトゥア（Santal patua）/別称ジャッドウ・ポトゥア（Jadopatua/Jadopatua）」に関する研究である（Kaiser 2012; 西岡 1995: 18-47）。もう一つは、農村のヒンドゥー教徒を聴衆とする「ベンガル・ポトゥア（Bengal patua）」であり、本論文の対象は

後者である。

ベンガル・ポトゥアに関する主要な先行研究には、1950 年代に西ベンガル州ビルブム県のポトゥアを対象とした人類学者バッタチャルジー (Binoy Bhattacharjee) による民族誌 (1980) のほか、2001 年より調査を開始した宗教人類学者コロム (Frank J. Korom) の研究 (2006; 2015) や、文化人類学者の金基淑 (Kim Ki Sook) による民族誌 (金 1992; 2000; 2008; 2012) が挙げられる。コロムの研究では、災害を主題とした作品を例に、ポトゥアの絵語りが政治的イデオロギーを浸透させる媒介として政治家などに利用されやすい点が指摘されており、これについては第 3 章で詳述する。

特に注目したいのは金の研究である。金は 1988 年から 1991 年にかけて、メディニプル県の異なる村に居住する 2 つのポトゥア集団を対象にフィールドワークを実施した。生業形態や経済的状況、居住環境や集落の歴史が異なることによって、同じジャーティに属し、ヒンドゥー教徒を相手に生業を営むポトゥア集団であっても、各集団と宗教の関わり方には違いがあることを明らかにした。そのうちの一つである C 村のポトゥアは、1946 年にイスラームからヒンドゥー教へ再改宗した、ヒンドゥーの神像製作を生業とする職能集団である。神像製作で名を馳せ、継続性のある顧客を抱えていることから経済的に安定し、インド独立直後の宗教対立が深刻化する中で、ムスリムであることよりも生業を続けることを選択した集団である。そして再改宗後は積極的なヒンドゥー化が見られることが報告されている (金 1992; 2000)。他方、N 村のポトゥアはヒンドゥー教に再改宗せず、イスラーム信仰を続ける職能集団で、これが本研究対象のノヤ村の一集落に居住する絵師・絵語り師のポトゥアである。金の一連の研究における最大の特徴は、インドの集団改宗に関する従来の研究がカーストと改宗の關係に集中する傾向にあったのに対し、生業と宗教との不接合を要因とする生存戦略の一環として集団改宗について論じたことや、2 つのポトゥア集団が宗教との関わりにおいて明確な違いを見せた要因が、生業形態にあると明らかにしたことである。中でも、ノヤ村のポトゥアの考察において特筆すべきは、宗教や経済にまつわるさまざまな状況に応じて、最も現実に即した選択をするという彼らの「戦略的多様性」(金 2000: 226) に着目し、第一にヒンドゥー教徒と接する生業において、「仕事と宗教を分けて考え、仕事の際にはヒンドゥー教徒になりすます」(金 2000: 3) という宗教

的状況主義や、第二に金銭絡みによる集団の分裂を予防するための行動様式から、「個人主義と集団主義という相反する二つのものを、N村のポトゥアたちは脈絡に応じて使い分けている」(金 2000: 199)という選択的な状況主義について指摘したことである。

こうした状況主義的な戦略的多様性は、金の調査(以下、金の1988年調査とする)から35年近くが経過した現在においても、ノヤ村のポトゥアに見られることから、本論文においても重要な視点として位置付ける。だが一方で、生活の困窮から絵師・絵語り師を続けるポトゥアが減少傾向にあった当時から現在に至るまでの間に、ポトゥアを取り巻く環境は大きく変化した。絵師・絵語り師の数は前述の通り10倍以上に増加し、その暮らしは以前より豊かになった。また彼らは伝統的生業に誇りを抱くようになっては、したがって、戦略的多様性については、そうした社会的変化の中で生まれた新たな現象やその要因を通時的に考察する必要がある。それと同時に、先行研究で取り上げられてきた宗教的・経済的側面だけでは論じきれない、絵師・絵語り師として生きる上での個人的・集団的アイデンティティの側面にも踏み込む必要がある。

そこで本論文では、金が指摘した戦略的多様性を重視しつつ、ノヤ村のポトゥアが有する2つの力に着目する。一つ目は、新たな視点として、変化に対する柔軟な対応力である。これは、吟遊に対する需要や価値の喪失という逆境に際し、ノヤ村のポトゥア集落が他の絵師・絵語り師の村落とは異なり淘汰されることなく、伝統的生業の復興を成し得た過程において重要な要素であるとともに、先行研究では扱われていないポト絵や語り歌の変容を分析する上でも示唆的である。二つ目は、金が指摘する、個人主義と集団主義を巧みに使い分ける能力で、本論文ではとりわけポトゥアの個人的・集団的アイデンティティの形成とその実践を検討する上で重要な着眼点になると考える。

伝統的生業の危機と社会的レジリエンス

こうした伝統的生業の危機や復興の問題を扱うために、本論文では「社会的レジリエンス」(social resilience)という概念に注目したい。ラテン語の *resilire* に由来するレジリエンスという言葉は、15世紀以降、物理学や生態学、心理学、人類学といったさまざまな学問分野において、人間の行為や自然の作用を説明するた

めの分析的な枠組みとして使われてきた。近年は学術分野のみならず、ビジネスや一般社会でも用いられ、その対象も気候変動や災害後の生態系から、個人やコミュニティ、地域、国といった多様なレベルの復興に関してまで多岐にわたる。だがいずれも「何らかの外的な衝撃を受けた後に元の状態に回復しようとする傾向や能力」（三尾 2022: 4）と捉えられている点は共通している。ホールとラモン（Peter A. Hall and Michèle Lamont）は、編著書 *Social Resilience in the Neo Liberal Era*（新自由主義時代の社会的レジリエンス）の序章において、新自由主義に関連した動向が場所によって異なる反応を示し、それは各々の環境に特有の文化的・制度的資源を活用した共時的な社会的プロセスの産物であったと説明する。その上で、「社会的レジリエンス」とは、組織、階級、人種、コミュニティ、国家などで結びついた集団が、困難な課題に直面しても、自らのウェルビーイング（well-being）を維持し、前進させる能力（capacity）であると定義している。また社会的レジリエンスは、新自由主義への対応だけではなく、多種多様な課題に対処する社会の能力を包含し、広く概念化されうると主張する（Hall and Lamont 2013: 2, 13）。ここで重要視されているウェルビーイングとは、1946年に署名された世界保健機関（WHO）憲章の序文のなかで「健康」を定義するために用いられた言葉であり、「身体的、精神的、社会的に完全に良好な状態（a state of complete physical, mental and social well-being）」という意味である。ホールとラモンも、ウェルビーイングを「身体的、精神的な健康、物質的な糧、共同体の一員として認知されることで得られる尊厳（dignity）や帰属意識（belonging）など」（Hall and Lamont 2013: 13）と広義に解釈している。三尾はこの社会的レジリエンスの定義を受けて、「比較的長期にわたる変化への対応に焦点を当て、集団や構成主体が以前の状態に回復することそのものではなく、回復を志向するなかで、ウェルビーイングを獲得するプロセスやそのために動員される能力に注目する点が、生態系や防災のレジリエンスの捉え方とは異なっている。（中略）『社会的レジリエンス』という視点で社会変化を捉えることで、当該社会の人々がどのような変化に対応して既存のどのような社会的資源を動員、活用し、生活を切り開こうとしているのかが、より明確に捉えられる」（三尾 2022: 5-6）と述べている。

このように社会的レジリエンスを、変化を余儀なくされる「困難な課題」に直面する中でも、「自集団のウェルビーイングを獲得していくプロセス」、そして「そ

のための能力」と捉えると、この分析概念はノヤ村のポトゥア集落の事例においても有用である。すなわち、1990 年前後の急速な社会変化に伴い絵語りの需要が減退し、災害ほど予期不可能ではないにせよ、伝統的生業の維持が徐々に脅かされる不安定な状況から、伝統的生業の復興やウェルビーイング獲得へと至るプロセスにおいて、先述のポトゥアが有する 2 つの能力がいかに関与したのかという問いを立てることができる。

本研究方法と研究目的

本論文では金の 1988 年調査⁵⁾の内容と、筆者が 2022 年 4 月、2022 年 9 月、2023 年 10 月に実施した調査（以下、筆者の 2022 年調査とする）の内容をもとに、次の 3 つの視点から経年変化に着目した比較考察を行う（図 2）。

第一に絵師であり旋律を伴って歌う絵語り師としての「担い手」、第二にヒンドゥー文化に基づく伝統的な主題と社会的主題が描かれたポト絵とその語り歌という「内容」、第三に絵語りの場や聴衆との関係を含む「実践」と絵語りをする「目的」である。

これらの側面から経年変化を検証するとともに、イスラームとヒンドゥー社会

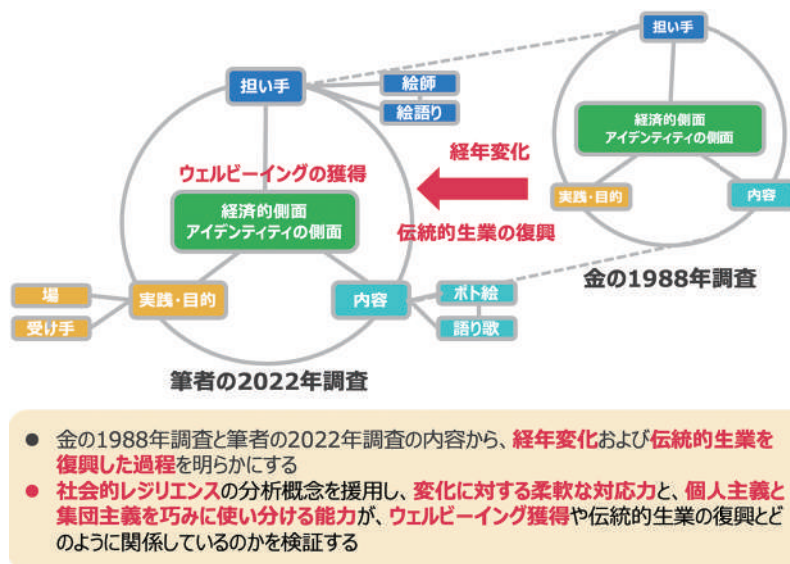


図2 本論文の目的と方法（筆者作図）

の狭間で、急激な社会変化や需要の喪失という逆境に直面しながらも、絵師・絵語り師の職能集団としてノヤ村のポトゥア集落が伝統的生業をいかに復興してきたのか、その過程を考察する。その上で、「社会的レジリエンス」を分析概念として援用し、ポトゥアの変化に対する柔軟な対応力と、個人主義と集団主義を巧みに使い分ける能力が、経済的側面のみならず個人的・集団的アイデンティティの側面におけるウェルビーイング獲得や伝統的生業の復興とどのように関係しているのかを明らかにする。これらが本論文の目的である。

本論文独自の特徴として、同一集落を対象に、35 年近くにわたる経年変化に着目して考察した点が挙げられる。単独の研究者がこうした長期的調査を実現するのは困難であり、事実、ポトゥア研究においても前例がない。本論文は、金の一連の研究成果に加え、金への複数回にわたるインタビューや提供資料を通して、担い手としてのポトゥアに関する事項のみならず、ポト絵や絵語りの経年変化の実態を鮮明に浮かび上がらせた。また本論文の第二の特徴として、これまでのポトゥア研究では十分に言及されてこなかった、旋律を伴う歌にも着目し、歌詞の分析にとどまらず、旋律、歌唱法、歌唱形態といった音楽学的視点からの分析を加えた点にも新規性があると言えよう。

2 増加するノヤ村の絵師・絵語り師

絵師・絵語り師が暮らすノヤ村のポトゥア集落は、比較的歴史が浅い。1950 年頃より、ムスリムからヒンドゥーへの再改宗が進行する他村を逃れて、徐々に移住してきた 15 の父系集団によって構成されている。2025 年現在、この村では移住初期から数えて第 3 世代から第 6 世代が共存している。また同じノヤ村内でも、ムスリム居住区やヒンドゥー教徒の各集落とは地理的な距離を保っているため、両者との交流は希薄である。逆に言えば、そうした関係性だからこそ、ヒンドゥー教徒を相手に生業を続けるムスリムとして、微妙な立ち位置にありながらもポトゥア集落が存続してこれたと考えられる。

本章では、ノヤ村の絵師・絵語り師から世代の異なる 2 組の夫妻を例⁶⁾にして、ポトゥアの担い手の側面から経年変化に着目するとともに、ノヤ村のポトゥア集落で絵師・絵語り師が増加している要因について探る。



写真1 復活した集団歌唱の絵語り
(インド・ノヤ村 2023年10月4日 筆者撮影)

2.1 世代の異なるポトゥア夫妻の事例

第3世代：夫シャムシュンドル（80）と妻ラニ（70）

ノヤ村での調査中、村の黎明期における中心人物であり、絵師・絵語り師の重鎮として頻繁に名が挙がったのが、第2世代のドゥクシャム・チットロコル（Dukhushyam Chitrakar 1943 頃–2021）と、その甥で第3世代にあたるグルボド・チットロコル（Gurupada Chitrakar 1965–2021）であった。両者ともに、Covid-19のパンデミックによる厳しいロックダウンの最中、2021年に逝去した。ここでは、まずドゥクシャムの姉の娘であり、グルボドの実姉にあたる第3世代のラニ・チットロコル（Rani Chitrakar 1953–）と、その夫シャムシュンドル・チットロコル（Shyamsundar Chitrakar 1943–）を事例として取り上げる。夫妻は他村で生まれ、後にノヤ村に移住した。特にラニは、ノヤ村のポトゥア共同体の初期を知る貴重な人物である。

ラニは、東メディニブル県ハッシュォラ（Haschora）で、ヒンドゥーの神像製作を生業とするムスリムの家庭に生まれた。その後、祖父母（第1世代）や両親（第2世代）とともにノヤ村に移住した。幼少期から、絵師・絵語り師としてポト絵を携え村々を巡る父・ガフル・チットロコル（Gaffur Chitrakar）に同行していた。



写真 2 かつて使用したポト絵の収納袋を肩から下げるシャムシュンドル・チットロコル
(インド・ノヤ村 2023 年 10 月 2 日 筆者撮影)



写真 3 ドゥルガ女神のポト絵を見せるラニ・チットロコル

14 歳のとき、親が決めた結婚により、東メディニプル県タムルク (Tamluk) 出身のシャムシュンドルと結婚し、ノヤ村で夫婦生活を始めた。シャムシュンドルの実家もまた、神像製作を生業とするムスリムのポトゥアであった。彼はノヤ村へ婿入り後から絵師の仕事に従事し、ラニも 20 歳頃から叔父のドゥクシャムに師事し、ポト絵や語り歌を学び始めた。1970 年代、既婚女性が村の外へ出掛けることや、女性が絵や絵語りに必要な技術を学ぶには強い風当たりがあった。村の男性ポトゥアから批判の対象にもなったという当時を振り返りながら、ラニは語る。

女性たちにとって、大変な時代だった。女性たちは縛られていて、歌を歌うのも、絵を描くのも制限されていた。外出することも難しかった。女性たちの夫が枷になっていた。「俺の嫁がなぜ歌を歌いに出る？」「なぜ絵を描きに行く？」「なぜ村の外に出る？」と言って。とにかく壁を乗り越えなければいけなかった。皆はからかったけれど。(ラニ・チットロコル 2023 年 10 月 2 日)

ラニは 1980 年代に集落の女性 20 名とともにグループを結成し、叔父のドゥクシャムを講師として迎え、ポト絵や語り歌を学ぶワークショップを開催した。参加した女性たちは夫から文句を言われることもあったが、「女性たちは田で働くば

かりで、女性はなぜチットロコルになれないのか」という強い問題意識を抱いていたという。その後、絵師・絵語り師に必要な技芸を習得し、1990年代⁷⁾に県の催事に参加していた医師から、「女性グループで歌を創作し、啓蒙活動をしてはどうか」と提案を受けた。集落の承認を得たのち、ピングラ市の州政府事務所（Pingla B.D.O. office）から活動費を受給できるようになった。以来、ポリオ、マラリア、デング熱、HIV など感染症の蔓延防止を主な主題とした歌を創作し、それをポト絵に描いて、県内各地に招聘されて歌う機会を得たという。

夫のシャムシュンドルは、ラニの活動を支える存在であった。農村では夫を亡くした女性は生きる糧を失い、他の男性と再婚せざるを得ない境遇に置かれていた。シャムシュンドルはこの慣習に疑問を抱き、女性が自立して生計を立てられる環境を作るため、ラニの活動に協力したと話す。

若くして夫を亡くした嫁は沢山いた。どうやって食べていく？ 家庭内暴力もあり、問題は山積みだった。女性が自ら稼ぐ何か手段が必要で、そのために闘った。（描いたポト絵が表紙に採用された書籍を見せながら）これが女性のための委員会会長だったアメリカ人。コルカタにあった女性支援団体を訪れ、ポト絵を見せた。なぜ女性たちは、こんなに苦しまなければならないのか。女性たちを助けるために随分と苦勞をした。女性たちを知事や政府の役人のもとへ連れて行き、訴えさせた。そのとき私は側に立って見守った。（シャムシュンドル・チットロコル 2023年10月2日）

ピングラ市の州政府事務所や、恵まれない女性や子供の権利のために活動する女性支援団体（Women's Co-ordinating Council：1960年創設でコルカタに本部を置き、2025年現在、71団体を統括するNPO）を夫妻は訪問し、二人三脚で女性支援活動の基盤を築いた彼らのリーダーシップやその功績は大きい。

シャムシュンドル自身もポト絵と絵語りを通じてさまざまな社会課題に切り込み、教育機関でも地道に啓蒙活動をしてきた。なかでも彼が尽力した主題の一つが、ダウリと呼ばれる結婚時に花嫁側が用意する持参財をめぐる問題である。インドではダウリが少ないことを理由に、嫁ぎ先からの暴力や、殺害される事件が多発し、長年にわたって深刻な社会問題となってきた。1961年ダウリ禁止法（Dowry Prohibition Act）が制定され、持参財の要求や授受が禁止された。さらに1983年には刑事訴訟法に、2005年には女性保護法にダウリに関する条文が追加され、法整備が進められてきた。しかしながら、北インドでは現在もダウリをめぐ

る事件や、男性から女性への暴力は後を絶たない。シャムシュンドルはこの根深い問題の廃絶に向けて、ポト絵を描き、歌を通して啓蒙を行ってきた。その取り組みは、単なる社会活動にとどまらず、ポトゥアとしての存在意義を示すものでもあった（資料 1, 資料 2）⁸⁾。彼がこれまでに絵語りを実施した教育機関や団体からは、数多くの感謝状が贈られ、それを誇らしげに見せながら、ダウリに関する啓蒙活動について彼は語る。

幼いうちに嫁ぐ女性たちはとても大変だった。叩かれたり、殴られたりしていた。だから嫁殺しを防ぐためのポト絵を作った。農村では結婚時の持参財が原因で多くの問題が起こっていた。結婚してダウリを渡せなかった。それで嫁は殺されてしまった。姑、そして夫、それから夫の祖父。彼らが嫁を殺して、木に吊るした。灯油をかけて、火をつけ、焼き殺す。そして警察がやって来て、彼らを連行していく。もし暴力を振って嫁を殺せば警察に捕まり、そして裁判になる。それを人々にポト絵で理解させた。（シャムシュンドル・チットロコル 2023 年 10 月 2 日）

シャムシュンドルは 80 歳を超えた現在も、啓蒙的な主題を描いたポト絵の制作に意欲的である。彼の工房には、森林破壊が引き起こす洪水への警鐘を鳴らし、植林の重要性を訴えるポト絵が並んでいる。また妻ラニは、ノヤ村の女性ポトゥアの先駆者として尊敬を集め、過去には米国へ招聘され、州政府から勲章も受賞した。現在も現役で活動する傍ら、孫世代への指導にも力を注ぎ、一族の中心として大きな影響力を持っている。こうした女性ポトゥアの活躍により、世帯ごとに経済を独立させる核家族化が進んでいる。シャムシュンドルとラニのように、夫婦であっても個人主義を徹底し、絵の販売収入をそれぞれ別会計にするケースも珍しくない。



場面 1

中央に座す花婿と花嫁
結婚式で親族から祝福を受ける

場面 2

持参財が十分ではなかった花嫁
姑や花婿、親族によって殺害される

場面 3

首吊り自殺のように見せかけて
殺され、木に吊るされた花嫁

場面 4

灯油を掛け、火をつけられる花嫁

場面 5

警察官がやってきて
姑と花婿は連行される

場面 6

花嫁の殺人容疑で裁判にかけられる

場面 7

花嫁殺人の罪で収監される

資料 1 ポト絵「ダウリ」(花嫁の持参財殺人)
シャムシュンドル・チットロコル作 (36cm × 169cm 巻物 国立民族学博物館所蔵 H0328054)

さあ、さ、皆さん！聞いてくれ。

ダウリ制度があるために、数えきれない女性達、拷問されていますよね。
惨い話じゃないですか！
どこもかしこもメチャクチャ、
しかも、他人に金やりながら、通りに出なきゃならぬとは、
なんと馬鹿げた慣習か！

我がベンガルの地では今、これ宿命と観念し、
ダウリ制度があるために、女性はずいに死んでいく。
誰もが知ってることだよ、いつも目にするものだから。
止むに止まれず毒を飲む女性の自殺だけでなく、
男女が共に心中し、若い身空で死んでいく、ダウリ制度があるために。
誰もが知ってることだよ、いつも目にするものだから。
でも何故に花嫁が、ダウリ制度で悩まねばならないのかね。
そしてどうして花嫁が、こんな死に方しなければならないのかね。
それとも何百もの人が、このベンガルの土地ですよ。

あの家この家差別なく、女性は遂に死んで行く、ダウリ制度があるために。
あの家この家差別なく、喧嘩が絶えることはなし、それは女性であるが故。
ついに花嫁殺されて、姑は嫁を首吊りの如く見せかけ、知らんぷり。
こんな光景見ていたら、涙の止まる暇はなし。
だから今こそ、ベンガルでダウリ制度の全廃を！
インド政府はダウリを止めると、反ダウリ法可決させ、
それで多くの女性の命が救われました。

そこで私はこのことをインド全土に言明します。
この法に従わなければ、とても危うい立場に置かれますよ。
この法に従いなさい、そうすれば皆幸せになれるのです。
花嫁の父親も幸せ一杯、平安を得ます。
しかし、もし花婿達の父親がダウリを要求するならば、法の裁きが待っています。
そして、もし花嫁達の父親がダウリを渡すなら、彼らもちろん裁かれます。
もし、花婿の父親がダウリを受け取るのであれば、罰金刑に処せられます。
そして、もし花嫁の父親がダウリを納めるのであれば、彼にも裁きが待っています。

この法に従わなければ、とても危うい立場に置かれますよ。
こうしてカリ女神の怒りを静め、かくして道德の墮落が去るのです。
さもなければ、人類の活動は終わりになり、
神や女神は皆眠りにつき、神聖な場所は破壊され、
宗教はなくなり、徳も残らず、それはまさに地獄の穴で、
花嫁を殺し、その穴にほうり込むことになるのです。

歌詞 1 ポト絵「ダウリ」の歌詞
シャムシュンドル・チットロコル作、金基淑訳（金 2000: 267-268）

第5世代：夫シュショボン（27）と妻ロヒ（25）

ノヤ村生まれの第5世代にあたるシュショボン・チットロコル（Susovan Chitrakar 1997-）は、第4世代のオミット・チットロコル（Amit Chitrakar 1970-）とジューマ・チットロコル（Jhuma Chitrakar 1977-）の長男である。一家はシュショボンの祖父の代に、ヒンドゥーへの再改宗が進む他村を離れ、イスラーム信仰を続けるためにノヤ村へ移住した。

シュショボンは幼少期から、祖父や父がポト絵を描く姿を見て育ち、父の指導を受けながら絵師として自立した。現在は、妻ロヒとともに2人の子どもを育てながら、夫妻で作品制作に取り組んでいる。生計を立てるため、各地のクラフトフェアに出展し、西ベンガル州内だけでなく、首都デリーをはじめとする国内の都市部にも作品を携えて出稼ぎに出る。また、急速に発展したインドのデジタル社会にも適応できるデジタルネイティブ世代である。彼は、絵師としての生業にスマートフォンは不可欠な道具だと語る。

（スマートフォンを）どのように使うか。例えばフェアへ商売に行く。みんな現金は持ち歩かない。2,000 ルピーの絵を購入したとする。その手持ちはない。そこでオンライン決済のフォンバイやグーグルペイがあれば、それで商売ができる。お金を受け取れる。これがなければ、せっかくの機会なのにお客は行ってしまう。もし今、商売するならこれは覚えないと。

デリーにはデリーハート（Dilli Haat）という展示販売の場所があって、料金を払って出



写真4 シュショボンとロヒ夫妻（2023年10月3日 筆者撮影）

店する。一度払えば後は自分の収入、15 日間で 10,000 ルピー⁹⁾を払う。場所を得ると大勢の人が買い物に来る。10,000 ルピーを払えば、50,000 ルピーの商売ができるだろう。(シュショボン・チットロコル 2023 年 10 月 3 日)

かつて村々を吟遊していた頃は、ヒンドゥー教徒の農民が主な聴衆であった。だが現在では、農村で描かれた民族画にノスタルジックなまなごしを向ける都市部の人々が主な対象である。ノヤ村のポトゥアの人口が増え、絵師を専業とする同業のライバルも多い。その中で、デジタルツールを巧みに活用しながら積極的に販路を拡大することは、経済的な側面だけではなく、自作品や自身の名前を広めるといった個人のアイデンティティとも関わり、ウェルビーイング獲得のための重要な戦略の一つとなっている。

ノヤ村のポトゥアの結婚においては、第 3 世代のシャムシュンドル・ラニ夫妻と同様に、現在もポトゥア同士の内婚が主流である。シュショボンの妻ロヒの実家も、他村でヒンドゥーの神像製作を生業とするムスリムのポトゥアであり、彼女は 2016 年にノヤ村へ嫁いできた。しかし、結婚相手の探し方は現代的になっていると夫妻は語る。

シュショボン「(結婚のきっかけは) Facebook だよ。まず友達になってチャット。自分たちは同じジャーティ。彼女も僕もチットロコルで、それはぴったり。違うジャーティじゃない。同じムスリムのチットロコル。それで話は進展し、家族と話し合って結婚した。結婚前に一度紹介して、家族と相談して決めた。」

ロヒ「一度だけ会って、それで結婚した。両親に、私は彼を愛しているって話した。彼も私を好きだと言っている。それで会ってみることに。彼の両親が私の両親と話すために、家にやってきた。お互いに好き合うなら結婚させましょうと。お互いの両親が会って結婚することになった。何も問題はなかった。」(シュショボン・チットロコル、ロヒ・チットロコル 2023 年 10 月 3 日)

他村から嫁いだロヒは夫シュショボンとともにポト絵や絵付け作品の制作に励む傍ら、ノヤ村の女性ポトゥアによる集団の絵語りにも加わり、絵語り師としても活躍する。

2.2 イスラームとヒンドゥー社会の狭間で生きる柔軟性

「担い手」における信仰の側面から金の 1988 年調査と筆者の 2022 年調査を比較

すると、ノヤ村のポトゥアは現在もヒンドゥー教に再改宗することなく、イスラーム信仰を続けている。アザーンの合図で集落内のモスクへ礼拝に向かう姿は、日常的な光景である。彼らはヒンドゥー教徒を相手とする生業と、自らが信仰するイスラームを、どのように自己の中で折り合いをつけてきたのだろうか。

前述のシュショボン¹は、幼少期に割礼儀礼を受け、毎週金曜日にはマスジットに通うものの、1日5回の礼拝は行わず、イスラームの聖典であるクルアーンを読むこともできない。イスラーム名も持たず、シュショボンというヒンドゥー名とチットロコルこそが自らの名前だと認識している。金の1988年調査ではイスラーム名のみをもつポトゥアが最多で、次に両方の名をもつ者が多かったことが報告されている（金2000: 188–190）。しかしながら、筆者が2022年調査時に出会ったノヤ村生まれの第5世代は、シュショボンのようにヒンドゥー名のみをもつポトゥアが多く、世代間で異なる傾向が見られた。

もしムスリムの名前だったら具合が悪かった。絵語りなどの仕事はいつもヒンドゥー教徒が相手、イスラームの名前だと生活するのが大変だったと思う。彼らとはヒンドゥーの名前で仕事をしている。儀礼に関すること、神像作り、全てヒンドゥー教徒との仕事だから、ヒンドゥーの名前にいる方が生きやすいよ。

正直に言うとイスラームを深く掘り下げたことはない。イスラームの信徒は絵を描いてはいけない。ムスリムは絵を描けない。もし教えを受け入れたならば、絵を止めなければならない。それでは腹は満たされない。だからイスラームと絵、両方を受け入れている。（シュショボン・チットロコル 2023年10月3日）

生まれた子にヒンドゥー名を付け、自らもヒンドゥー名を名乗ることは、伝統的生業に基づく、ノヤ村のポトゥアにとっての戦略である。また具象画を描く絵師であることは、イスラームの教えではハラーム（禁忌）とされ、宗教的な葛藤は皆無ではないものの、収入源である生業を手放すことはない。

シュショボンは「ムスリム（ムサルマン Musalman）ではないけれど、自分たちはイスラームを信仰している」と話す。この発言は、ノヤ村のポトゥアの祖先がヒンドゥー教からイスラームへ改宗した者であり、「正統な」ムスリムではないと彼ら自身が認識していることを如実に示している。ムスリムでありながら、ムスリムとは言い切れない（言い切らない）、この歯切れの悪い曖昧さこそが、不安定な状況を生き抜いてきた彼らの知恵であり、戦略でもある。ポトゥアを取り巻く

ムスリム社会においても、ヒンドゥー社会のカーストのような宗教的序列が存在する。ノヤ村のポトゥア集落は、同村のムスリム居住区から約 1km 離れており、地理的な距離を保ってきた。彼らがヒンドゥー教からイスラームへ改宗した集団であることや、ヒンドゥー教徒を相手に生業を続けてきたことは周知の事実であり、同村のムスリム共同体からは同等ではなく周縁的な位置付けがなされ、ポトゥア自身もそれを認識している。このように、ヒンドゥー社会やムスリム社会の狭間に生き、他村からの移住者によって形成されたノヤ村のポトゥア集落が、外部からの攻撃や対立を避けながら共同体を維持できたのは、1988 年調査で金が指摘するように彼らの便宜主義的な宗教観と、他集団との関係性や距離感を巧みに調整してきたことによる部分が多い。

こうしたノヤ村のポトゥアたちを、かつての吟遊先であったヒンドゥー教徒の農民たちはどのように迎えていたのだろうか。2023 年 10 月の調査では筆者の要望に応え、ラニはシュショボンらの若手男性ポトゥア 2 人を引き連れ、30 年以上前に絵語りをして巡った近隣の 2 村を再訪した。かつて米の収穫期後に訪れていた農家では、突然の来訪にもかかわらず、多くの村人が絵語りを聴くために集まり、当時を懐かしむ声も聞かれた。

女性村人「時々来ていた、すごく久しぶり。」

男性村人「7, 8 歳の頃、絵語りを見ていたよ。彼女（ラニ）の祖父たちがポト絵を持ってきたのを聴いていた。」

ラニ「これは智慧を伝える、至福の語り。」

女性村人「良い見せもの、とっても良いもの。」

（ラニ・チットロコルと村人 2023 年 10 月 2 日）

ラニの独唱と、絵師として活躍する 2 人の男性ポトゥアの斉唱とが交互に繰り返されながら、ヒンドゥーのクリシュナ神と牧女ラーダーの物語を描いたポト絵が展開されていき、一つの物語は 10 分ほどで完結する。集まった村人たちにノヤ村のポトゥアについて尋ねると、次のように答えるのであった。



写真 5 再訪した村で絵語りの後、村人から米を受け取るポトゥアたち
(2023 年 10 月 2 日 筆者撮影)

岡田 異教の神を語り、社会課題を歌う

シュショボン「僕たちの宗教（ドルモ dharma）は知っている？」

村人「チットロコルでしょ。」

シュショボン「チットロコル以外は知らない？」

村人「知らない。私たちベンガル人（Bengali：ここではヒンドゥー教徒の意味）はこの仕事はしない。チットロコルだけが、やって来ていた。」

村人「ポト絵を見せに来たから、私たちはみんなで集まって、お米やボン米など色々あげた。時には食事も振る舞った。お腹が減ったから食べたいと言われ、食事を出していたよ。」

（シュショボン・チットロコルと村人 2023 年 10 月 2 日）

当時の来訪を知るヒンドゥー教徒の農民たちは、ポトゥアが自分たちと同じヒンドゥー教徒ではないことを認識しつつも、ムスリムであることには触れず、単にチットロコル（ポトゥア）として受け入れていた。この短い対話から2つの側面が浮かび上がる。第一に、金が指摘する宗教的状況主義の戦略をポトゥアが徹底してきた点である。つまりヒンドゥー教徒を相手にする生業において、自らの宗教を隠すという行為がそれに該当する。ノヤ村の集落ではムスリムであることについて、前述のシュショボンの発言に見られるように、インタビューや質問の中で澁みなく応えてくれたポトゥアだが、集落外では現在も金が指摘する宗教的状況主義を貫いていた。しかし、想定外な驚きもあった。それは前述の農民との対話から、村人がポトゥアを非ヒンドゥー教徒であると認識しつつも、チットロコルというジャーティに属する人々として、かつても現在も受け入れていたことであった。

これはつまり、第二の側面として、ポトゥアが農村社会を生きる上で、異宗教間のバランスと距離感を保ちながら共生してきたこと、そして農村社会においてジャーティの概念が根強く維持されてきたことが指摘できる。ベンガルの農村社会においてポトゥアに向けられるまなざしは、「宗教」ではなく、チットロコルという「ジャーティ」の属性に基づいている。ここで、ヒンドゥー社会の身分制度である「カースト」と、「ジャーティ」の関係について整理すると、カースト制度とは英国植民時代に社会に浸透していたジャーティ（世襲の職能・内婚集団）と、浄／不浄に基づくヒンドゥー教的な価値観による社会階層「ヴァルナ」¹⁰⁾の概念が合わさって形成されたものである（鈴木 2024: 3, 6）。インド社会においてカーストの序列関係は現在も根強く、特に結婚や食事の場面で顕著に表れる。例えば、

食事の授受においては、浄性の高いカーストから低いカーストへの一方通行に限定され、その逆は不浄性の感染として忌避される（鈴木 2024: 154–155）。一方で、ノヤ村のポトゥアが暮らすベンガルの農村社会では、ジャーティは職能集団間の分業を通じた相互依存の関係として機能している。実際、かつてポトゥアが村を訪れた際、ヒンドゥー教徒の農民たちは米や野菜を渡すだけでなく、食事を振る舞ったこともあったといい、浄／不浄に基づく排他性は見られない。

金が「インドの人々にとって宗教がすべてであり、宗教のためには命さえ惜しまないという印象を抱きがちである。（省略）しかし、忘れてはならないのは、人々と宗教のかかわりを宗教のみに焦点を当てて考えるのではなく、その人や集団を取り巻く様々な環境を常に考慮しながら考察しなければならない」（金 2000: 4）と指摘するように、ノヤ村のポトゥアの事例からは、イスラームとヒンドゥーの狭間で巧妙に生きる姿と同時に、吟遊する異教徒を排除することなく、彼らに食糧や食事を施してきたベンガル地方の農村の社会的包摂性も窺える。

金の著書『アザーンとホラ貝』（2000）を新刊紹介した論考では、「N 村の人々がイスラームを維持するということの積極的な理由は何か」という点の更なる掘り下げが期待されていた（池田 2001: 370）。現代のノヤ村のポトゥア社会では、前述のシュショボンの言説が物語るように、イスラーム名を持たず、毎日の礼拝は行わず、クルアーンは読めない人々も多く、敬虔なムスリム像とはかけ離れている。したがって、信仰の側面においてイスラーム信仰を維持する積極的な理由を挙げることは困難である。他方、ノヤ村のポトゥアは、1950 年代にヒンドゥー教への再改宗を逃れて、近隣から移住してきた集団の集合体である。更に、シャムシュンドルとラニ夫妻やシュショボンとロヒ夫妻のように、他村の神像製作を生業とするムスリム・ポトゥアからノヤ村へ婿入り・嫁入りをし、内婚の姻戚関係によってポトゥア集落の人口は増加してきた。したがって、イスラームを維持することの積極的な理由は、ムスリム・ポトゥアの人口と人的ネットワークの維持・拡大と結びついているというのが筆者の見解である。

2.3 女性ポトゥアの社会進出と絵師・絵語り師の専門化

金の 1988 年調査と筆者の 2022 年調査を比較し、ノヤ村のポトゥアを絵師・絵語り師としての担い手の側面から考察すると、大きな変化として、まず次の 2 点

を指摘することができる。

第一に、女性ポトゥアの絵師・絵語りとしての社会進出が顕著である。金の1988年調査時は、近隣の村を巡る絵語りは衰退傾向にあり、その担い手は男性中心に22人存在し、絵師として自立する女性が4人いることが報告されている（金2000: 54）。その内の一人が、女性グループの結成やポト絵・語り歌のワークショップの開催に尽力したラニである。彼女の活動を先駆けとして、絵や歌の技術を磨いた村の女性たちは、州政府の地区事務所やNPOからの活動費を得ながら、ピングラ市内の各所に招聘されて感染症予防などの社会問題を主題とした絵語りを発信する機会を得たことはすでに述べた。こうした変化に伴い、2020年時点で絵師・絵語り師という伝統的生業に従事するノヤ村のポトゥアは254人に増加し、そのうち女性ポトゥアは124人と、全体のその半数を占めるまでになった。

第二の変化も、女性ポトゥアの社会進出と関連している。金の1988年調査では、農家に雇われて日雇い労働的な立場で農業に従事する多種兼業者が多かったが（金1992: 152）、現在では夫婦でポト絵の制作に従事することが増え、絵師・絵語り師の専門化が進んでいる。それに伴い、核家族化も進行している。1950年頃から他村から移住してきた15の父系集団を基盤とするノヤ村ポトゥアでは、結婚は同ジャーティ内での内婚が主流である。夫側が結婚を機にノヤ村へ移住する事例も少なくなく、夫婦で同じ工房を共有する形態が一般的になった。ただし、男性は絵師に専念し、女性は絵師と絵語り師の両方を担う場合が多い。ポト絵の制作においても、夫婦での関わり方はさまざまである。シャムシュンドルとラニのように、それぞれが個別に制作・作品管理・販売を行う夫婦もいれば、シュショボンとロヒのように、分業しながら作品制作に励む夫婦もいる。また、3世代以上の一族が隣接して居住する傾向は続いているが、台所を含む居住空間を別とした核家族化が進み、工房や収入の管理は世帯ごとに独立する傾向が強まっている。

このように女性の進出や他村のムスリム・ポトゥアとの内婚によって、ノヤ村の絵師・絵語り師の人口が増加し、専門化や核家族化が進んだ結果、集落内は同業者ばかりとなり、言い換えればライバル関係も生まれている。実際、コロナウイルスのパンデミックが収束に向かい始めた2022年4月に筆者がノヤ村で調査を開始した際、久々の外国人訪問者ということもあり、次々と「うちの工房にもポト絵を見にきて」と筆者は声を掛けられた。インタビュー調査のために訪れた工

房では、何十枚ものポト絵が広げられ、「私の作品、買うの？ 買わないの？」と言わんばかりの鋭い目が向けられた。ポト絵の販売はノヤ村のポトゥアにとって最大の収入源であり、作品の売買や制作依頼をめぐる競争も激しい。こうした状況の中で、妬みや小さなトラブルが生じることもあるという。

2.4 アーティストとしての新たな展開

金の 1988 年調査では見られなかった第三の変化として、「アーティスト化」という現象を指摘することができる。集団で継承してきた伝統的技法を受け継ぐ、集団構成員を「職人」とするならば、「アーティスト」とは旧来の技法や表現内容に捉われず、創造的で自由な表現手法を切り開き、個人として名前が全面に出る存在と言える。ノヤ村のポトゥアが歩んで来た道は、職人のように伝統的技法を踏襲し、吟遊した村々で日々の食糧を得ていた時代から、自作品の販売が最大の収入源の時代へと移行していった。その結果、売名や自作品に対する外部評価を強く意識する風潮が浸透し、これはアーティスト化という現象と関係している。

今日のノヤ村のポトゥアたちは、ポト絵をインド国内の民芸賞へ出品することが常態化し、自作品への外部評価や州・国家単位での個人表彰に対する関心が高まっている。前述のラニは西ベンガル州政府の賞を受賞し、さらにその上位にあたるインドの国家勲章（National Award）を受賞したノヤ村のポトゥアは、現在 2 名のみである。2004 年に国家勲章を受賞したグルボド・チットロコルはラニの実弟であり、絵師と絵語り師の才能を兼ね備え、米国などにも招聘されて活躍していたが、2021 年に逝去した。もう一人、2006 年に国家勲章を受賞したアンワル・チットロコル（Anwar Chitrakar 1980-）は、ノヤ村では異色の存在である。ここでは、アンワルの事例を考察する¹¹⁾。

西ベンガル州の州都コルカタ北部にあるネータージー・スパース・チャンドラ・ボース国際空港の到着ゲートにある壁面には、横数メートルにわたる大型のキャンバスが飾られている。ヒンドゥー教のドゥルガ（ドゥルガー）女神を中心に、3 体の女神像の製作過程が描かれたユニークな構図となっており、ドゥルガ信仰や神像製作といったベンガル文化を象徴する、まさにベンガルの玄関口に相応しい絵画である。この作品の作者であるアンワル・チットロコルはノヤ村出身・在住であるが、ノヤ村のポトゥアたちが描くポト絵とは、様式、構図、彩色、使用す

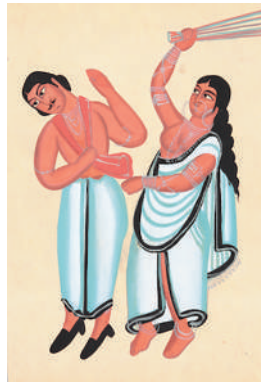
る素材の全てが異なる。現在、国内外の展覧会への出品や芸術祭への招聘を通じ、インド国内で最も名の知れたポトゥアとなり、その経歴もまた異色である。世襲のポトゥアは幼児期から親や親戚の絵の技術を見て学ぶが、アンワルは10代の頃は仕立屋として働き、20歳を過ぎてから絵画を志すようになった。彼は村で受け継がれる伝統技法や題材とは異なる、新たな要素の必要性を感じ、19世紀のカリガト絵の技法を独学で習得したという。

カリガト絵とは、19世紀後半から20世紀初頭にかけて、英国植民地時代の中心都市であったカルカッタ（現コルカタ）南部で興隆した独自の絵画様式及びその作品を示す。1809年に建立されたカリガト地区カリ寺院（Kalighat Kali Temple）と関係している。カリ（カーリー）とは殺戮と破壊を象徴するヒンドゥー女神であり、特にベンガル地方では信仰されている。血を好む女神のため、毎朝、生きた山羊が供物として捧げられる。寺院は建立当時から現在に至るまで、多くの巡礼者や観光客を引き寄せている。カリガト絵の起源に関する歴史的な記録は存在しないが、寺院の建立に伴い、周辺が観光地化したことで、新たな商機を求めてベンガルの農村部から多様な職人が徐々に移住した。そして、その中には絵師を生業とするポトゥアたちも含まれていた。農村から都市のカリガト地区に移住したポトゥアたちは、それまで絵語りで用いていた複数のコマを連ねた長大な物語絵巻とは異なり、1コマのみの構図を採用し、枠や背景の装飾を排除した。さらに、躍動的で大胆な輪郭線の特徴とする洗練された技法へと変化させた。同時に、英国製の強度のある紙を使用し、自然顔料ではなく既製の絵具を用いることで、カリガト絵の独自の様式を確立した。カリ女神やヒンドゥーの神々、都市の日常風景が主な主題として描かれ、寺院を訪れる人々にとって格好の土産品となった。19世紀後半には、都市の絵画としてカリガト絵はインド国内のみならず、外国人の間でも人気を博したが、20世紀初頭には一時衰退した。

資料2～資料4は、国立民族学博物館が所蔵するカリガト絵¹²⁾の一部であり、制作年代や作者の詳細は不明であるが、現存するカリガト絵によく見られる主題と構図を持つ。資料3には、箒で男性を叩く女性が描かれている。19世紀末のカルカッタでは、一部の裕福な男性がパーティーや娯楽に溺れ、高級品や料理に浪費し、贅沢三昧の結果、一文無しとなって妻や愛人に嘲笑されることがあった。この作品はそうした世相を反映し、教訓的なメッセージを含んでいる（Jain 1999:



資料 2 カリガト絵
作者不明 (54cm×67cm 国立
民族学博物館所蔵 H0326326)



資料 3 カリガト絵
作者不明 (36cm×53cm 国立
民族学博物館所蔵 H0326322)



資料 4 カリガト絵
作者不明 (55cm×67cm 国立
民族学博物館所蔵 H0326340)

144-145)。また資料 4 には、魚を咥えた猫が描かれている。この主題は、1870 年以降、風刺的な要素が加わったことで登場した (Archer 1953: 12, 49)。この図像は、叙事詩『マハーバーラタ』に登場する、修行者のふりをしながら密かに鼠を食べ続ける猫の話や、「猫は魚を食べず、菜食以外の食べ物には手をつけず、カーシー（ヒンドゥー教の聖地ヴァーラーナシー）に行く決意をする」というベンガル地方の諺に関連している。換言すれば、いくら努力をしても欲望を完全に制御することはできないという人間の本質を風刺し、宗教上、肉や魚が禁じられているにもかかわらず、密かにそれらを食べ続ける一部のバラモン僧の偽善を象徴している (Sinha and Panda 2011: 26, 69)。このように、カリガト絵は時代を映す鏡であり、社会的弱者の感情を反映しながら、富裕層の凋落やバラモン階級の偽善を嘲笑するなど、風刺の精神に満ちた芸術であった。

アンワルの作品には、こうしたカリガト絵の影響が色濃く見られるものが多い。ロンドンのヴィクトリア&アルバート博物館に収蔵されている彼の 3 点の作品¹³⁾からも、その影響を窺うことができる。ノヤ村で彼自身に行ったインタビューでは、カリガト絵や西洋文化の要素を取り入れながら、新たなポトゥアの様式を常に追求していると語った。また、ノヤ村の伝統的な作風をそのまま再現することは、自身の創作活動には適していないとも述べている。彼の作品は、伝統的な神話や依頼されたテーマを基礎とすることもあるが、制作時には心象（心の中の現れるイメージ）を表現することを重視しているという。筆者が「制作時に歌のイ

メージや歌詞を考えているのか」と質問したところ、「自分の作品は歌うための絵ではないため、歌詞は創作時には考えない」という返答であった。この発言は、ポトゥアの伝統の継承や革新を議論する上で、注目に値する。すなわち、ノヤ村のポトゥアたちは絵師であると同時に絵語り師であり、絵語りのためにポト絵が必要である。歌と絵は昔も今も不可分の関係にあると、筆者自身は村のポトゥアたちとの対話を通じて捉えてきた。ポトゥアの絵語りは、歌の旋律による音楽的側面、歌詞による言語・文学的側面、絵による視覚・美術的側面を兼ね備えた総合芸能であるというのが、それまでの認識であった。しかしながら、アンワルの発言は、こうした理解とは異なるものであった。さらに、国内外で最も高名なポトゥアである彼が、伝統的な生業やそれに基づく作風と必ずしも一致しないことは、筆者にとって衝撃ですらあった。裏を返せば、「絵巻を描いて、絵語りを継承してこそポトゥアである」という考え方が、筆者自身の一方的な他者表象であったことを省察させられた瞬間でもあった。事実、アンワルのような個性的で革新的な表現方法を追求し、職人ではなくアーティストとして進化を遂げる存在に対して、前述のシュショボンをはじめとするノヤ村のポトゥアたちの間には、羨望はあっても伝統からの逸脱に対する反感は見られない。

かつて農村から都市へと移住したカリガトの絵師たちが、農村における絵語り師としてのポトゥアとは完全に生業方法や絵画様式を変化させ、風刺を取り入れたように、ポトゥアたちは伝統的な技法に固執せず、その時々状況や需要に応じて柔軟に変化を遂げてきた。実際、ノヤ村のポトゥアの工房を見ても、伝統的な主題を扱った絵巻の隣には、社会課題を描いたポト絵や、カリガト絵画を模した作品すら今日では並んでいるのである。

ポトゥアの専門化や核家族化が進むことで、ポトゥアの数自体が増加し、受賞経験といった外部評価や販路・人脈の大小によってアーティスト化という現象が生まれ、同業者内に経済格差を齎していることは否めない。しかしながら、それに伴う著作権保護やアイデアの独占といった傾向は、ノヤ村のポトゥアたちには見受けられないことも特徴である。こうしたアーティスト化による個人主義と、集落の共同体成員としての集団性との狭間で、ポトゥアたちは揺れ動く。こうした個人と集団のアイデンティティの問題に関しては、第4章で詳述する。

3 ポト絵と語り歌にみる経年変化

近隣の村々を歩いて巡り、集まった農民たちの前で絵語りを披露した時代と、作品販売が主収入となった現在を比較すると、ノヤ村のポトゥアにおけるポト絵や語り歌はどのように変容したのだろうか。本章では、金の1988年調査と筆者の2022年調査を基に、ポト絵とその語り歌の「内容」に着目して、継承している要素あるいは変化した要素について考察する。前半では、ポト絵に描かれる主題や作品制作の特徴を中心に比較分析する。後半では、語り歌の歌詞や旋律、歌唱形態の変化を検討し、経年変化を明らかにする。

3.1 伝統的・社会的・啓蒙的主題の共存

ノヤ村のポトゥアがポト絵に描き、歌ってきた物語は、第一に、代々伝承されてきた伝統的な主題、第二に、その時々々の社会問題を扱った啓蒙的な主題に大きく分類できる。表1に示すように、伝統的主題には、ヒンドゥー教のドゥルガ女神や蛇の女神モノシャ（マナサ）、クリシュナ神などが登場する物語のほか、古代インド叙事詩『ラーマーヤナ』の一部抜粋やイスラームの聖者に関する物語も挙げられる。

一方、社会的な主題には、実際に起こった津波や洪水被害を題材とした災害に

表1 ノヤ村の絵語りににおける伝統的な主題と社会的・啓蒙的な主題¹⁴⁾

系統分類	主題	題材
伝統的主題	ヒンドゥー信仰	「チョンディ・モンゴル（ドゥルガ女神）」 「モノシャ・モンゴル（蛇の女神モノシャ）」 「クリシュナ・リラ（クリシュナ神と牧女ラーダー）」など
	ラーマーヤナ	「シータ・ホロン（シータの誘拐）」
	イスラーム聖者	「ショット・ピル」
社会的・啓蒙的主題	災害	「洪水（森林破壊への警鐘）」「植林」「津波」「地震」など
	感染症	「マラリア」「ポリオ」「HIV」「コロナウイルス」など
	農村社会問題	「ダウリ」「女子教育」「識字教育」など
	歴史的出来事・人物	「原爆」「バーブリー・マスジッド（アヨーディヤー事件）」 「September 11」「アフガニスタン紛争」「サヒブ」 「インディラ・ガンディー暗殺」「マザー・テレサの死」など
その他主題	先住民サンタル	「サンタルの結婚式」
	風刺	「魚の結婚式」

関する作品や、インドの農村で深刻な問題とされていたマラリアやポリオなどの感染症予防を啓発する作品がある。また、前述のダウリに関連する殺人や暴力、女子教育の促進といった社会課題を扱った作品も含まれる。さらに州政府やNPO、社会団体から特別に依頼された作品もこのカテゴリーに属する。

これらの伝統的テーマや社会的テーマには属さない題材として、先住民サンタルの結婚式を描いた作品や、「魚の結婚式」のように弱肉強食の社会における権力構造を風刺した物語もある。これに関しては、本章の第4項で言及する。

3.2 ヒンドゥー文化に根ざした伝統的テーマ

ノヤ村のポトゥアによって描かれ、歌われてきた伝統的なテーマのレパートリーは、吟遊を止め、作品販売が主流となった現在では、需要の高いテーマに集中し、失われた物語も少なくない。特に絵語りは、歌詞集や楽譜といった書記伝承がなく、口頭伝承に依存しているため、担い手の記憶が継承の鍵を握る。世界各地の口承芸能に共通するのは、それが語り歌われ、踊り演じられる機会を失うと、人々の記憶から徐々に薄れ、やがて消滅してしまうことである。そして、一度消滅したものは、文字記録や録音がない限り、再現や復興が極めて困難となる。ノヤ村の場合、村の絵語りの代名詞とも言える、ヒンドゥー文化に根ざした伝統的なテーマは、今も多くのポトゥアによってポト絵として描かれ、絵語りが継承されている。例えば、ベンガル地方で人気の高いドゥルガ女神、蛇の女神モノシャ、クリシュナ神などのヒンドゥーの神々が登場する物語や、『ラーマーヤナ』のシータが誘拐される場面などがある。一方で、イスラームの聖者に関する物語は、その存在が危ぶまれている。金の1988年調査によると、当時は「ショット・ピル (Satyapir)」(金 2000: 56, 259–260) と呼ばれる物語が語られていた。これは、イスラームの聖者が姿を変えて宮廷の王の前に現れ、疑い深い王が最終的に聖者を拝み敬うまでの問答を綴ったものである。しかしながら、筆者の2022年調査では、そのポト絵の制作や絵語りを見聴きすることはなかった。現在、ノヤ村のポトゥアが描き、絵語りの機会が多い物語から、特にヒンドゥー文化と深く関連する3つのテーマを以下に取り上げる。

チョンディ・モンゴル

まず一つ目は、ベンガル地方で人気の高いドゥルガ女神が登場する「チョンディ・モンゴル」と呼ばれる物語である。このポト絵の冒頭のコマ（資料5）には、ベンガル人やヒンドゥー教徒であれば誰もが知るドゥルガ神話が象徴的に描かれる。神話では、魔王マヒシャの横暴によって天界の神々が追放される。この暴挙に怒ったシヴァ神とヴィシュヌ神が光を発し、その神々の光から誕生したのが戦いの女神チョンディであり、ドゥルガの別名である。勇ましい獅子を乗り物とし、神々から授かった品を複数の手に持つ女神チョンディは、マヒシャの軍勢を打ち破り、水牛に姿を変えたマヒシャに向かってシヴァ神から授かった三叉戟でとどめを刺す。

冒頭のコマでは、この女神チョンディの勝利の場面が描かれるが、それ以降のコマでは、女神ドゥルガの姿が見えるシマント少年と、その言葉を疑う王との問答が続く。少年が処刑の危機に瀕した場面で、ドゥルガが少年と王の前に姿を現す。これを目の当たりにした王は、以後、女神ドゥルガを信仰することを誓い、少年は同じ境遇で幽閉されていた父と喜びの再会を果たす。このようなヒンドゥー文化に根ざした物語の展開は、ノヤ村のポト絵と絵語りの典型である。つまり流布している神話の詳細を描くのではなく、ヒンドゥーの神を信仰すれば善を受け、



資料5 「チョンディ・モンゴル」冒頭（ラニ・チットロコル作）
*全体写真は資料6参照



場面 1

獅子に乗った女神チョンディ（ドゥルガ女神の別名）は、神々から授かった品々を手に持ち、水牛に姿を変えた魔王マヒシャを、シヴァから授かった三叉戟でとどめを刺す。（神話の描写）

場面 2

（左）ドゥルガの化身（壺の中に宝物）、（中央）壺売りの男カルケトゥ、（右）その妻ショントリと赤ん坊の息子シマント。

場面 3

シマントは学校で父親の名前を尋ねられるが、父親について何も知らなかった。母が妊娠中に、父カルケトゥは王に捕えられてしまった。ある日、池を訪れたシマントは、ガネーシャ神を抱えたドゥルガ女神を見て、神とは知らず、「お父さんを探して、お父さんに会いたい」と願う。

一方、父カルケトゥもまたシマントと同様にドゥルガ女神の姿を見ることができたが、王に疑われ、14年間牢獄に幽閉された。

場面 4

シマントは王に、「父親に会いたい、ドゥルガ神を池で確かに見た」と訴えるが、王は「それが嘘なら、お前の首を刎ねる。もし本当ならば、自分の娘（王女）と結婚させる」と言い渡した。

場面 5

王とシマントは池へドゥルガ神を見に行く。純粋な心を持つシマントにはその姿がはっきり見えたと、王には何も見えなかった。

場面 6

王は「ドゥルガの姿が見えない以上、お前の首を刎ねる」と怒り、シマントを処刑場へ連行する。泣きながらシマントは、ドゥルガ（左端）に向かって「私には見えるのに、どうして王は見えないのか」と訴える。ドゥルガは「王は罪深いので私の姿が見えない。恐れることはない。処刑場へ行きなさい」と答えた。

場面 7

ドゥルガ神が18本の腕を広げ、シマントを処刑台に載せた。するとシマントの涙を見たドゥルガが王の前に姿を現した。その姿を目の当たりにした王は驚き、今後はドゥルガを信仰することを誓う。遂に父カルケトゥ（左端）とシマントは無事に再会した。

資料 6 ポト絵「チョンディ・モンゴル」

ラニ・チットロコル作（56cm × 278cm 巻物 国立民族学博物館所蔵 H0328055）

疑えば災いが降りかかるという因果応報を、わかりやすく明示するものである。このように定型化された物語の展開からも、ポトゥアの絵語りがヒンドゥー教徒の聴衆に対し、神々への信仰心や善行を促す役割を果たしていたことがわかる。

ノヤ村のポトゥアたちは、ベンガル地方最大の祭礼であるドゥルガ・プジャの時期が近づくと、この「チョンディ・モンゴル」のポト絵を数多く制作し始める。ドゥルガ・プジャとは、悪と戦い勝利を収めたドゥルガ女神を祝福する祭で、10月前後の新月から10日間にわたって行われる。ベンガル地方では、都市部でも農村部でもドゥルガ女神像や、神像を祀るための「パンダル」と呼ばれる仮設の祠が毎年制作され、色彩豊かな祭りを演出する。ドゥルガ・プジャは2021年にユネスコの無形文化遺産にも登録された。この祭りの時期は、ポトゥアにとって年間を通じて最もポト絵の販売が見込まれる重要な機会である。

シータ・ホロン

ヒンドゥー文化と深く関わる人気の物語として、2つ目に挙げられるのが「シータ・ホロン」(シータの誘拐)である。これは詩聖ヴァルミーキが編纂した長編叙事詩『ラーマヤナ』全7巻のうち、第2巻の終わりから第3巻にかけての物語であり、ノヤ村のポトゥアたちによって描かれ、語られてきた。物語はコーサラ国の王とその3人の妃、4人の王子から始まる。長子ラーマはミティラー国の王女シータと結婚し、コーサラ国の都アヨーディヤーで幸せな日々を送っていた。だが、国王の第二王妃の策略により王位を継承することができず、妻シータと弟ラクシュマナを伴い、14年間も追放された森で暮らすことを余儀なくされる。その頃、ランカー島(現在のスリランカ)は魔王ラーヴァナが支配していた。ラーヴァナの妹シュールパナカーは、森で見かけたラーマに恋し、誘惑する。しかし、ラーマに拒絶され、さらに弟のラクシュマナにも拒まれる。怒ったシュールパナカーは腹いせにシータに襲いかかるが、ラクシュマナに耳と鼻を削がれてしまう。この仕打ちに激怒したラーヴァナは、魔術に長けたマーリーチャを使い、シータを誘拐する計画を企てる。マーリーチャは金色の鹿に化け、シータの注意をひき、シータはその美しい鹿を欲しがり、ラーマに捕まえるように懇願する。ラーマが黄金の鹿を追って森を移動すると、マーリーチャはラーマの声を真似て助けを求める。この策略によって、ラクシュマナもシータの元を離れてしまう。その隙に



場面 1

コーサラ国の都を去り、ラーマは妻シータと弟ラクシュマナを伴い森へと向かった。道中、ラクシュマナは木の枝を折り、シータの頭上に掲げ、彼女がゆっくりと歩けるように気遣った。

場面 2

3人は森の中の小さな小屋で暮らし始めた。ある日、魔王ラーヴァナの妹シュールパナカーが森に現れ、ラクシュマナを誘惑する。だが、その態度に激怒したラクシュマナはシュールパナカーの鼻を切り落とす。

場面 3

屈辱を受けたシュールパナカーが兄に訴えると、激怒したラーヴァナは魔術の名人マーリーチャを呼び寄せ、陰謀を企てる。

場面 4

マーリーチャは黄金の鹿に化け、ラーマたちが暮らす森に現れる。その美しさに魅了されたシータは、ラーマに鹿を捕えるように懇願する。ラーマは留守中、シータを守るようにラクシュマナに頼み、森の中を駆け巡る黄金の鹿を追う。

その後、ラーマは鹿を捕まえたが、マーリーチャはラーマの声を真似て、助けを求めた。

場面 5

その声を聴いたシータは不安に駆られ、ラクシュマナにラーマを助けに行くように頼む。ラクシュマナが去った後、ラーヴァナが現れてシータを捕まえる。

場面 6

ラーマを慕う霊鳥ジャターユは、シータの救出に駆けつけるが、激闘の末、魔王ラーヴァナはブラフマストラでジャターユの翼を切り落とす。瀕死のジャターユは地面に倒れ込み、ラーマに向かって「魔王ラーヴァナがシータを連れ去った。どうか彼女を救い出して」と告げると、そのまま息を引き取った。

資料 7 ポト絵「シータ・ホロン」

ラニ・チットロコル作 (56cm × 208cm 巻物 国立民族学博物館所蔵 H0328053)

現れたラーヴァナは、無防備なシータをさらうことに成功する。シータの窮地を知ったラーマの友、霊鳥ジャターユは、シータを救出するために果敢に戦う。だが、激闘の末、ラーヴァナによって翼を切り落とされ、ジャターユは息絶える。

ノヤ村のポト絵では、最後のコマにラーヴァナに向かって翼と嘴を広げたジャターユの姿が大胆に描かれ、絵師が異なっても類似した構図が用いられる。また、『ラーマーヤナ』の第4巻以降、ラーマ兄弟が猿王スグリーヴァの軍勢やハヌマーンと共にラーヴァナを壮絶な戦いの末に倒し、シータを救出する場面や、ラーマがアヨーディヤーに凱旋して王に即位する場面は扱われない。ラーマはヴィシュヌ神の化身であり、ヒンドゥー教徒にとって信仰の対象である。その生誕地アヨーディヤーは聖地とされ、『ラーマーヤナ』の物語は現代のヒンドゥー社会とも密接に関係している。北インド三大祭の一つであるダシェラは、ラーマがラーヴァナを倒し、善が悪に勝利した日として祝われる。この期間中、各地でラーマーヤナ劇が上演され、劇のクライマックスでは藁で作られた巨大なラーヴァナ像が火に包まれる演出が定番である。また、同じく北インド三大祭の一つである光の祭典ディワリは、インド暦の新年にあたり、爆竹や電飾で祝われる。ディワリは善が悪に勝ち、ラーマが故郷アヨーディヤーに凱旋した日としても信じられている。

このように、ラーマ信仰と結びつく「シータ・ホロン」やドゥルガ信仰を象徴する「チョンディ・モンゴル」は、いずれもヒンドゥー教の祭礼と密接に関わる物語である。これらの伝統的な主題は、毎年、祭礼が訪れる時期に需要が高まり、ポト絵や絵語りが求められる。このように時代的な需要の変化に応じながら主題を取捨選択し、現在のレパートリーを形成してきたのである。

モノシャ・モンゴル

ヒンドゥー文化と関連が深く、人気のある伝統的テーマの3つ目として、「モノシャ・モンゴル」が挙げられる。これもベンガル地方で広く親しまれている物語で、蛇の女神モノシャが登場する。国立民族学博物館が所蔵する、資料8の1990年に収集されたモノシャ像（栗田1991: 54-55）は神像製作を手掛けるポトゥアによる作品である。モノシャが蛇を手にし、その玉座や背後にも多数の蛇が取り囲んでいる。世界には、日本を含め「蛇」を信仰対象とする文化が多く存在する。蛇は毒や知恵を持つ畏敬の対象であると同時に、再生や生命力の象徴として崇拝

される。ベンガル地方においても同様に、蛇の女神モノシャは、毒から人々を守る強力な女神として信仰されている。この「モノシャ・モンゴル」も「チョンディ・モンゴル」と同様に、信仰すれば願いが叶い、疑えば災いが降りかかるという因果応報の展開を持つ物語であり、モノシャ信仰を象徴する作品である。

ノヤ村のポトゥアの絵語りでは、「蛇の女神モノシャ、毒を制す神を讃えよ！／蓮の花の上に誕生した、蛇の女神モノシャ／その寝台も玉座も蛇で／女神の玉座の背後にも蛇がいる」という句で物語が始まる。そして、モノシャがシヴァ神の崇拝者を改心させ、ベンガル地方にモノシャ信仰を定着させる様子が、次のように描かれる。

髭を蓄えたチャンド・ベネには6人の息子がいた。チャンドはシヴァ神を崇拝し、蛇の女神モノシャを信仰することを拒んでいた。それに怒ったモノシャは、チャンドの6人の息子を毒殺する。その後、チャンドに7人目の息子ロッキンドルが誕生し、成長するとサイ・ベネの娘ベフラとの縁談が決まり、結婚する。だが、その結婚初夜にモノシャは蛇の姿で現れ、眠っているロッキンドルに咬みついた。毒がまわったロッキンドルは命を落としてしまう。突然の悲劇に見舞われ、寡婦となったベフラは嘆き悲しみながらも、夫を生き返らせることを決意する。ベフラは、モノシャに背いた舅チャンドに、バナナの幹で筏を作るように頼んだ。その筏に乗り、川を下るベフラの前には、川岸で釣りをする老夫ゴダ、石段に群がる犬たち、そして川岸で神々の洗い物をする洗濯女の姿があった。ベフラも共に献身的に洗い物を手伝う。そして、ブラフマー神、ヴィシュヌ神、シヴァ神に夫ロッキンドルが生き返るように懇願した。その祈りに応え、神々はロッキンドルと6人の義兄たちに再び命を与えた。彼らは筏に乗って帰郷し、チャンドはモノシャを敬わなかったことを悔い改め、それ以降、モノシャを崇めるようになった。

「モノシャ・モンゴル」では、ヒンドゥー教三大神のシヴァ神・ブラフマー神・ヴィシュヌ神にも匹敵する強大な力を持つ蛇の女神モノシャと、その女神をも屈服させるベフラという女性の勇気、夫への愛や献身が物語を通じて強調される。資料9と資料10はいずれも「モノシャ・モンゴル」を題材としたポト絵である。資料9は、1988年頃、村を巡って絵語りをしていた時期に、前述のシャムシュンドルが描いた作品であり、資料10は若手女性ポトゥアのライラ・チットロコル

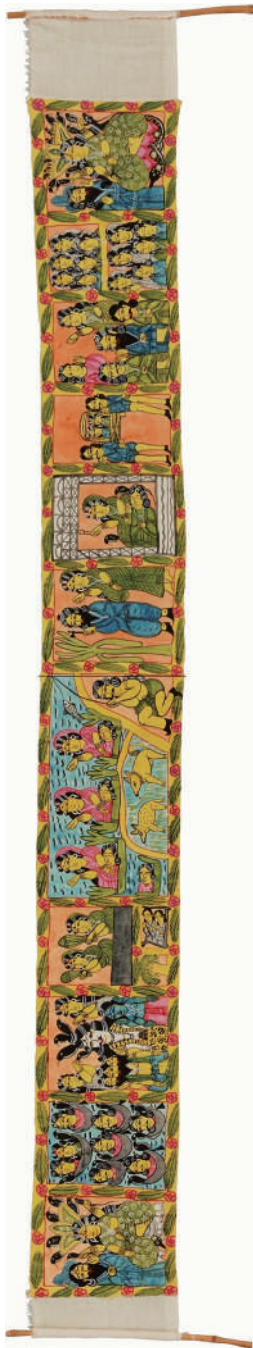
(Laila Chitrakar) による 2023 年の作品である。ポト絵は装飾的な枠で囲まれ、コマ割りされた場面ごとに物語が展開していく手法や、冒頭のコマ（モノシャを信仰しないチャンド）と最後のコマ（モノシャを信仰すると改心したチャンド）の構成には変化がない。しかしながら、後者の作品では、人物や背景の描写はより細密になり、彩色もより鮮明になっている。またコマ数が減少し、ロッキンドルとベフラの結婚の場面など、複数の場面が省略されていることがわかる。現在、巻物状のポト絵は長さ 200cm 程度が主流であり、部屋の壁に吊るして飾れる程度の大きさで制作されることが多い。一方、資料 11 は「博物館での展示のために、モノシャ・モンゴルを語り歌に基づいて省略せずに描いてほしい」という筆者の依頼によって制作された作品である。これはシュショボンとその父オミット・チットロコルによる合作であり、制作には約 2 ヶ月を要した。合計 13 コマの場面で構成され、全長 482cm にも及ぶ。このように同じ主題であっても、通常は需要の高い額装用の小型作品や長さ 2 m 程のポト絵が制作される一方で、国内の賞への出品や特別な受注依頼がある場合には大型作品も制作されるのである。



資料 8 「蛇の女神モノシャ像」
Sirih Chandra Chitrakar 作
(国立民族学博物館所蔵 H0173563)



写真 6 ライラ・チットロコル
(インド・ノヤ村 2023 年 10 月 2 日 筆者撮影)



場面 1

髭を蓄えたチャンド・ベネはシヴァ神を崇拝し、蛇の女神モノシャへの信仰を否定する。

場面 2

それに怒ったモノシャはチャンドの息子 6 人を毒殺する。

場面 3

チャンドに 7 人目の息子ロッキンドルが誕生。年頃になってサイ・ベネの娘ベフラとの縁談が決まる。

場面 4

ロッキンドルとベフラは結婚する（籠は結婚を意味する象徴）。

場面 5

結婚初夜、ロッキンドルの部屋にモノシャは蛇の姿で現れる。眠っているロッキンドルに咬みつくと、毒がまわってロッキンドルは亡くなる。新婚にもかかわらず寡婦となったベフラは嘆き悲しみ、夫を生き返らせる決意をする。

場面 6

モノシャに逆らった舅チャンドに対し、ベフラはバナナの幹で作った筏を用意するように頼む。

場面 7

ベフラが筏で川を下ると、川岸には釣りをする老夫ゴダが、石段には犬たちが群がっている。

場面 8

川岸の石段の下では神々の洗い物をする洗濯女がいる。ベフラも一緒になって献身的に洗い物をする。

場面 9

その後、ブラフマー神、ヴィシュヌ神、シヴァ神へ、夫のロッキンドルが生き返るように懇願する。

場面 10

神々はベフラの願いを叶え、ロッキンドルとその兄 6 人は生き返り、筏に乗って皆で帰郷する。

場面 11

舅のチャンドはモノシャを敬わなかったことを改心し、それ以降、モノシャを崇めるようになった。

資料 9 ポト絵「蛇の女神モノシャ（モノシャ・モンゴル）」
シャムシュンドル・チットロコル作（個人蔵）



資料 9 の場面 3, 4, 6 が省略されている
資料 10 ポト絵「蛇の女神モノシャ（モノ
 シャ・モンゴル）」ライラ・チットロ
 コル作（55cm × 227cm 巻物 国立
 民族学博物館所蔵 H0328052）



資料 11 ポト絵「蛇の女神モノシャ（モノ
 シャ・モンゴル）」オミット・チット
 ロコル，シュショボン・チットロコ
 ル作（57cm × 482cm 巻物 国立民
 族学博物館所蔵 H0328067）

3.3 社会的主題とポトゥアが描く共生社会

伝統的な主題と並び、ノヤ村のポトゥアは、歴史的イベントや人物、時事的な社会課題にも切り込み、農村の人々に問題を伝え、啓蒙する役割も担ってきた。そうした社会的な主題として、第一に「災害」に関する題材が挙げられる。1978年、1987年、1988年にメディニプル県で発生した豪雨による洪水を契機に、深刻な洪水被害や森林破壊に警鐘を鳴らす作品が描かれた。また、その流れの中で、世界自然保護基金（WWF、1986年以前は World Wildlife Fund）の依頼を受け、植林活動を推進する作品も制作された。こうした実体験に基づく題材に加え、ポトゥアたちは、遠く離れた地域で発生した災害も取り上げている。例えば、2001年1月にインド西部グジャラート州を襲った大地震や、2004年12月にタミル・ナードゥ州やケララ州といった南部沿岸地域に甚大な被害を齎したスマトラ沖地震による大津波などがある。

災害と並び、第二に「感染症」に関連する題材もある。蚊を媒介として毎年のように流行するマラリアや、農村社会に長年深刻な影響を及ぼしてきたポリオなど、感染症の予防や拡大防止を啓発する作品が多数制作されている。その発端は、公衆衛生に関する州政府事務所やNPOからポトゥアへの依頼である。インドにおけるポリオ対策は、小児を対象としたポリオワクチンへの疑念や、接種自体がムスリムにとっては宗教上の教義に反するハラーム（禁忌）であるとの認識によって前進しない時期もあった。さらに、ワクチンが身体の障害を引き起こすといった誤情報の払拭や、ワクチン接種の必要性をいかに人々に理解させるかが課題であった。しかしながら、ポリオ撲滅運動は地域社会を巻き込んだ草の根運動として展開され、最終的には小児へのワクチン定期接種が浸透した。その結果、世界保健機構（WHO）は2014年、インドにおけるポリオ根絶を正式に宣言した（Solomon 2019）。ノヤ村のポトゥアたちは、こうしたポリオ撲滅運動にも絵語りという媒体を通じて参与し、感染症に関する題材は、後にHIVの感染予防や新型コロナウイルス感染症のワクチン接種の啓発へと繋がっていくのである。

第三の社会的主題として、「農村の社会問題」を扱った絵語りも見られる。例えば、第2章で言及したダウリをめぐる花嫁の殺人や、女子教育・識字教育の推進など、農村社会での女性に対する人権意識の向上を目的とした題材である。

そして第四の題材として、「歴史的出来事や人物」を扱った作品も数多い。歴史的事件の例としては、1945 年の広島・長崎への原爆投下、1992 年にアヨーディーヤーで起こったヒンドゥー原理主義者によるバーブリー・マスジッド破壊事件、2001 年のアメリカ同時多発テロ事件 (September 11)、およびそれに続くアフガニスタン紛争などが挙げられる。歴史的人物では、英国植民地下のベンガル地方で独立運動を牽引し、反逆罪で絞首刑となったサヒブ、コルカタで宗教を問わず貧困者のための活動に生涯を捧げたマザー・テレサ (Korom 2015: 94)、そしてインド初の女性首相で 1984 年に暗殺されたインディラ・ガンディー (Korom 2015: 102) などが題材とされている。さらに、フランス文化の普及促進を行うアリアンス・フランセーズ (Alliance Française) インド支部の依頼を受け、18 世紀末のフランス革命を題材としたポト絵も過去に複数制作されている。

このようにノヤ村のポトゥアは伝統的主題に留まらず、時事的な社会問題や歴史的事件にも関心を持ち、積極的に制作を続けてきた。その関心の高さや制作意欲は、金の 1988 年調査時と現在でも変わっていない。言い換えれば、彼らはポト絵と歌による絵語りの持つ啓発力を信じているため、今後も社会的主題の制作をやめることはなく、絵語りそのものを手放すことはないであろう。とはいえ、ノヤ村のポトゥアが社会問題や歴史的事件を扱い始めた 1970 年代、そのきっかけは必ずしも彼ら自身の自発性によるものではなかった。当初、ポトゥアの絵語りの発信力や啓蒙力を農村社会の公衆衛生の分野に活用しようと考えた NPO や、政治利用しようと考えた政治家の働きかけによるものであった。世界の歴史を振り返れば明らかなように、歌詞と旋律を伴う「歌唱」は、国家イデオロギーの浸透、特定集団の政治的プロパガンダ、さらには宗教の布教や拡大の手段として、良くも悪くも利用されてきた。

2001 年よりポトゥアの調査を開始した宗教人類学者のコロムは、災害を題材としたポトゥアの作品に着目し、政治的イデオロギーとの関係について興味深い見解を示している。1970 年代から地元政治家らは、ポトゥアの絵語りがいデオロギーの浸透や、選挙票の獲得に活用できることに気付き始めた。そこで、彼らは現金給与や医療ケア、福利厚生などの提供を通じてポトゥアに接近し、自らのために働くように誘導しようとしたのである (Korom 2015: 133)。前述のラニの叔父であり、ノヤ村の重鎮であったドゥクシャム・チットロコルも、その影響を受

けた一人であった。彼は、インド左派共産党（CPI-M: Communist Party of India-Marxist）の地元政治家から、2001年に起きたグジャラート地震を受け、国の地震救援活動を促す絵語りを創作するように依頼された。この作品は、安全対策の不備を批判し、中央政府の怠慢を指摘する内容を含んでいた点で、政権与党を批判するインド左派共産党の立場に近いものと解釈することもできる。だが同時に、大惨事を前にインド国民が団結し、救援活動への参加を呼びかけるという愛国的なメッセージも含まれていた。コロムはこうした側面を指摘し、政治家による災害の政治利用に対抗する手段としてポトゥアが絵語りを生きた可能性を示唆している（Korom 2015: 143）。

確かにコロムが指摘するように、一部のポトゥアは政治家からの依頼を受けながらも、政治的プロパガンダをそのまま歌い、描き、拡散するという手法はとっていない。むしろ、ノヤ村のポトゥアたちは、権威による支配を警戒し、政治的・宗教的プロパガンダに偏ることなく、分断や対立を助長しない形で絵語りを続けてきた。この点は非常に重要である。この姿勢は、イスラームとヒンドゥー社会の狭間で巧みにバランスをとりながら生きてきたノヤ村のポトゥアの知恵であり、社会の分断や対立を避け、ベンガルの農村における社会的包摂性や共生を維持するための、ポトゥアなりの経験に基づく戦略といえるのではないだろうか。

その具体的な例として、1992年にアヨーディヤーで発生したヒンドゥー原理主義者によるバーブリー・マスジッド破壊事件を題材とした絵語りについて指摘することができる。バーブリー・マスジッドは、碑文に依拠すればムガル帝国期の16世紀前半に建立されたイスラームの建築物であった。だがヒンドゥー側は、かつてその地に存在したヒンドゥー寺院が破壊され、その跡地にモスクが建設されたと主張し、長年ヒンドゥーとムスリムの間で論争が続いた。前述の通り、アヨーディヤーはヒンドゥー教徒にとってラーマの生誕地であり、ラーマ信仰の聖地である。そのため、ヒンドゥー原理主義者たちはモスクを排除し、本来のヒンドゥー寺院に戻すべきだと主張し、1992年12月6日、バーブリー・マスジッドを破壊した。この事件以降、インド国内ではムスリムに対する暴動や迫害が頻発し、その影響はバングラデシュやパキスタンといった隣国のイスラーム国家にも波及してヒンドゥーとムスリムの宗教間対立や分断が深刻化した。30年以上が経過した現在、この事件を題材にした絵語りは制作されなくなったが、ラニの弟グルポド・

私たちは人間で、一人の母から誕生した 私たちは人間で、一人の母から誕生した ある者はヒンドゥー教徒となり ある者はムスリムとなった 一人の母から誕生したのに アダムの妻が身籠り サビルとカビルが生まれた サビルとカビルが生まれた 兄弟は宗教を違えた 兄弟は宗教を違えた 見なさい、聖典に記してある 一人の母から誕生したと 私たちは人間で、一人の母から誕生した 先住民サンタルはマラン・ブルと呼び キリスト教徒はゴッドと呼び ムスリムはアッラーと呼び ヒンドゥー教徒はバグヴァンと呼ぶ 一人の母から生まれたのに 私たちは人間で、一人の母から誕生した	宗教による政治で奪い合い、彷徨っている 何もかも捨て、調和して暮らそう 宗教の名の下に対立や殺し合いが絶えない 何もかも捨て、調和して暮らそう 神であるものは、自然そのもの 今の科学が証明している 一人の母から誕生したと 私たちは人間で、一人の母から誕生した ヒンドゥーもムスリムも兄弟 人間の本質から目を逸らして どうして宗教が存在できるのか どうして兄弟たちと戦えるのか 私たちは人間で、一人の母から誕生した だからこそ、皆で団結して悩むのだ カーストを取り巻く敵対心を失くすのだ だからこそ、皆で団結して前に進もう このカーストによる敵対心を失くすのだ 行こう、そして一緒に叫ぼう 「一人の母から誕生した、私たちは人間で、 一人の母から生まれたのだ！」と
--	--

歌詞 2 ポト絵「バーブリー・マスジッド」の歌詞
 グルポド・チットロコル作、筆者訳 (Korom 2006: 42-43)

チットロコルが当時創作したのが歌詞 2 である。

ノヤ村のポトゥアが「バーブリー・マスジッド」と呼ぶこの絵語りには、ヒンドゥー側やムスリム側が互いにその土地を神聖視することの正当性に関する見解や、破壊行為や暴動に対する直接的な支持・批判はいずれも見受けられない。歌詞の根底にあるのは一貫して「我々は同じ人間である」という思想であり、宗教的な違いによって争い、対立や分断を生むのではなく、困難な局面でこそ人間として団結すべきだという主張が込められている。これはクルアーン 49 章 13 節の「人々よ、われは一人の男と一人の女からあなた方を創り、種族と部族に分けた。これはあなた方を互いに知り合うようにするためである」(訳：樋口 2015: 123) というイスラームにおける対話や共生をめぐる基本的姿勢に関する記述にも通じる。作詞したグルポドは先述の通りパンデミック下の 2021 年に逝去したため、歌詞の真意を尋ねることはもうできないが、イスラームとヒンドゥー社会の狭間で生きてきたポトゥアの考える理想の共生社会の在り方が示されている。したがって、

ポトゥアは NPO や政治家の経済的支援によって操られてきた存在では決してなく、むしろ、自らが考える対立や分断のない共生社会の理想を、社会的主題の絵語りに落とし込んで表現してきたのである。

こうした宗教を超越した思想は、筆者がポトゥアの調査と同時期に並行して調査を進めた、ベンガル地方の吟遊行者であるバウルにも通じる。19 世紀を生きたベンガルの詩人フォキル・ラロン・シャハ（生年不明-1890）は、吟遊する行者であると同時に、宗教的対立や出自・カースト制度による差別を否定し、人間愛を重んじた社会変革者でもあった。ラロンやその弟子が継承してきた歌は、イスラームやヒンドゥー教といった宗教や信仰の枠組みを超え、現代のベンガル人にも広く愛されている。ラロンの弟子が創作したとされる歌の冒頭には、次のような句がある。

「こんな人間社会が、いつ生まれるのだろうか、ヒンドゥー教徒もイスラーム教徒も、仏教徒も、キリスト教徒も、生まれや身分の違いもないという日が」（外川 2009: 211-212）

宗教的な分断や対立構造のない共生社会を願い、虐げられてきた農村の女性たちの権利を訴え、「人間は人間だ」と歌うポトゥアの思想には、こうした吟遊行者バウルと通じたものが流れているように思えてならない。

3.4 作品制作における戦略

金の 1988 年調査と筆者の 2022 年調査の内容を基に、本項ではポト絵をはじめとするノヤ村のポトゥアの作品制作に焦点を当てる。ポト絵は形状により次の 3 種に分類できる。

1) 巻物状の縦長ポト絵（ジョラノ・ポト jarano pata / グタノ・ポト gutano pata）

縦長の巻物状で、一般的な作品の長さは約 2m だが、4 ～ 5 m に及ぶ大型作品が制作されることもある。物語は縦に配置されたコマを上から下へと展開し、語り手は該当のコマを指し示しながら絵語りを行う。聴衆の前で場面ごとに巻物を広げ、語り終えたコマは巻き取っていく。ポト絵（pat）の語源は、サンスクリット語で布切れを意味するポト（pata）に由来し、ポトチットロ（patachitra）は本来布に描かれたものを指す。だが、1988 年当時も現在もポト

絵は紙に描かれ、補強のために着古したサリーなどの布地が裏面に貼られ、日光の下で乾燥させて仕上げられる。かつて村々を巡っていたポトゥアは、写真2のような収納袋に数本の巻物状ポト絵を入れ、肩にかけて持ち運んでいた。

2) 横長ポト絵（オレロト・ポト arelatai pata）

資料9のように横長の形状で、両端には木や竹の棒が取り付けられている。物語は横に配置されたコマを右から左へと展開し、縦長ポト絵と同様に、場面に沿って少しずつ広げ、終わったコマは棒に巻き取る。紙の裏面は布で補強され、両端の棒は布端に固定されている。ポトゥアの絵語りは展開するコマを指で示しながら歌うため、横長ポト絵の場合は両端それぞれに持ち手が必要で、単独での絵語りはできない。資料9は1988年以前に描かれたものであり、男性ポトゥアが独唱で村々を巡っていた金の1988年調査時においても、既に珍しい形状であったという。現在ではこの形状のポト絵はほとんど制作されていない。

3) 長方形・正方形ポト絵（チョウカ・ポト chauka pata）

資料13に見られるような、長方形または正方形の紙1枚に、主に物語の一場面が描かれる形式である。現在、ノヤ村のポトゥアはカリガト絵の構図や題材を模倣して描くこともあり、それもこの種類に含まれる。この形式のポト絵は布で補強されることは少なく、現在では額装用の絵画作品として認識されている。既に額装された状態で販売するポトゥアもいる。



資料12 ポト絵「ドゥルガ女神とヒンドゥーの神々」
Manu Chitrakar 作（W1150 × H730 横長 国立民族学博物館 H0327379）

ポト絵に使用される紙は、白色や薄茶色のケント紙であり、長い巻物を制作するには複数の紙を繋ぎ合わせる。第2章で言及した、ポトゥアの中で最も知名度の高いアーティストであるアンワル・チットロコルはキャンバスなどを用いることもあるが、ノヤ村の大部分のポトゥアは村で購入可能な安価な厚紙を使用している。

また顔料には、植物の葉や花、鉱物といった自然素材が元来は使用されてきたものの、金の1988年調査では、村のほとんどのポトゥアが市販の化学染料の顔料を使用している点が言及されている（金 2000: 49）。一方、現在では自然素材の顔料を用いることを村のポトゥアたちは強調する。この変化には毎年注意喚起がなされるインド三大祭の一つ、ホーリー祭が関係している。ホーリー祭は、春の到来を色粉や色水を掛け合って祝う祭典である。インド全土で2日間にわたって行われるこの祭りの時期が近づくと、毎年マスコミは化学色粉が有害物質を含み、皮膚や目、呼吸器系に健康被害を及ぼす可能性があることを報じる。また人体への影響だけではなく、環境への悪影響についても指摘され、こうした報道を通じて、植物由来の自然素材で作られた色粉の使用が推奨される。筆者の知る限り、こうした自然素材の推奨は2000年には既に存在し、インド社会全体のこの風潮がポトゥアに影響を与えたと考えても不思議ではない。現在、ポトゥアたちは、毎年ノヤ村で開催される祭で顔料作りのワークショップを開き、その知識や技術を世代間で継承している。ポトゥアが使用する顔料は、同色であっても季節によって素材が異なる。赤色の顔料はハイビスカスの花や、ロッコンと呼ばれる木に群生する実の種子から抽出する。青色はインディゴの葉や蔓性植物のチョウマメの花、緑色はインゲン豆やウリ科のツルレイシの葉、黄色はショウガ科のウコンの根を乳棒で潰して採取する。黒色の顔料は煤から採取し、かつては石油ランプや炊事の煙、米の焦げ、竹の燃えかすなどから採取されていた。だが現在では、自動車の排気管に棒を差し込み、煤を回収して使用するという（Chitrataru 2020: 11）。白



写真7 顔料作りを披露するロヒ・チットロコル（インド・ノヤ村 2023年10月2日 筆者撮影）

色の顔料には、粘土質の土や石灰石、蒸して砕いた米などが用いられる。抽出した顔料は明度を維持するため、ウッドアップル（和名：ゾウノリンゴ）と呼ばれる木の実の果汁に、水で溶いた液を加えながら使用する。顔料作りは時間を要するため、現在のポトゥアは一度に大量に作り置きし、液体の状態で容器に保存している。1988 年以前に制作された資料 9 と、2020 年以降の資料 10～13 のポト絵を比較すると、色彩の濃度に変化が見られる。無論、個々のポトゥアで彩色における嗜好や技法は異なるが、前者は淡く、自然素材を用いたとポトゥアが主張する後者は色彩の濃度が高い。自然素材の顔料を用いて、現在のポト絵に見られる鮮明な色彩の濃度がどのように実現されているのか、この点は今後の更なる調査が必要であろう。

ポト絵の制作過程は、まず枠や下絵を鉛筆で描くことから始める。その後、黒色以外の各色を彩色し、黒色で輪郭線や神・人間・動物の目玉を入れる。最後に、赤茶色で立体感を表現し、白色で装飾品などを描き込む。筆に関しては、古くはリスの尾の毛を用いてポトゥア自身が自作したと伝えられているが、現在では異

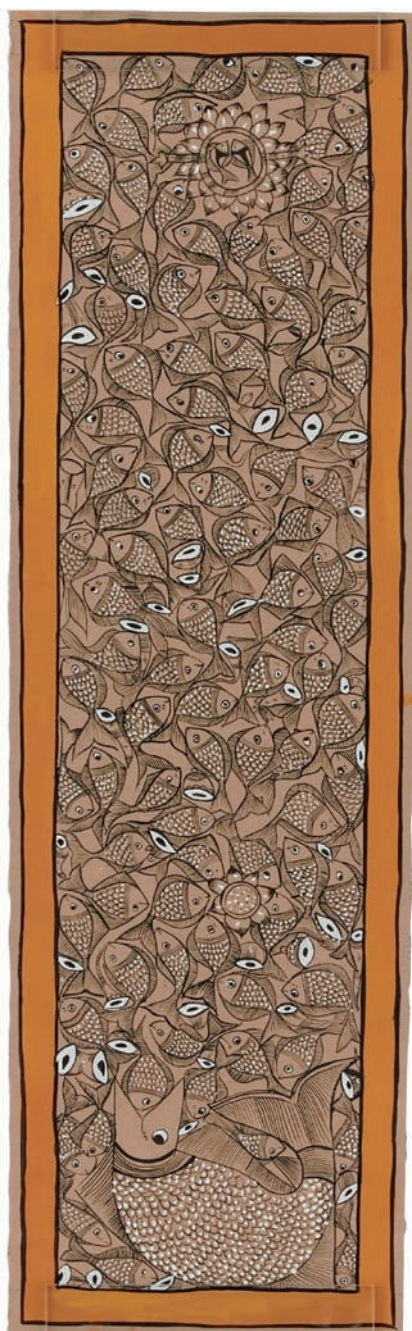


写真 8 シュシヨボン・チットロコルによる制作過程
(インド・ノヤ村 2023 年 10 月 3 日 筆者撮影)

なる太さの市販の筆を複数用いている。2020 年以降に制作された資料 11～12 の巻物状のポト絵では、背景や衣服の装飾が細密画のように繊細であり、冒頭のコマは大きく大胆な構図で配置されているのが特徴である。このような傾向は、現代のポト絵に共通する特徴と言える。

金の 1988 年調査時と現代のポト絵を比較すると、画材の使用だけではなく、彩色、画法、構図、大きさといった画風の側面にも変化が見られる。さらに大きな変化として次の 3 点を指摘できる。第一の変化は、1988 年当時は描かれていなかったカリガト絵を、現在では村のポトゥアが構図や題材を模倣して描いている点である。第 2 章で紹介した、村で異色のアーティストであるアンワル・チットロコルは、村に伝承されていた伝統的な技法や題材とは異なる新たな要素の必要性を感じ、19 世紀のカリガト絵の技法を独学したと前述したが、この影響がノヤ村の他のポトゥアにも及んだようである。カリガト絵は、ポト絵のような装飾された枠や緻密に描き込まれた背景がなく、躍動的で大胆な輪郭線が特徴である。A3 用紙ほどの大きさの紙に描かれ、巻物状のポト絵と比べると制作時間が短く、価格も安価である上に、需要が高い。例えば、資料 4 に見られるような、ベンガル地方の諺に由来する、猫が魚や海老を咥える風刺画は、村のポトゥアの多数の工房で制作されている。これらの作品は量産体制で作られ、写真 8 の各工程に見られるように、一度に複数枚を同時進行で制作する手法が取られている。具体的には、まず複数の下絵をまとめて描き、次に色ごとに一度に複数枚を彩色していく方法である。

第二の変化は、金が調査した 1988 年当時には描かれていなかった「魚の結婚式」という題材が、現在ではノヤ村のポト絵の代表的な主題の一つとなっている点である。資料 13 のポト絵「魚の結婚式」は、さまざまな構図や大きさとで制作されている。そして、その絵語りもポトゥアにとっての十八番となり、内容は次のようなものである。魚の結婚식을舞台に、そこには多種多様な小魚たちが招待されている。招待客の小魚たちは、ある魚は鍵盤楽器ハルモニウムを弾いて祝福し、ある魚は太鼓を叩き、ある魚は笛を吹き、賑やかで幸福感に満ちた結婚式が繰り広げられる。だが、お祭り騒ぎやご馳走を楽しむ小魚たちは、迫り来る危険に気づいていなかった。そこへ招待されていない怪物魚が突如現れ、遂には全員を全て飲み込んでしまう。この物語は、招かざる巨大魚が小魚を捕食するという弱肉



資料 13 ポト絵「魚の結婚式」
(巻物 筆者蔵)



資料 14 ポト絵「サンタルの結婚式」
ラニ・チットロコル作 (37cm × 122cm 巻物
国立民族学博物館所蔵 H0328057)

強食の社会を風刺した題材であるが、魚を好んで食べるベンガル地方らしく、この「魚の結婚式」は非常に人気が高い。

また、近年では資料 14 に見られるような、先住民サンタルの結婚式を描いたポト絵も、ノヤ村のポト絵の定番となっている。このポト絵には、色彩豊かな衣装を身に纏ったサンタルの男女が列をなし、太鼓を抱えて踊る様子が描かれる。サンタルの肌の色は薄い灰色で表現されるのが特徴である。ノヤ村のポトゥアはサンタルの村を訪れたことも、サンタルを聴衆として絵語りをしたこともない。

この変化に関連して、第三の変化として挙げられるのが、ポト絵から絵付け雑貨やTシャツに至るまで、多岐にわたる制作のマルチ展開である。金の 1988 年調査時、近隣の村々での絵語りはまだ行われており、ポト絵は販売されていたものの、現在のような主要な収入源ではなかった。しかし現在では、ポト絵だけではなく、陶器のコップ、木製のコースター・皿・容器などの生活雑器、うちわ、ブリキのケトルなどの雑貨に絵付けが施され、写真 9 のように工房に広げられている。こうした雑貨類の中でも、「魚の結婚式」や先住民サンタルを描いたものは



写真 9 ポト絵やカリガト絵画，絵付け雑貨が並べられたラニ・チットロコルの工房（2023 年 10 月 2 日 筆者撮影）

特に需要が高く、イラストとして多方面に活用する「ワンソース・マルチ展開」が、どの工房でも盛んに行われている。前述のロヒ・チットロコルは、ポト絵以外への展開に関して、次のように話す。

好みは同じではないから。誰かは魚、誰かは先住民サンタル、誰かはカリガト絵、誰かは人。人それぞれ色々なものを好むから、色んな作品を用意しておく。一度コップやコースターを買えば、それは家にあるでしょ。一度ポト絵を買って飾ってもらえれば、それは何世代も持っていられる。けれど皆がポト絵を好きなわけでないし、買えるわけでもない。そういう人たちのために、小さな物にも絵を描くの。(Rohi Chitrakar 2023 年 10 月 3 日)

こうした村の工房で販売する作品の展開にとどまらず、世界的に流通する書籍への展開の事例もある。第 3 章でも触れたように、インド南部の沿岸地域に甚大な被害を及ぼした 2004 年の大津波に関連して、ノヤ村のポトゥアは首都デリーの美術事業家から依頼を受けた。その依頼とは、救援支援活動の一環として津波を題材としたポト絵を制作し、オークションに出品することであった。実際の被害を TV 報道でしか目にしてはいないノヤ村のポトゥアたちは、天候の魔物が嵐を引き起こし、その壊滅的な余波を巻物に描いた。中でもノヤ村のジョイデブ・チットロコル (Joydeb Chitrakar) とモエナ・チットロコル (Moyna Chitrakar) によるポト絵は、南インドの絵本専門出版社タラ・ブックスから、蛇腹折りの形状で 2009 年に出版された。日本でも数量限定で翻訳本『つなみ』が 2018 年に刊行されている。だがコロムの指摘に依拠すれば、ポトゥアは絵のみを提供し、文章は出版社が雇った作家が執筆したコラボレーション作品であるという (Korom 2015: 147)。こうした書籍への絵のみの提供には、ノヤ村のモヌ・チットロコルが表紙や挿絵を手掛けた、米国のキング牧師の伝記 (Flowers 2013) がある。

ここまで見てきたように、ポトゥアの「絵師としての戦略」とは社会問題や時事的な出来事を即座に作品に取り入れ、時代ごとに変化する需要に対して柔軟に応答してきた点にある。この対応力は、次に考察する「絵語りとしての戦略」においても同様に見られる。

3.5 語り歌の比較分析

ポト絵と並び、絵語りに不可欠な要素が、ポテル・ガン (pater gan) と呼ばれ

る旋律を伴った詩歌である。ポト絵の物語に沿って歌われるこの語り歌は、一本の巻物につき約 10 分間にわたって披露される。ノヤ村のポトゥアは、伝統的な主題の歌詞は口頭で伝承されていると語るが、1988 年と 2023 年の音源を比較すると、変化した側面と不変の側面の両方が浮かび上がってきた。

定型詩の継承

最初に歌詞に着目すると、歌詞はポアール韻律に基づいた定型詩の形式に基づいている。ベンガル語の韻律に関する北田の研究によると、韻律形は「① 1 行を構成する拍数（音節または母音の数に等しい）、② 1 行を構成する部分のそれぞれの拍数」で判別され、ポアール韻律とは 1 行が 8 拍と 6 拍を組み合わせた計 14 拍で構成される韻律形である（北田 2010: 155–156）。

ここでは、蛇の女神モノシャを題材としたモノシャ・モンゴルの絵語りを例に考察する。1988 年に録音された故グルポド・チットロコルによる独唱を確認すると、歌詞 4 で示すように 8 拍と 6 拍を組み合わせたポアール韻律に基づいた定型詩で綴られていることがわかる。冒頭の一節「Manasā jagat gouri モノシャ・ジャガトゥ・ガウリ」（8 音節）、「Jāya bisahari ジャヤ・ビシュハリ」（6 音節）（蛇の女神モノシャよ、毒を制する神を讃えよ！）は、各句の冒頭にアクセントが置かれる。録音物の歌唱者（演者）であるグルポドはドゥクシャム・チットロコルの甥であることから、彼の歌詞を直接継承していると考えられる。

一方、歌詞 5 は、2023 年に録音した女性ポトゥアの集団歌唱によるモノシャ・モンゴルの絵語りを記している。比較を容易にするために歌詞を並置し、語彙が異なる部分について、下線は省略されている語彙、波線は語順の変化、太線は異なる語彙の使用、網掛けは追加されている語彙を示した。その結果、一部に語順の変化や異なる語彙の使用、省略部分があるものの、これは口承伝承に特有のヴァリエント（変異）であり、歌詞の意味そのものに大きな違いはなかった。歌詞に大きな変化が見られなかった要因として、1 つにはポアール韻律に沿った定型詩が維持されていること、もう 1 つに女性の集団歌唱において独唱部分を担う高齢のラニやラダが、結成当初からグルポドと同様にドゥクシャムから指導を受けてきたこともその要因であろう。また、こうした軽微な差異は、必ずしも時代が古い絵語り（録音）が定型で、時代が新しい絵語りの方が変化したものとは言い切

れない。伝承の中では、個々の歌唱者による癖や状況に応じた変化が生じることもあるため、変化の方向性は一様ではない。

歌詞 4	歌詞 5
【1988 年録音】独唱 (歌唱者 Gurupada Chitrakar)	【2023 年録音】独唱と斉唱による交互唱 (独唱者 Rani Chitrakar 斉唱者は女性 5 名・こども 2 名)
8 音節 + 6 音節 = 14 音節の定型詩	
Ār Manasā jagat gouri jaya bisahari (蛇の女神モノシャ、毒を制す神を讃えよ！) Padmaphule mā janma nila Manasā kumāri (蓮の花の上に誕生したモノシャよ) Nāger hala khāt pālang khanāger singhāsan (その寝台も玉座も蛇で) Se je mangalā gharār piṭhe go debir āsan (玉座の背後にも蛇がいる)	独唱 Manasā jagat gouri 斉唱 jaya bisahari ō tui 独唱 Padmaphule janma māyēra 斉唱 Manasā kumāri ō tui 独唱 Nāger hala khāt pālang 斉唱 nāgēra singhāsan ō tui 独唱 Mangalā barāra piṭhe 斉唱 debir āsan ō tui
_____ : 2023 年録音では省略されている語彙 ~~~~~ : 語順の変化 (意味に影響はない) _____ : 異なる語彙の使用 (意味に影響はない) ■■■■■ : 2023 年録音で追加している語彙	

歌詞 4 (左)・歌詞 5 (右) 1988 年録音と 2023 年録音における
「モノシャ・モンゴル」冒頭歌詞の比較 (翻訳協力：金基淑, スディップ・シンハ)

リズム・旋律・歌唱形態の変容

定型詩である歌詞の側面には大きな変化が見られなかったが、それとは対照的に、リズムや旋律、歌唱形態には明らかな変容が見られる。

金の 1988 年調査時の録音では、男性ボトウアによる独唱が中心であった。リズムやテンポには揺らぎがあり、拍節リズムの部分においても、基本旋律の前後に装飾的な旋律を自由に加えるなどの変化が見られる。また、語りのように自由リズムで母音を引伸ばす表現も確認できる。これに対し、2023 年の絵語りでは定型

詩は継承されているものの、歌唱形態は女性の集団歌唱に置き換わっていた。そのため、上の句 8 音節は独唱、下の句 6 音節はその他による斉唱というように明確に区切って、独唱と斉唱が交互に展開する交互唱の形態で展開する。歌のリズムはいずれも 2 拍子系であり、8 拍を 1 フレーズとする。こうした旋律に歌詞の音節を当てはめると、上の句は 8 音節で 8 拍、下の句は 6 音節しかないために不足する 2 拍分を補う必要がある。このため、歌詞 5 に示すように「オ・トゥイ ō tui」(末尾のイは次の 1 拍目と合う) という囃子言葉の機能をもつ挿入句が、各句末に加えられる。こうした独唱と集団歌唱による形態の違いが、歌詞にも影響している点は興味深い。

次に旋律に着目すると、1988 年録音の絵語りにおいては、冒頭は高音域で声を張り上げ、自由リズムから始まる。近隣の村を巡っていた当時は、聴衆を惹きつけるために周囲に響きやすい高音を意識していたと考えられる。また伴奏楽器は用いないため、旋律と音高は同じ人物・同じ作品であっても、その都度異なる。歌詞 4 を例に挙げると、前半(第 1 句と第 2 句)は高音でゆっくりと詩を語るように歌い、句末の母音を引き延ばす。その後(第 3 句以降)は、譜例 1 で示す拍節リズムの基本旋律が頻出し、前後に装飾を加えることで旋律を自由に展開する。



*実音は記譜音より完全 4 度高く、テンポは磁気テープ録音の再生時

譜例 1 男性ボトウ独唱(1988 年録音)にみる基本旋律の 1 種(筆者採譜)

他方、2023 年の絵語りの旋律は、上の句の独唱と下の句の斉唱を交互に繰り返す構造を持ち、即興要素のない、固定化された旋律である。また図 3 で示すように、同じ旋律が反復され、物語の場面が大きく変わるタイミングで新たな旋律へと移行し、独唱者も交代する。この展開が何度も繰り返され、最後に独唱者が自らの名前と住所を名乗ることで絵語りは終了する。

例えば、歌詞 6 は「モノシャ・モンゴル」の冒頭部分の歌詞である。ポト絵と対照させると、資料 10 のポト絵の場面 1～5、資料 11 の場面 1～3 に該当する。

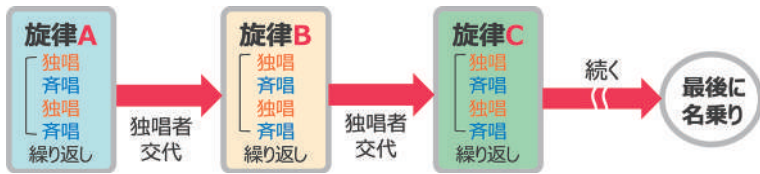


図3 集団歌唱における絵語りの展開構造

「モノシャ・モンゴル」における最大の聴かせどころは、ロッキンドルとベフラの結婚初夜、蛇の姿で現れたモノシャが眠っているロッキンドルに咬みつきの、毒で息絶えたロッキンドルの死をベフラが嘆き悲しみ、夫を生き返らせることを決意する場面である。

絵語りの冒頭から用いられる旋律を【旋律 A】として譜例 2 で示した。拍節リズムで独唱と斉唱の交互唱を繰り返しながら、軽快に登場人物の性格や関係性が描写されていく。その後、ロッキンドルが蛇の毒で息絶えた後、旋律と独唱者が代わる。この次の旋律を【旋律 B】として譜例 3 で示している。そこでは「一体何が起きたの!? 私の夫が亡くなっている!」と反復して歌われ、突如寡婦となってしまったベフラの困惑や悲しみ、そして夫を再生させるという決意が、ゆったりとしたテンポで朗々と歌い上げられる。

【旋律 A】（譜例 2）

蛇の女神モノシャ、毒を制す神を讃えよ！
 蓮の花の上に誕生したモノシャよ
 その寝台も王座も蛇で 玉座の背後にも蛇がいる
 チアンド・ベネは髭をねじり、怒りに震えた
 「肩の上に乗せて、木で打ってやる！」
 「女神モノシャを捕えたら 腰を木で打ってやる！」と
 それを聞いたモノシャは 怒ってチアンドの息子 6 人を毒殺した
 息子たちの 6 人の嫁は未亡人となったが
 それでもチアンドはモノシャに謝罪をしなかった

新たに生まれたロッキンドルは良き青年になり
 街での結婚が決まった
 ロッキンドルは結婚のために籠に乗り 籠は前後に担がれ出発した
 サトトリ山に花嫁のための部屋があるという
 その部屋で美しき青年ロッキンドルは疲れて眠りについた
 糸のように化けた蛇がロッキンドルを咬もうとした

ロッキンドルの美しさに、蛇は一瞬迷いが生じた
 なんと美しい身体、どこを咬もうか
 神々に聞かれたら、どう答えようか
 月や太陽の神々を証人に、蛇は咬んだ
 毒の痛みでロッキンドルは目覚め
 「起きろ、今すぐ起きてくれ！サイ・ベネの娘よ」と叫んだ
 「お前が眠っている間に、なにかに咬まれた」

(旋律と独唱者が交代)

【旋律 B】(譜例 3)

「一体、何が起きたの!？」
 「私の夫が亡くなっている、一体何が!」
 「一体、何が起きたの!？」
 「私の夫が亡くなっている、一体何が!」
 「私の花婿が!」
 「私の美しい花婿が!」
 「蛇の毒で青くなっている」
 「一体、何が起きたの!？」
 「私の夫が亡くなっている、一体何が!」
 「私が清らかであれば、きっと夫を救える!」
 「私が清らかであれば、きっと夫を救えるわ!」
 「なんて不幸な運命」
 「なんて不幸な運命なの」
 「どうしてこんなことに、なってしまったの」
 「一体、何が起きたの!？」
 「私の夫が亡くなっている、一体何が!」

歌詞 6 ポト絵「蛇の女神モノシャ (モノシャ・モンゴル)」の冒頭の歌詞
 歌グルボド・チットロコル (筆者およびスディップ・シンハ訳)

♩ = 60

独唱

Manasā ja gata'ōgarī Padma phulē janma māyēra
 蛇の女神モノシャ 蓮の花の上に誕生した

斉唱

Jaya biṣa hari, Ō tu'i Manasā kumārī ōtu'i
 毒を制す神を讃えよ! モノシャよ

* 実音は記譜音より短2度高い

譜例 2 「蛇の女神モノシャ (モノシャ・モンゴル)」の冒頭の旋律 A

独唱

♩ = 52

Ki ha la- -! Ki ha la ā mā - - - r!

「一体、何が起きたの!」

斉唱

Bā sara gha rē pa ti ma- ra - la, ki ha la- - - - ?

「私の夫が亡くなっている、一体何が!」

bar- ṇa sbā mī āmār, sōnārbar- ṇasbā mī ā mār, bi ṣē - tē - nī la bar ṇa- ha- la - - .

「私の美しい花婿が! 私の美しい花婿が! 蛇の毒で青くなっている!」

*実音は記譜音より長2度高い

譜例 3 「蛇の女神モノシャ（モノシャ・モンゴル）」の旋律 B

ノヤ村のポトゥアの語り歌は、今日では集団歌唱が主流となり、独唱と斉唱の交互唱によって歌詞と旋律が固定化された。かつての男性独唱に見られた、歌唱者が自由リズムで自由に母音を引き伸ばしたり、装飾的旋律を加えたりするような即興的な自由度は、現在ではなくなった。1988 年と 2023 年の録音音源を比較分析することによって、調査当初、筆者はノヤ村の絵語りは元来男性による独唱であり、近隣の村々を絵語りで巡っていた頃にはそれが維持されていたものの、村巡りをやめた後、男性独唱から女性の集団歌唱へと移行したのではないかと推測していた。しかしながら、歌唱形態に関してポトゥアへの調査を続けるうちに、そうではない歴史が見えてきた。

3.6 集団歌唱の復興

1950 年代にノヤ村に移住し、幼少期から絵語りをする父親に同行したラニは、ポトゥアの絵語りが衰退傾向にあった時代を回想しながら、歌唱形態の変化について次のように語った。

いつから男たちがひとりで歌っていたのか、集団での歌唱法は当時もあった。ただテレビなどが普及したために集団での歌唱だけではなく、ポトゥアそのものが減ってしまった。集団での絵語りは歌われない。そして誰も聴きたがらなくなった。

（絵語りをやめて）ある人は農業を始め、ある人は荷運びを、ある人は頭にカゴを乗せ女性の小物を売りに行った。そんな時代になっても、村巡りをやめないポトゥアがいた。荷運びはできない、農業でも食べられない。彼らはひとりでポト絵を持って村を巡るしか

い。「そこのおかみさん、ポト絵を見ないか?」「奥さん、ポト絵を聴きにおいで」、そうやってひとりで行っていた。だから古い歌い方は集団歌唱なのよ。

叔父から教わったのが「ポヤル・ドレ・ガン」と呼ばれる、この集団での歌唱法だった。叔父からこの歌い方を教わった時、女性たち一緒にみんなで学び、妹や弟も習った。(ラニ・チットロコル 2023 年 10 月 2 日)

このラニの語りが示すように、ノヤ村のポトゥアによる絵語りは、移住当時の 1950 年代において、彼らが「ポヤル・ドレ・ガン (pyar dole gan: ポアール韻律の集団歌)」と呼ぶ集団歌唱で行われていた。それが、さまざまなメディアや娯楽の発達、そして農村部での絵語りの需要が失われつつある中で、物売りや農業に転業する者も相次ぎ、ポトゥア自体の数も減少した。その結果、それでも絵語りを継続したラニの叔父であるドゥクシャムやその甥であるグルポドラは、独唱の歌唱法に移行せざるを得なかったことがわかる。歌唱形態の変化をみると、図 4 のように 1950 年代には主流であった男性による集団歌唱が、絵語りの需要やポトゥアの減少によって男性の独唱に移り、その後、近隣の村を巡ることを止めたことと女性の進出によって、旧来の集団歌唱が女性たちの手で復興されたという経緯が見えてきた。

ポトゥアの絵語りが消滅した村も少なくない中、絵師・絵語り師が生業として継承され、現在ではその人口が増えているノヤ村。絵語りが苦境に陥った時代にも歌唱形態を独唱に変えながら続けてきた、今は亡きドゥクシャムやグルポドラの存在が、今日のノヤ村の絵語りの存続に繋がっているのである。

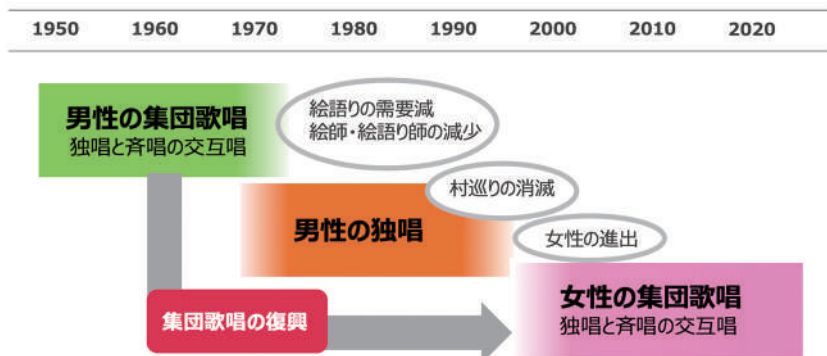


図 4 歌唱形態の時代的变化

4 伝統的生業の復興とウェルビーイング

前章までは、金の 1988 年調査と筆者の 2022 年調査の内容を比較的な視点から、絵師・絵語り師としての担い手の側面や、伝統的な主題と社会的主題が描かれたポト絵とその語り歌という内容の側面に着目して経年変化を検証すると同時に、絵師・絵語り師の職能集団としてノヤ村のポトゥア集落が淘汰されず、共同体を維持し、伝統的生業をいかに復興してきたのか、その過程を考察してきた。

近年、南アジア地域の文化人類学研究において、伝統的生業に関わる社会的レジリエンスを扱った研究は少なくない。例えば、田森の論考（2002）では、かつてパトロンのための音楽演奏や系譜語りを伝統的生業としてきたインド西部ラージャスターン州出身のムスリム楽師の集団に着目し、集団的アイデンティティの再帰的な組織化について考察している。インド独立後、パトロンの庇護を失った世襲楽師らは、ジャイプル市内に楽師コミュニティを形成し、その一部にはフランスなど欧州に移住して音楽活動で成功を収めている出身者もある。一方、かつてのパロン下での非抑圧的な立場や売春と結びつく女性芸能者との関係が現在もスティグマとなっていることに対して、社会的地位向上のために一族のカースト名をムスリムの尊称へと刷新を試みるが、出身地や育った環境によって主張にも違いが見られ、一筋縄では行かない言説空間を分析している（田森 2022: 79–98）。

また中野（2022）は、ラージャスターン州のタール砂漠中央部を移動圏として、呪術治療や蛇を用いた芸能など雑多な実践で門付けをしてきた、ジョーギーと呼ばれる移動民に着目している。ジョーギーは、そうした伝統的生業が近代化政策の過程で違法行為となって廃業せざるを得ず、約 40 年前から徐々に「定住」して集落を形成し、賃金労働で生計を立てている。姻戚で形成された集落や、野営と定住が混在する居住空間には、移動民時代の生活慣習が顕在し、複数の生活拠点を構えるジョーギーの戦略的な「定住」実践について、中野は「地域社会の最底辺に位置付けられ、いつでも追い出されてしまう可能性を孕んだ不安定で非公式なジョーギーたちの『定住』実践は、住所獲得による配給制度へのアクセスに加え、生活の場を複数化することでリスクを分散するという、いわば自前のセーフティネットといえるだろう」（中野 2022: 94）と指摘している。

本論文の冒頭で言及した、社会的レジリエンスを、変化を余儀なくされる困難

な課題に直面する中でも、自集団のウェルビーイングを獲得していくプロセス、そしてそのための能力と捉えると、田森のムスリム楽師の事例では、生業の場を喪失し、移動や活動の場を変えざるを得ない環境に置かれた集団が、経済的には向上したものの、自集団に対する好ましくないイメージの払拭をはかるといふ、集団的アイデンティティ形成のプロセスを見ることができる。また中野のジョーギーの事例では、生業を完全に喪失し、地域社会において不安定な立場の集団が、生業時代の一部の慣習を踏襲しながらも、生活拠点を複数化することでリスク分散をはかっている。これらの事例で特に注目したいのは、ウェルビーイングを獲得するプロセスにおいて、経済的側面だけではなく「集団的アイデンティティ」が重要視されている点や、「リスク分散」が図られている点であり、これらはノヤ村のポトゥアの事例でも同様にみられる特徴である。

本章では最初に、絵語りという実践の「場」における演者（ポトゥア）と聴衆の関係や、「なぜ絵語りを行うのか」という「目的」、すなわちポトゥアのウェルビーイングに関わる部分について考察する。その上で、社会的レジリエンスを分析概念として用い、ポトゥアの変化に対する柔軟な対応力と、個人主義と集団主義を巧みに使い分ける能力が、経済的側面や個人的・集団的アイデンティティの側面におけるウェルビーイング獲得や伝統的生業の復興とどのように関係しているのかを明らかにする。

4.1 絵語りは何のために行われるのか

「皆さん、聴いてくださいよ！」

ポトゥアによる絵語りは、周囲に呼びかける歌から始まる。

金の1988年調査時を含め、近隣の村々へ男性ポトゥアが単独でポト絵を携え巡っていた頃、絵語りの実践の場はノヤ村から7～8 km圏内に点在するヒンドゥー教徒の村10箇所ほどであったという。図5はその時代における絵語りの場、即ち演じ手と受け手の関係性や絵語りの目的と対価について示した概念図である。

演者の多くは単独で巡った男性ポトゥアで、幼少時に父親に同行していたラニは、米の収穫後の時期に農家の村を頻繁に巡り、1日に5 kmほど歩いたと話す。聴衆はそうした農家のヒンドゥー教徒の村人であった。そこで見せたポト絵や歌われた物語は、当時は数少ない娯楽であると同時に、識字率の低い農村において



写真 10 金の 1988 年調査時のノヤ村（金基淑 撮影・提供）



写真 11 1988 年調査時の絵語り（金基淑 撮影・提供）

は道徳や教訓を啓蒙する媒介として機能し、信仰心の厚い村人にとってはヒンドゥーの神々に触れる「移動寺院のような性格」（金 2008: 42）を持っていた。ポトゥアは聴衆の嗜好や要望を踏まえて、携えた複数のポト絵の中からヒンドゥーの神々に関する伝統的テーマか、時事問題を取り入れた社会的テーマか、作品を戦術的に選んで絵語りを行い、米や野菜といった食糧を得ていた。いわば、生活必需品の獲得が絵語りの最大の目的であった。ラニは当時を振り返り、貧困に喘ぎながら信じられないほど苦勞し、貰った野菜や米を料理して食べ、時には空腹を訴えた訪問先で食事が提供されることもあったと話す。一方、聴衆である農家の村人たちにとって、写真 5 のように食糧を差し出すことは喜捨であった。

現在では、絵語りの場やその目的は大きく変化した。絵語りの実践の場は主に

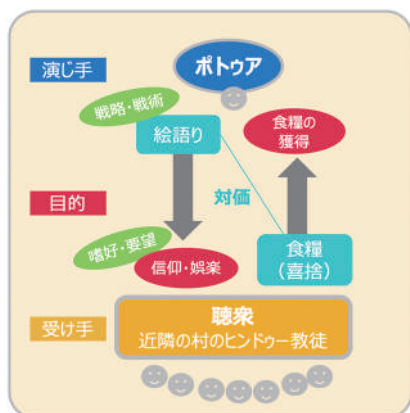


図5 吟遊時代（金の1988年調査時）の絵語りの場と目的

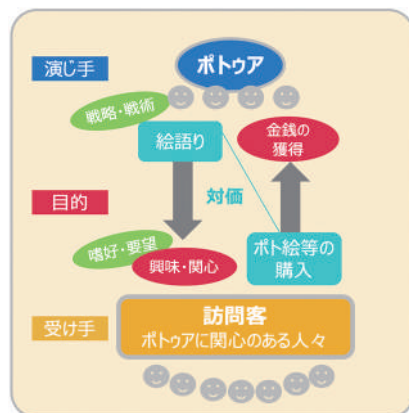


図6 現在の絵語りの場と目的

ノヤ村のボトウア集落内となり、図6で示すように、演者は集団の女性ボトウアで、聴衆はボト絵やボトウアに関心を持って集落の各工房を訪れた人々である。工房主のボトウアは訪問客が好む作品や要望に応じて、近隣の女性ボトウアに声をかけて集団で絵語りを始める。ここでの絵語りの目的は、自らが手掛けたボト絵や絵付け作品の販売であり、それが現在のボトウアの最大の収入源となっている。絵語りに呼ばれた近隣の女性ボトウアたちは、訪問客に次は自分の工房に立ち寄るように促す。興味深い点は、村巡り時代は絵語りの対価として食糧を得ていたが、今日ではこうした集落内での絵語りという行為に対しての直接の対価はなく、ボトウアが絵語りの対価を金銭などで要求することはない点である。つまり、ボト絵などの作品が訪問客によって購入されることで金銭の獲得が成立する。大多数の男性ボトウアが絵語り師よりも絵師を専業として、ボト絵の制作に重点を置くのは、主要な収入源が作品販売中心となったためである。集落内での絵語りは、作品販売のためのいわば営業サービスと化しているようにも映る。

他方、女性ボトウアたちは絵師と絵語り師の両方を担い、災害や感染症、社会課題といった啓発を目的として、NPOや州政府機関から依頼を受けた際には、女性集団で出張して絵語りを行う。その場合は絵語りに対して活動費が支払われる。

第2章において、他村のムスリム・ボトウアとの内婚や、ボトウアの専業化や核家族化によってノヤ村のボトウア集落の人口が増え、受賞経験や販路・人脈によって絵師の中に経済格差が生じていることについて言及した。絵師だけを見れ



写真 12 ノヤ村の自宅兼工房での女性ポトゥアたちによる絵語り
(2022 年 4 月 14 日 筆者撮影)

ば、集落内が同業者だらけであり、複雑な人間関係によって不和や亀裂を生じやすい環境である。事実、1988 年調査時の様子について金は、「本来、絵師・絵語り師の世界には存在しなかった自由競争の時代を生きる彼らは、同業者を排除することで自己の利益を勝ち取ろうとしている」（金 2000: 203）と指摘している。確かに今日においても、自らの作品制作や販売に関しては個人主義や世帯の利益が優先されるものの、金の 1988 年調査時とは異なる大きな変化が見られるのは、女性たちによる集団での絵語りが、村のポトゥアの共同体において潤滑油となっていることである。こうした絵師としての「個人」と、絵語りをする「集団」のように、ノヤ村のポトゥアは生業において個人と集団の活動を柔軟に往来しながら生きている。

4.2 個人主義と集団主義を巧みに使い分ける力

金の 1988 年調査においても、先述の通り、個人主義と集団主義を脈絡に応じて使い分ける点が指摘されている（金 2000: 199）。その時代と比較すると、現在のノヤ村のポトゥアは、より「集団」の活動を増やすことによって、収入面の安定や、集落の人間関係におけるバランスや調和を維持しているかのように見える。図 7 は今日のノヤ村ポトゥアの活動について、個人と集団、絵師と絵語り師を区分し、マトリックスで示したものである。



図7 「個人」「集団」「絵師」「絵語り師」のマトリックス

個人の活動は、前述の通り、ポト絵や絵付け作品の制作とその販売である。シュショボンとロヒ夫妻のように世帯で作品制作・販売に取り組む場合もあれば、シャムシュンドルとラニ夫妻のように夫婦であっても作品制作や販売利益は別勘定の場合もある。男性ポトゥアは、インド国内の大都市で開催されるクラフトフェアへ、出展販売するために出稼ぎに行くが、近年は女性ポトゥアの中にも西ベンガル州に限らず、デリーやバンガロールといった都市部へ販売に行き、生計を立てる者もいる。

他方、現在のノヤ村ポトゥアの集団活動としては、女性集団による集団の絵語りや、州政府・NPOからの依頼による出張の集団絵語りを除くと、次の2点が挙げられる。

第一は、ベンガル地方最大の祭礼ドゥルガ・プジャにおけるドゥルガ女神像を祀るパンダル（神像を祀るため、屋外に建造される仮設の祠）の制作である。ノヤ村のポトゥアがドゥルガ・プジャの時期が近づくと、ポト絵「チョンディ・モンゴル」の売上を見込んで数多く制作し始めることについては前述した。同様に、コルカタでもドゥルガ・プジャの1ヶ月半程前から市内各地でパンダル制作が始まり、ノヤ村の男性ポトゥアはその制作期間中、コルカタに滞在し、絵師の集団として1カ所のパンダル制作に従事する。

こうした集団出稼ぎの場合は、年長者の指示によって制作が進み、年長者が持つ技や知恵は若年者に惜しみなく伝えられる。写真13の2023年のパンダル制作はオミットが総指揮を行った。まず下絵はオミットが手掛け、息子シュショボン



写真 13 制作中のドゥルガ・プジャのパンダル
(シュショボン・チットロコル撮影・提供)

をはじめとした若いポトゥアたちが指示に沿って色彩を加えていく。最後の黒色の輪郭線や目入れは再びオミットが行う。つまり分業体制ではあるが、制作工程は写真 8 のポト絵の制作過程と変わりはない。こうしたパンダル制作の依頼は、コルカタ在住の芸術家を通して行われ、オミットとシュショボン父子は次のように話す。

オミット「このパンダル担当の芸術家が私にこの仕事をくれた。今はドゥルガ女神の十の化身、それから十人の賢者に関する絵を描いている。それから十二月の十二の祭礼。カリ女神、ドゥルガ女神など、さまざまな祭礼の絵を描いたよ。中にある絵、全部だ。これは大仕事だから、みんなでしないと一人で描くのは不可能だ。誰かが色、誰かが目を入れ、みんなでやれば早くできる。一ヶ月半も仕事が続く。みんなに『色を塗って』『目を描いて』と頼みながら、一人でやるより良い仕事ができる。これは一人ではできないよ。」(オミット・チットロコル 2023 年 10 月 6 日)

1 ヶ月以上にも及ぶコルカタでのパンダル制作で、ノヤ村の若手ポトゥアは 1 日一人につき 1,500 ルピーを稼ぐ。そして、ノヤ村の集団全員でこうした個人では不可能な大仕事に取り組むことで、ノヤ村のポトゥアの未来が変わるという。

シュショボン「コルカタのドゥルガ・プジャでは大きなコンペティションがあって、1等になれば賞金が貰え、尊敬を集める。だからさまざまな職人たちに仕事がある。例えば土製の神像作りなど、色んな知り合いが参加しているよ。僕たちはこの枠組みの中で働いている。コンペティションでもし優勝すれば大きな仕事が舞い込む。勝って有名になれば、今後のパンダルの仕事も増えるだろうね。」(シュショボン・チットロコル 2023年10月6日)

筆者が2022年にノヤ村で調査を開始する前までは、金の1988年調査の内容から、ヒンドゥーの神像製作を生業とするポトゥアと比べて、ノヤ村の絵師・絵語り師を生業とするポトゥアは安定収入を得ることが難しいのではないかと推測していた。前者はドゥルガ・プジャなど毎年必ず行われる祭礼において神像製作の受注があるが、個人や世帯で作品制作や販売を行うノヤ村のポトゥアの場合、安定性や継続性に乏しいと考えていたためである。しかしながら、ドゥルガ・プジャのパンダル制作という毎年継続的に訪れる集団での出稼ぎは、収入面だけでなく、彼らの知識や技能の伝承という側面や、絵師としての意欲・動機の側面において重要であることがわかった。

ノヤ村ポトゥアの集団活動として第二に指摘できるのは、祭りの主催である。ノヤ村では「ポト・マヤ Pot Maya」と呼ばれる祭典を2010年より毎冬に3日間開催している(コロナ禍は休止していたが再開)。会期中、村に林立するポトゥアの工房兼自宅はアートギャラリーとなり、訪問者はさまざまなポト絵や絵付け作品に触れ、ポトゥアと交流することができる。絵語りは勿論、自然顔料作りのワークショップも実施され、コルカタなど都市部から観光客も訪れる。そこでの体験も含めて観光資源となり、西ベンガル州政府の援助でポトゥア集落の中心には3階建のコミュニティセンターが建設された。そこでは受賞歴のある作品の展示や、教育機関の校外学習の受け入れ、若手ポトゥアの育成に向けた技術の継承が行われている。こうした祭典や集落のポトゥア集団が行う活動は、チットロトヌ(Chitratanu)と名付けられたポトゥアの組合が主体となって行われ、現組合長は第4世代のオミットが務めている。

ポト絵などの作品制作・販売は個人主義で成立しているノヤ村のポトゥア集落において、絵師・絵語り師という共同体が維持され、伝統的生業が復興してきた背景には、女性ポトゥアらによる集団歌唱や男性ポトゥアたちのパンダル制作、集落で取り組む祭りの主催といった活動に加え、組合の存在が大きい。組合の結

成によって、集落内の人間関係の均衡が保たれるのと同時に、共創的活動を通して、自集団にとってのウェルビーイングの一つ、すなわち集団的アイデンティティが形成されてきたといっても過言ではない。それは共同体の外からの依頼・需要や他者からの評価によって更に強固なものになり、自己肯定や集団の維持・発展への動機付けにもなる。またリスク分散という点においては、収入源を「個人活動の収入」（自営業の作品販売）と「集団活動での収入」（集団活動による賃金収入）に分散することによって、経済的リスクを回避している。これらは、絵師・絵語り師として困窮した時代を経たポトゥアがウェルビーイング獲得のために歩んできた知恵であり、州政府や NPO といった外部団体と上手く関わりながら、変化に対する柔軟な対応力を身につけた結果に基づくものであろう。

4.3 パンデミックを越えて

2019 年末から世界を震撼させた新型コロナウイルス感染症。そのパンデミックにより、インドでも長期にわたってロックダウンが強いられ、一時的に医療は崩壊し、ノヤ村のポトゥア集落でも重鎮の尊い命が奪われた。人の移動や集うことが厳しく制限されたコロナ禍を、ノヤ村のポトゥアはどのように過ごしたのだろうか。経済的に困窮しているのではないかと思いながら、2022 年 4 月、筆者はポトゥアの集落を訪問した。



写真 14 コロナウイルスが魔物として描かれたノヤ村のポトゥア集落内の壁画（2022 年 4 月 14 日 筆者撮影）



写真 15 ポット絵「コロナウイルス」の絵語り（2022 年 4 月 14 日 筆者撮影）

乾季特有の灼熱の太陽に照らされた住居の壁面には、ウイルスの脅威やマスクを装着して家に籠る人々が象徴的に描かれていた。オミットとジュマ夫妻を訪ねると、コロナ禍でポトゥアの重鎮が亡くなったことを悼み、妻ジュマが歌を作り、夫オミットがポト絵を手掛けた作品があるという。そこには、鋭い牙を突き出し、真っ赤な舌を出した魔物を無数の突起を持ったコロナウイルスが囲み、その下には息絶える人々やそれを中継するマスコミが描かれていた（資料15）。まるで地獄絵図のようなその構図と色彩は、ポトゥアにとって共通の脅威を大胆に可視化したものである。すぐに近所の女性たちが集まり、独唱と斉唱の交互唱でポト絵を指差して歌唱が始まった。

「友よ、おじさん、妹たちよ、みんな聴いてくださいよ！
コロナワクチンの接種を恐れないで。再びやってきた！ コロナウイルス！
距離をとって、マスクをつけて。」

歌詞3で示すように、コロナワクチンの接種を促す啓蒙的な歌であり、何度も繰り返される「コロナワクチンの接種を恐れないで」の句は斉唱される。ここで思い出されるのは、かつてポリオ撲滅のために、小児ワクチン接種をポト絵と絵語りでノヤ村のポトゥアが農村の人々に訴えかけてきたことであった。経験したこともない世界的な非常事態の中でも、ノヤ村のポトゥアはポト絵と絵語りがもつ影響力を信じ、時事を巧みにポト絵や絵語りに取り入れる柔軟な対応力を保っていた。そして、パンデミック後のポトゥアは逆境に立ち向かう活力に満ちていた。出稼ぎが不可能となり、集落への来訪者が途絶えると、スマートフォンを駆使して新作のポト絵をSNSに投稿して次々と紹介し、キャッシュレス決済で販売して生計を維持したという。彼らは立ち止まることなく、前進を続けていた（岡田2023: 2-3）。



友よ、おじさん、妹たちよ
みんな聴いてくださいよ！
コロナワクチンの接種を恐れないで

再びやってきた！
 コロナウイルス！
 距離をとって、マスクをつけて。
 人混みにはもう誰も行かない
 コロナワクチンの接種を恐れないで

結婚式にも行かない
映画館や劇場にも行かない
コロナワクチンの接種を恐れないで

市場に行くときはマスクをつけて
靴を履いて家に入る人はいないでしょう
いまは誰もが除菌を忘れない
コロナワクチンの接種を恐れないで

科学者たちがワクチンを考え出した
みんな接種した、
あなたも接種して
コロナワクチンの接種を恐れないで

ワクチンが病院に届いた
みんなワクチンを打ちに行って
距離をとって、距離を保って
みんなワクチンを接種して
コロナワクチンの接種を恐れないで

歌詞3 ポト絵「コロナウイルス」の歌詞
(ジユマ・チットロコル作詞，筆者・スディップ・シンハ訳)

(左)

資料 15 ポト絵「コロナウイルス」
オミット・チットロコル作 (300cm × 73.6cm 巻物
国立民族学博物館所蔵 H0327382)

4.4 絵語りポトゥアの未来

インド各地の農村で長い年月をかけて創出・伝承されてきた無形の民俗芸能や民衆画は、1970年代より欧米を中心とした外国人やグローバルな音楽・美術市場からの「民族性」や「アート」と価値づけるまなざしによって、変化の局面を迎えた。元来、日常生活や年中行事、儀礼と結びついたそれらは、他者の前で披露する「舞台芸能」や購入される「作品」として、担い手の意識にも変化を齎した。南アジア研究者の小西は、インド・ビハール州のマドゥヴァニー画（ミティラー画）やマハーラーシュトラ州の先住民ワールリー画を例に、民俗画から民族画への変容について次のように述べている。

「本来無名無形であったはずの民俗文化の所産は、やがてこれを生み出した特定民族の所産と読み替えられ、その『みごとさ』が、政治的単位でもある民族文化のアイデンティティとされるようになった。（中略）もはやもとの民俗、あるいはそこに根ざす『意味の世界』が薄れてしまっているように思えてしまうのである。」（小西 2011: 27-28）

こうした変容に関する反応は、本稿の第2章で言及した、歌や歌詞といった音楽的・文学的側面を持たない絵画作品を創作するアンワル・チットロコルが最も高名なポトゥアとして評価されていることへの筆者の衝撃とも類似している。だが一方で、偏った本質主義的な願望は、実際に目の前にある事象やそこで今を生きている人々を曇らせてしまう危険性も孕んでいる。

現在、ノヤ村に暮らすポトゥアたちは、絵師・絵語り師という伝統的生業を続け、その暮らしは経済的に豊かになり、他者から生業を認められることによってポトゥアとしての誇りややりがいを得ている。生業とは言うまでもなく、生活を成立させる仕事である。かつては村を巡る絵語りでは安定収入が得られず、兼業や、廃業・転業せざるを得ない時代もあった。生活に困窮した時代を知る第3世代のラニは、日々食べる物にも困った昔と比べると、今は幸せだと話す。彼女にとって、経済的安定や、自身の活動に対する州政府からの表彰、米国への招聘経験、女性ポトゥアの社会進出への貢献、集団歌唱の復興、これらすべてが、絵師・絵語り師としての個人的・集団的アイデンティティの形成や、ウェルビーイングの達成に影響している。

ラニへの調査の中で、強く印象に残った出来事があった。第2章で言及した、かつて巡った村を再訪する際、同行したいと懇願した8歳の孫に対して、厳しく同行を拒絶した姿である。昔と比べて豊かな時代を生きる孫世代に、絵語りをして食糧の施しを受ける姿を見せたくなかったのか、あるいはヒンドゥーを装う姿を見せたくなかったのか、その真意を踏み込んで尋ねることは筆者にはできなかった。

ポトゥアが手放さない歌の力

本稿の最後に注目したいのは、作品制作・販売が最大の収入源であるノヤ村のポトゥアが、なぜ大きな収入にもならない「絵語り」を現在も続けるのかという点である。

歌や歌唱という行為が持つ力は、世界の歴史をみても明らかなように、絵語りで村を巡った時代を経験したラニの世代は、誰よりも歌と語りが持つ力を信じている。だからこそ単に絵師ではなく、絵語り師として、次世代へ継承していくことに強い思いを抱いている。第2章でも言及したラニとシャムシュンドル夫妻の二人三脚の活動は、村の女性たちの社会進出やポトゥアとしての技術向上や経済的基盤の構築に大きく貢献した。女性による集団歌唱の力強い絵語りが復興し、ラニはそれを伝承していくことについて次のように語る。

子どもたちに話し、孫たちにも何度も言い聞かせている。勉強をしなさい。けれども歌も覚えていなさい。絵も描き続けなさい。忘れずにいれば、私たちはそれで生きていけるのだから。

盛大にお祝いをして、多くの装身具や現金を持参して女性は嫁入りする。しかし、ずっと安泰かと言うとそうではない。辛く苦しいことだってあるの。だから苦労をしている娘に話している。もし絵を描ければ、そして歌を覚えていれば、男女関係なく手に職をつけて食べていける。叔父のドゥクシャムは亡くなった。しかしそれぞれが教えられた歌を上手に歌っている。それは嬉しいこと。(ラニ・チットロコル 2023 年 10 月 2 日)

現在の若い世代の活躍を喜び、歌と絵を続ければ「私たちはそれで生きていける」という彼女の言葉と思いを、次世代の子どもたちはどのように継承していくのだろうか。

結論——ノヤ村のポトゥアにみる社会的レジリエンス

本論文は、インド各地で絵画を用いて物語を語る口承芸能が衰退する中で、「なぜノヤ村のポトゥアは伝統的生業で生き延びてこられたのか」という疑問を契機に、文化人類学者の金基淑による 1988 年調査の内容と筆者による 2022 年調査内容を、1) 担い手、2) 内容、3) 実践・目的という 3 つの側面から経年変化に着目し、ノヤ村のポトゥアが共同体を維持し、伝統的生業を復興させてきた過程を明らかにした。

第一に、「担い手」の側面における最も大きな変化は、ノヤ村のポトゥア集落での絵師・絵語り師が金の 1988 年調査時の 22 人（うち女性 4 人）から、2020 年代に入ると 254 人（うち女性は 124 人）にまで増加し、絵師や絵語り師の専門化や女性ポトゥアの活躍が顕著なことである。その背景には、他村の神像製作を生業とするムスリム・ポトゥアとの内婚によってポトゥア集落の人口が増加しつつあることや、農村における社会的弱者であった女性への支援やその経済的基盤の構築を訴え、女性に関する社会課題について絵語りで啓蒙活動を続けた夫妻の存在とその功績が大きい。またポトゥアの専門化が進み、現在はスマートフォンや SNS、キャッシュレス決済といったデジタルツールを利用して積極的に販路を拡大している。その結果、ポト絵や絵付け作品の販売収入が最大の収入源となり、表彰などの外部評価への関心の高まりやアーティスト化の現象についても指摘した。その一方で、ノヤ村のポトゥアがイスラーム信仰や、ムスリムでありながらもムスリムとは言い切らず、ヒンドゥー名を名乗る慣習は今も続いている。この曖昧な態度こそが、彼らが生きるための戦略であり、ヒンドゥー社会やムスリム社会の周縁に位置するノヤ村の集落が、1950 年代に他村から逃れてきた移住者で構成された歴史をもちながらも、周囲からの攻撃や対立関係なく共同体を今も維持できているのは、金が指摘した便宜主義的な宗教観と、他集団とのバランスと距離感を巧妙にとってきた結果である。

第二に、ポト絵とその語り歌という「内容」の側面において、ポト絵に関しては、ドゥルガ女神や蛇の女神モノシャといったヒンドゥーの神々が登場する物語や『ラーマーヤナ』といった伝統的テーマと、農村の社会課題や災害・感染症といった社会的・啓蒙的テーマの 2 系統を現在に至るまで維持している。後者の主題にお

いては、宗教的差異によって対立や分断を生むのではなく、困難な局面でこそ同じ人間として共に団結する必要があるというポトゥアの精神が、たとえ時代が変わっても一貫して絵語りに生きている。これはイスラームとヒンドゥー社会を巧みに生きてきたノヤ村のポトゥアの知恵であり、彼らの考える理想の共生社会である。彼らは経済的支援のもとで NPO や政治家に操られてきた存在ではなく、対立や分断のない共生社会について社会的主題を絵語りに落とし込むという、ポトゥアなりの解釈を示している。

またポト絵の制作においては、制作手法や工程には変化がない一方で、需要の変化に伴って、失われた主題やレパートリーの減少、画風や彩色、大きさ、構図の変化が顕著である。吟遊時代のコマ数が多い巻物よりも、額装用の小型作品や出品用の大型作品、魚や先住民サンタルをモチーフとした絵付け作品が現在は好まれて制作されていることがわかった。絵語りの語り歌について、伝統的主題の歌詞はポアール韻律に基づいた 8 音節と 6 音節を組み合わせた定型詩として維持されている。他方、歌唱形態やリズム・旋律は変容していることが明らかとなった。金の 1988 年調査では、絵語りの需要やポトゥアの減少によって男性の独唱が中心であったが、その後、近隣の村々を巡ることを止め、女性の進出によって旧来の集団歌唱が女性たちの手によって復興された。歌詞の 8 音節と 6 音節が独唱と斉唱の交互唱で繰り返され、新作も次々に生まれている。

第三に、絵語りの場や聴衆との関係を含む「実践」や絵語りをする「目的」の側面については、金の 1988 年調査時を含むヒンドゥー教徒の農民を聴衆に吟遊した時代、ヒンドゥーの神々の物語や社会課題を訴える絵語りは数少ない娯楽であり、同時にヒンドゥー信仰や教訓的・道徳的な意味を啓蒙する役割も担っていた。聴衆が差し出す食糧は喜捨であり、絵語りの目的は生活必需品の獲得でもあった。一方で現在の絵語りの場は主にノヤ村のポトゥア集落内の各工房であり、絵語りの目的は自らが手掛けたポト絵などの販売のために行われ、絵語りという行為に対する直接の対価はなくなった。

本論文ではもう一つの研究目的である、「社会的レジリエンス」を分析概念として援用し、ポトゥアの変化に対する柔軟な対応力と、個人主義と集団主義を巧みに使い分ける能力が、経済的側面と個人的・集団的アイデンティティの側面におけるウェルビーイング獲得や伝統的生業や共同体の復興とどのように関係してい

るのかを検証した。

社会的レジリエンスを、変化を余儀なくされる「困難な課題」に直面する中でも、「自集団のウェルビーイングを獲得していくプロセス」、そして「そのための能力」と捉えたとき、ノヤ村のポトゥアにとっての「困難な課題」は、1950年代の集落や共同体の黎明期から既に始まっていたといっても過言ではない。当時の状況を知る世代が存命していないため、詳細を知る術はないが、ポトゥア集落はヒンドゥー教への再改宗が進む複数の村から徐々に逃れてきた移住者たちの集合体であり、ノヤ村内のムスリム居住区やヒンドゥー教徒の各集落とは地理的距離を保ち、日々の食糧を得るために、集落外の関わる人々に対しては宗教的状況主義を貫き、絵師・絵語り師を生業としてきた。また次なる「困難な課題」は、1980年代から1990年代にかけて、急速な社会変化に伴って農村での絵語りの需要や価値が低下し、伝統的生業の維持が危機を迎え、日々の満足な食事すらままならない困窮状況に陥ったことである。ポトゥアにとってのウェルビーイングについて、本論文では経済的側面と個人的・集団的アイデンティティの側面を指摘した。経済的側面では、村を巡って絵語りすることがなくなると、ポト絵といった作品販売の現金収入が主となり、都会の人々を対象とした都市への出稼ぎが当たり前になった。さらに女性ポトゥアの社会進出によって、NPOや州政府からの活動資金を得て、集団歌謡での絵語りも復興した。ポトゥアは収入源を「個人活動の収入」と「集団活動での収入」にリスク分散することによって、かつて経験したような困窮状況を回避している。また、金の1988年調査ではアイデンティティに関する側面は取り上げられてなかったが、現在のポトゥアにとっては個人的・集団的アイデンティティは重要な側面である。ポト絵などの作品制作・販売は個人主義で成立し、自身や自作品に対する外部評価に関心が高まり、絵師としての個人的アイデンティティが重要視される。一方で、絵師・絵語り師という共同体が維持され、伝統的生業が復興してきた背景には、女性ポトゥアの集団歌唱、男性ポトゥアのパンダル制作、集落での祭りの主催、組合の存在などによって、ノヤ村の絵師・絵語り師としての集団的アイデンティティが形成されてきたことが指摘できる。それは集落内の人間関係の均衡だけではなく、外部からの需要・評価によって、より強固な肯定感や集団の維持・発展への動機付けにもつながっている。これらは、絵師・絵語り師として困窮し、不安定な時代を経たポトゥアがウェルビー

イング獲得のために歩んできた知恵であり、変化に対する柔軟な対応力を身につけた結果に基づくものである。

かつて農村から都市へ移住したカリガトの絵師たちは、農村時代とは異なる生業方法や絵画様式を採用し、カリガト絵を生み出した。その絵は時に時代を映す鏡となり、社会的弱者の感情を反映して富裕層や司祭階級の凋落や偽善を嘲笑する、風刺の精神に満ちていた。ノヤ村のポトゥアもまた、移住や生業の危機という逆境を乗り越え、柔軟に変化を続けながら、絵と歌の力を味方に、異教の神を語り、社会課題をこの先も歌い続けていくのであろう。

最後に、本論文において写真画像を用いて紹介した国立民族学博物館所蔵のポト絵は全て、筆者がノヤ村のポトゥアたちから譲り受けた作品である。個々のアーティストとしての側面を尊重し、許諾を得た上で、村名や作者名は仮名ではなく実名で掲載した。また、ノヤ村でのポト絵の制作や絵語りの実践、作品や生業に関するインタビューを収録した、映像民族誌「絵語りポトゥアとして生きる」(41分、2024年制作)を制作し、それは国立民族学博物館の映像民族誌シリーズやビデオテークで視聴可能である。本研究に関わる資料収集や調査結果を、展示・映像作品・本論文という異なる媒体で発信することが叶った。研究を循環させることの重要性を強く感じた本研究が、数十年後など、いつの日か、研究者や当事者の少しでも役立てば幸いである。

謝 辞

ポトゥアに関するポト絵や録音資料を快く提供してくださり、ポトゥアに関する情報や研究の助言を頂いた金基淑先生に感謝申し上げます。また、歌詞の翻訳にご協力いただいた言語学者のスディップ・シンハ氏、現地での映像撮影や映像作品制作に尽力くださった阿部櫻子氏をはじめ、収集や調査に快くご協力いただいたノヤ村のポトゥアの皆様に厚く御礼を申し上げます。最後に、拙稿について、理論的な枠組みにおける重要な指摘や助言をくださった査読者の皆様に心より感謝申し上げます。

注

- 1) ベンガル地方を中心に居住するポトゥアは、自らをポトゥア、あるいは絵師を意味するチッ

トロコル (Chitrakar ヒンディー語読みではチットラカール) と称する。ベンガルの農村社会においては、ポトゥアという名称よりもチットロコルと呼ばれる傾向がある。ポトゥアの語源は研究者によって議論されてきたが、その起源は定かではない。ノヤ村のポトゥアに基づく説では、一説にはベンガル語の不定詞ポトノ (patano) に由来するとされ、「説く」という意味を持つとされる。これは、聴衆を前にポト絵を見せながら歌う行為と結びついている (Korom 2006: 32)。

- 2) 本稿では、ベンガル語のカタカナ表記は調査地での発音に依拠する。現代ベンガル語の発音では、母音の長短の区別がなく、a (ア) や ā (アー) が o (オ) に近い発音となる。だが日本で定着しているインドに関する用語は、ヒンディー語発音に基づいたカタカナ表記が多いため、例えばラービンドラナート・タゴールはベンガル語で音写するとロビンドロナト・タクルとなる。したがって、混乱を避けるために、例外的に日本で定着しているカタカナ表記を採用する。
- 3) 絵画を用いて物語を語るインドの口承芸能の一つに、インド北西部ラージャスターン地方のボーパ (bhopa) によるパド絵 (phad) を用いた絵解き語りがある。ボーパはラージプートの民俗英雄神パープージーの儀礼を執行する非バラモン司祭の総称である。ボーパの中には、パープージーの物語が横長の布に描かれたパド絵をもとに、伴奏楽器を奏でながら語り、歌唱する者たちがいる。時にはボーパにパープージーが憑依することもあるという (三尾 1995: 129-131)。絵師と語り部は分業され、パド絵はジョーシー (joshī) と呼ばれる絵師の職能集団に依頼して制作される (田森 2024: 90)。民博にはパド絵 1 点 (H0163179) が所蔵されている。
- 4) サンタルは、サンタル語を母語とする先住民で、インド憲法によって「指定トライブ (scheduled tribe)」に認定されているインド最大のトライブである。インド東部の西ベンガル州やビハール州、ジャールカンド州、オリッサ州を中心に広範囲に暮らしている。サンタル・ポトゥア (別称ジャッドウ・ポトゥア) は非サンタルであるが、サンタルの村を訪れて、サンタルの創世神話などの絵語りを行う。また、サンタルに死者があると「眠入れの絵 (チョックダン・ポト)」 (西岡 1995: 44) を持参し、死者が祖霊の元に行けるように絵の中の人物に黒眼を入れる儀礼・呪術的な側面も担ってきた。1995 年開催の「原インド・いのちの鼓動」展 (フジタ・ヴァンテ) では西岡直樹氏収集のサンタル・ポトも展示・紹介された。
- 5) 金基淑氏へのインタビュー (2022 年 12 月 15 日, 2023 年 5 月 1 日) の内容や、同氏から提供頂いた 1988 年調査当時に収集したポト絵や録音資料を含む。
- 6) シャムシュンドルとラニのインタビューは 2023 年 10 月 2 日、シュショボンとロヒのインタビューは 2023 年 10 月 3 日に実施した。掲載年齢は調査時の年齢である (以下同様)。
- 7) ラニは女性ポトゥアたちで活動を開始した詳細な時期を記憶していなかったが、金の調査 (1988 年～1991 年) では女性ポトゥアたちの集団活動について報告されていないため、1990 年代から徐々に活動が定着していったものと考えられる。
- 8) 資料 1 のポト絵「ダウリ」(2023 年収集, H0328054) は、シャムシュンドルが 1980 年代に制作した作品で、2023 年 10 月調査時の本人による解説 (各コマの場面描写) を加えた。同調査時には本人は語りが出来ない状態だったため、金の調査資料に基づき、シャムシュンドル本人の 1988 年前後の語りを資料 2 として掲載した。
- 9) 2025 年 5 月 25 日現在、1 ルピーは約 1.7 円。
- 10) ヴァルナとは、色を意味する「古代インドのサンスクリット古典籍に記された社会階層概念である。浄／不浄の観念によって階層化された頂点のバラモン (祭司階層)、クシャトリヤ (王侯・武人階層)、ヴァイシャ (平民階層)、シュードラ (上位三ヴァルナに奉仕する隷属民階層) と下るにつれて、不浄の度合いが増す 4 階層から成る。この概念は、紀元前 8 世紀から紀元前 7 世紀に成立し、紀元後 4～7 世紀には、これらの下にさらに不可触民＝ダリトというカテゴリーが付け加えられた。」 (鈴木 2024: 8)
- 11) アンワル・チットロコルへのインタビューは 2023 年 10 月 3 日にノヤ村のポトゥア集落にある自宅前で実施した。
- 12) 国立民族学博物館所蔵の資料 2～4 は 1960 年代にコルカタで収集され、2021 年に国立民族学博物館がその寄贈を受け入れたものである。
- 13) ヴィクトリア&アルバート博物館が所蔵するアンワルの作品は、同博物館の下記 URL のコレクション検索から Anwar Chitrakar と入力すると 3 点が表示される。また他のノヤ村のポトゥアでは、グルボド (Gurupada Chitrakar) の作品 2 点と、ドゥクシャム (Dukhushyam

Chitrakar) の作品 1 点が収蔵されている。いずれも巻物である。https://www.vam.ac.uk/collections?type=featured (accessed May 25, 2025)

また同博物館には 700 点を超えるカリガト絵画が収蔵され、世界最大のコレクションである。

- 14) 表内に記載した主題は、ノヤ村のボトゥア集落での調査時に筆者が複数を目にした作品のほか、Korom (2006; 2015) の研究で言及された作品 (「バーブリー・マスジッド」「インディラ・ガンディー暗殺」「マザー・テレサの死」) や金 (1992; 2000; 2008; 2012) の研究やインタビューの中で言及された作品 (「ショット・ビル」「原爆」「サヒブ」) を加えたものである。

参 照 文 献

〈日本語〉

池田昭光

- 2001 「(新刊紹介)『アザーンとホラ貝』」『民俗学研究』66(3): 370。

岡田恵美

- 2023 「ベンガルの絵語りボトゥアが描いたコロナ禍」『月刊みんぱく』2023 年 1 月号, 47 (1): 2-3。
2024a 「第 3 章 ベンガルの吟遊行者と絵語り」『吟遊詩人の世界』pp. 40-53, 東京: 河出書房新社。
2024b 「研究者のまなざし 5 ボトゥアの時代的变化を追って」『吟遊詩人の世界』pp. 160-165, 東京: 河出書房新社。

北田信

- 2010 「中期ベンガル語の韻律について」『環境変化とインダス文明——2009 年度成果報告書』pp. 155-159。

金基淑

- 1992 「二つの水, jal と pani ——インド・ベンガル地方のボトゥア・ジャーティの生業と宗教」『民族学研究』57(2): 149-173。
2000 『アザーンとホラ貝——インド・ベンガル地方の絵語り師の宗教と生活戦略』東京: 明石書店。
2008 「第 2 章 絵語りで伝える神々の物語——ベンガルのボト絵とボトゥア」鈴木正崇編『神話と芸能のインド——神々を演じる人々』pp. 31-51, 東京: 山川出版社。
2012 「7 ボトゥア<西ベンガル州>——それでも絵語りの仕事は続く」『カーストから現代インドを知るための 30 章』pp. 76-84, 東京: 明石書店。

金基淑編

- 2008 『南アジア』(講座 世界の先住民族——ファースト・ピープルの現在 03) 東京: 明石書店。

栗田靖之他編

- 1991 『ヒンドゥー世界の神と人』(国立民族学博物館 特別展「大インド展——ヒンドゥー世界の神と人」図録) 大阪: 関西テレビ放送。

小西正捷

- 2002 『インド民俗芸能誌』東京: 法政大学出版局。
2011 「インド 祈りの造形——かたちから意味を読み解く」鈴木正崇編『南アジアの文化と社会を読み解く』pp. 24-28, 東京: 慶應義塾大学東アジア研究所。

杉江あい

- 2023 『カースト再考——バングラデシュのヒンドゥーとムスリム』名古屋: 名古屋大学出版会。

鈴木真弥

- 2024 『カーストとは何か——インド「不可触民」の実像』(中公新書 2787) 東京: 中央公論新社。

岡田 異教の神を語り、社会課題を歌う

田森雅一

2022 「第3章 われわれのカーストをめぐる再帰的多声——ムスリム世襲楽師たちの言説空間とライフ・ポリティックス」三尾稔編『南アジアの新しい波 下巻』pp. 79–98, 京都：昭和堂。

2024 「ラージャスターンのボーパと絵解き語り——叙事詩空間におけるラーマ物語との関係性を中心として」『文明 21』（愛知大学国際コミュニケーション学部紀要）53: 89–103。

チットロコル, ジョイデブ／モエナ・チットロコル

2018 『つなみ』スラニー京子訳, 横浜：三輪舎。

外川昌彦

2003 『ヒンドゥー女神と村落社会——インド・ベンガル地方の宗教民俗誌』東京：風響社。

2009 『宗教に抗する聖者——ヒンドゥー教とイスラームをめぐる「宗教」概念の再構築』京都：世界思想社。

中野歩美

2022 「第3章 複数の生活拠点をつくること——インド北西部の移動民と『定住』実践」三尾稔編『南アジアの新しい波 上巻』pp. 79–103, 京都：昭和堂。

西岡直樹

1995 「原初の世界の語り絵・ポト」「放浪の語り絵師・ポトゥア」フジタ・ヴァンテ編『原インドの世界——生活・進行・美術』pp. 18–47, 東京：東京美術。

樋口美作

2015 「イスラームと共生」『共生科学 (Journal of Kyosei Studies)』6: 121–125。

三尾稔

1995 「異界への道標——神と人をつなぐボーパ」フジタ・ヴァンテ編『原インドの世界——生活・進行・美術』pp. 124–131, 東京：東京美術。

2022 「序章 グローバルな人やモノの流動と南アジア文化」三尾稔編『南アジアの新しい波 下巻』pp. 1–18, 京都：昭和堂。

〈外国語〉

Archer, W. G.

1953 *Bazaar Paintings of Calcutta: The Style of Kalighat* (Victoria and Albert Museum Monograph 7). London: Her Majesty Stationery Office.

Ayyagari, Shalini R.

2022 *Musical Resilience: Performing Patronage in the Indian Thar Desert*. Middletown: Wesleyan University Press.

Bhattacharjee, B.

1980 *Cultural Oscillation: A Study on Patua Culture*. Calcutta: Naya Prokash.

Census of India

2011 Naya Population - Paschim Medinipur, West Bengal. <https://www.census2011.co.in/data/village/342608-naya-west-bengal.html> (accessed March 21, 2025)

Chatterji, R.

2012 *Speaking with Pictures: Folk Art and the Narrative Tradition in India*. New Delhi: Routledge.

Chitrataru

2020 *Patachitra: Narrative Visuals*. Naya: Chitrataru.

Flowers, A.

2013 *I See the Promised Land: A Life of Martin Luther King Jr.* Toronto: Groundwood Books.

Hall, P. A. and M. Lamont

2013 *Social Resilience in the Neoliberal Era*. New York: Cambridge University Press.

Jain, J.

1999 *Kalighat Painting: Images from a Changing World*. Ahmedabad: Mapin Publishing.

Kaiser, T.

2012 *Painted Songs: Continuity and Change in an Indian Folk Art*. Stuttgart: Arnoldsche Art Publishers.

- Korom, F. J.
2006 *Village of Painters: Narrative Scrolls from West Bengal*. Santa Fe: Museum of New Mexico Press.
2015 Singing about Disaster: How Oral Tradition Serves or Does Not Serve Governmentalities. *Annual Papers of the Anthropological Institute* 5: 131–150.
- Rossi, B.
1998 *From the Ocean of Painting: India's Popular Paintings, 1589 to the Present*. Oxford: Oxford University Press.
- Sinha, S. and C. Panda
2011 *Kalighat Paintings: From the Collection of Victoria and Albert Museum, London and Victoria Memorial Hall, Kolkata*. London: V&A Publishing.
- Solomon, R.
2019 Involvement of Civil Society in India's Polio Eradication Program: Lessons Learned. *The American Society of Tropical Medicine and Hygiene* 101(Suppl 4): 15–20.
- WHO (World Health Organization)
Who Remains Firmly Committed to the Principles Set Out in the Preamble to the Constitution. <https://www.who.int/about/governance/constitution> (accessed May 25, 2025)

Research Note

**Late Pleistocene to Holocene Seafaring
in Near Oceania and Wallacea:
Archaeological and Ethnographic Evidence**

Rintaro Ono* and Tomoya Akimichi**

更新世後期から完新世におけるニア・オセアニアとウォーレシアの渡海
——考古学および民族誌資料からの一考察——

小 野 林太郎 ・ 秋 道 智 彌

For late Pleistocene to Holocene seafaring in Near Oceania and Wallacea, the main actors were modern humans (*Homo sapiens*). Their pre-historic sea-crossing routes in Near Oceania and Wallacea can be traced from archaeological evidence, particularly obsidian, pottery, and animal bone remains. Obsidian trails in these maritime and island regions display complex relationships between production sites and destinations over thousands of kilometres across Island Southeast Asia (ISEA, including Wallacea) and Near Oceania. Trails of pottery and animal remains span more limited areas among certain island groups but also help to reconstruct past human migration, especially for Austronesian groups from Island Southeast Asia as they entered Near and Remote Oceania. Dentate-stamped pottery traditions, including Lapita, may indicate past migration routes and dates of early Austronesian people during middle Holocene, while recent zoo-archaeological and genetic studies of animal remains (*e.g.*, pigs, dogs, chickens, marsupials, and rats) are also indicative of past human migration routes at various times. Here, we focus on past translocations of marsupials in Wallacea and Near Oceania. Based on the sum of archaeological and

* National Museum of Ethnology

** Professor Emeritus, National Museum of Ethnology

Key Words : Late Pleistocene, Holocene, seafaring, Near Oceania, Wallacea

キーワード : 更新世後期, 完新世, 渡海, ニア・オセアニア, ウォーレシア

ethnographic evidence, we consider (1) early seafaring in Near Oceania and Wallacea, and (2) seafaring and maritime networks from the late Pleistocene to the late Holocene.

更新世後期から完新世において、ニア・オセアニアやウォーレシアで渡海を伴う移住を試みたのは私たち現生人類（ホモ・サピエンス）だった。ニア・オセアニアおよびウォーレシアにおける先史時代の渡海移住ルートは、考古学的には黒曜石、土器、動物骨の遺物などの考古学的証拠からたどることができる。これらの島嶼域における黒曜石の伝播経路は、東南アジア島嶼部（ウォーレシアを含む）からオセアニアにかけて、数千キロメートルに及ぶ。ゆえにその産地から消費地までの経路は複雑で多くの島々を経由した可能性も示唆している。一方、土器や動物骨から推測される移動経路は、特定の島嶼群の間で運ばれていた事例もあり黒曜石ほど長距離に動いた痕跡は少ない。しかし土器や動物の移動は、東南アジア島嶼部からニア・オセアニアやリモート・オセアニアに進出したオーストロネシア語族集団の過去の移住を再構築する手掛かりとしても注目されてきた。たとえばメラネシアに出現したラピタ人による鋸歯印文土器の拡散からは、完新世中期のオーストロネシア語族集団における移住ルートやその初期年代が議論されてきた。また、遺跡から出土した動物骨（ブタ、イヌ、ニワトリ、有袋類、ネズミ）を対象とした動物考古学や遺伝学による研究からも、先史時代における人類の移住ルートや年代が検討されてきた。このうち本稿では、とくにウォーレシアとニア・オセアニアの更新世後期や完新世前期における有袋類の過去の移動に注目し、再検討する。同じく本稿では、考古学的な証拠と民族誌学的記録の両情報を総合的に検討しつつ、(1) ニア・オセアニアとウォーレシアにおける初期の海洋航海、(2) 更新世後期から完新世にかけての海洋航海と海洋ネットワークのあり方について考察する。

1 Introduction	4.1 Austronesian Colonisation in Near Oceania
2 Late Pleistocene Migration and Seafaring into Near Oceania	4.2 Obsidian Networks and Seafaring by Austronesian Migrants
3 Late Pleistocene to Middle Holocene Seafaring and Maritime Networks	4.3 'Ethno-Networks' in Near Oceania during the Late Holocene
3.1 Volcanism and Seafaring	5 Concluding Discussion
3.2 Obsidian Sources and Seafaring Networks	5.1 Early Seafaring in Near Oceania and Wallacea
3.3 Translocation of Marsupials and Round-Trip Voyaging	5.2 Seafaring and Maritime Networks from the Late Pleistocene to Holocene
4 Austronesian Migration and Middle to Late Holocene Seafaring	

1 Introduction

Modern humans (*Homo sapiens*) are thought to have originated on the African continent before entering Eurasia on foot across land. The people who eventually migrated to the island regions of tropical and subtropical Asia must have crossed ocean waters to reach these areas. Current archaeological and ethnological evidence indicates that only *Homo sapiens* were capable of crossing sea barriers to reach the many islands of Southeast Asia and Oceania during the late Pleistocene (Bellwood 2017; Erlandson 2001; Ono 2016).

In Island Southeast Asia, islands currently located in eastern Indonesia and Timor-Leste existed as islands even during the late Pleistocene (when sea levels were lower), whereas islands belonging to western Indonesia, including Sumatra, Java, and Borneo/Kalimantan, were connected to the Asian continent. The former island region is known as Wallacea, while the latter region is known as Sundaland (Sunda) during the late Pleistocene or last ice age. Early modern humans migrating into these regions could enter Sunda on foot but had to cross ocean waters to enter Wallacea and reach Sahul (Sahul being the combined continental island of Australia and New Guinea) in Near Oceania. Migration by modern humans into Wallacea and Near Oceania must have required early seafaring skills and technology to cross ocean gaps of over 50–80 km, the minimum distances between Wallacean Islands and the past west and north coasts of Sahul (Kealy, Louys, and O'Connor 2017, 2018; Norman et al. 2018).

The earliest seafaring and maritime migration into Wallacea and Near Oceania likely occurred more than 44,000 years ago, at a minimum. The exact dates remain controversial and will be reviewed in Section 2. Nevertheless, archaeological evidence clearly shows that the first migrants entering Wallacea and Near Oceania possessed seafaring skills and occasionally moved from island to island during the late Pleistocene to early Holocene, approximately 30,000 to 10,000 BP. Archaeological evidence for seafaring and human movement between islands includes excavated obsidian materials and remains of various terrestrial animal species, particularly marsupials. The late Pleistocene and Holocene sites of Matenbak, Buag Merabak, and Matenkupkum in New Ireland yielded several obsidian pieces sourced from New Britain from the period 20,000–16,000 BP during the late Pleistocene (Leavesley and Allen 1998; Leavesley and Chappell 2004; Summerhayes and Allen 1993), whereas Lou Island obsidian was transported to the mainland of Manus in the terminal Pleistocene (13,000 BP). Early evidence for the anthropogenic translocation (Flannery and White 1991) of marsupials has been reported from the Matenbak site of New Ireland and from the islands of Halmahera, Morotai, and Gebe (northern Moluccas) in Wallacea (Flannery et al. 1995; 1998).

Obsidian and marsupials continued to be used by people throughout the

Holocene and, until recently, in both Wallacea and Near Oceania. We will discuss this more recent evidence in relation to prehistoric seafaring and its possible development. Unfortunately, direct archaeological evidence of seacrafts suitable for early prehistoric seafaring and migration has not yet been found. Wooden materials typically do not survive in the soils of tropical regions, except in swamps and underwater environments, and archaeological investigations in such coastal settings remain limited. Thus, in the context of Near Oceania and Wallacea, we must refer to ethnographic sources to discuss and reconstruct prehistoric boats or canoes. Based on archaeological and ethnographic evidence, including our own data, we will focus on: (1) late Pleistocene human migration and seafaring into Near Oceania from the islands of Wallacea; (2) late Pleistocene to middle Holocene seafaring and maritime networks; and (3) Austronesian seafaring and migration during the middle to late Holocene. Our aim is to consider how seafaring and maritime networks developed and transformed from the late Pleistocene to the late Holocene in Wallacea and Near Oceania.

2 Late Pleistocene Migration and Seafaring into Near Oceania

Modern human migration *via* Wallacea and into Sahul during the late Pleistocene required relatively long-distance seafaring over stretches of 50–80 km (Figures 1 and 2). This likely represents the earliest human colonisation of Oceania by sea crossing. The archipelago of Wallacea is located geographically between the Wallace–Huxley Line in eastern Southeast Asia and the western coast of Sahul in Oceania.

The term ‘Wallacea’ derives from Alfred Russel Wallace, who proposed a zoogeographic boundary separating Asian and Oceanic animal species, running between Lombok and Bali, and between Borneo/Kalimantan and Sulawesi (Wallace 1869). This is now known as Wallace’s Line. The boundary line was later extended northwards by Huxley to run between Palawan and other Philippine Islands, becoming known as the Huxley Line. Thus, Wallacea includes the eastern Indonesian Islands, including Timor, as well as the Philippine Islands, excluding Palawan.

During the last ice age (approximately 60 ka to 12 ka), sea levels dropped by up to approximately 150 m relative to the present level. As the islands of Wallacea are surrounded by relatively deep seas (presently more than 150 m deep), the archipelago persisted throughout the Pleistocene, and no land bridges formed between Sunda and Sahul. This is the most significant geological characteristic of Wallacea. It implies that sea crossings were essential for past human migration through Wallacea to reach Sahul in Near Oceania. Although most Wallacean Islands were likely first reached by *Homo sapiens*, Luzon Island in the Philippines and Flores Island in Indonesia show traces of earlier hominin species dating to more than

60,000 BP (Figure 1).

For early human migration from the Wallacean Islands into Sahul or Near Oceania, two main routes have been suggested: a ‘northern’ route from Sulawesi to the Maluku Islands and into the New Guinea region, and a ‘southern’ route leading to northern Australia (Birdsell 1977; Sondaar 1989; see Figure 1). GIS studies by

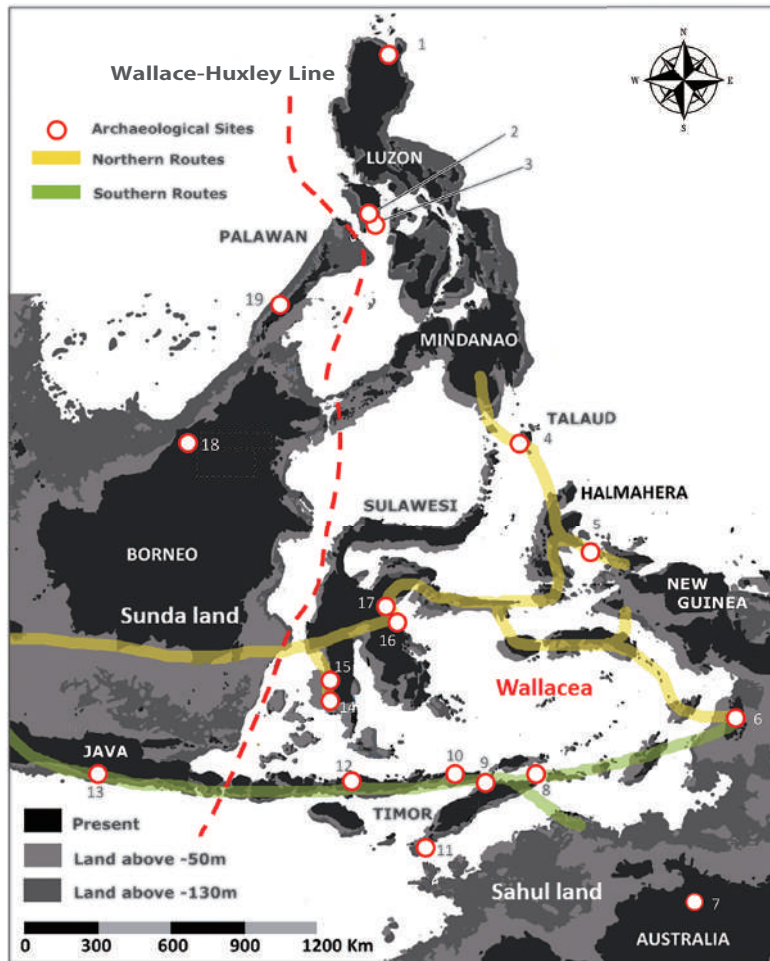


Figure 1 Present and past land areas (greyscale) showing Sunda, Wallacea, western Sahul (part of Near Oceania), major Pleistocene sites (red circles), and possible modern human migration routes (yellow and green lines). Adapted from Ono, Pawlik, and Fuentes (2024).

Sites: 1. Callao Cave (65–50 ka); 2. Billat Cave (22 ka); 3. Bubog (33 ka); 4. Leang Sarru (35 ka); 5. Golo Cave (36 ka); 6. Liang Lemdubu (27–9 ka); 7. Madjedbebe (76–54 ka); 8. Jerimalai (43–41 ka); 9. Laili Cave (44–43 ka); 10. Tron Bon Lei (21 ka); 11. Lua Meko (29–28 ka); 12. Liang Bua (95 ka); 13. Song Gupuh (50 ka); 14. Leang Burung (36 ka); 15. Leang Timpuseng (42–40 ka); 16. Goa Topogaro (42 ka); 17. Goa Gililana (32 ka); 18. Niah Cave (50 ka); 19. Tabon Cave (48 ka).

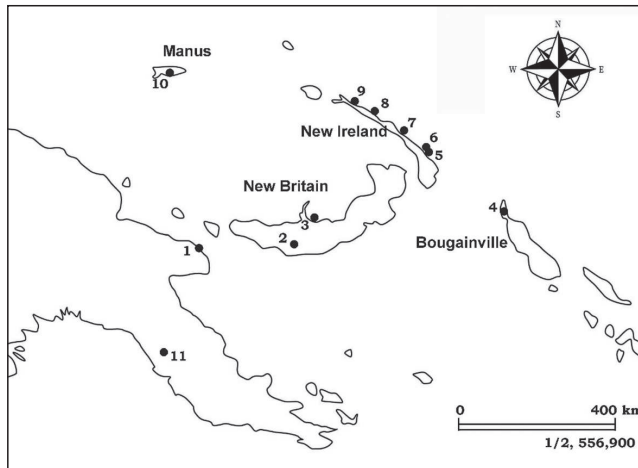


Figure 2 Pleistocene archaeological sites in eastern Near Oceania: 1. Huon (40,000 BP); 2. Yombon (35,000 BP); 3. Mapi; 4. Kilu (28,000 BP); 5. Matenbak; 6. Matenkupkum; 7. Buang Merabak; 8. Balof; 9. Panakiwuk; 10. Pamwak (13,000 BP); 11. Kosipe Mission (44,000 BP). Adapted from Kirch (2010).

Kealy, Louys, and O'Connor (2017; 2018) indicate that the northern route would have been more accessible for early modern humans, with better inter-visibility between islands.

Within the region of the proposed northern route, ongoing excavations at the Goa Topogaro Cave complex in Central Sulawesi have reached depths of over 5 m, revealing cultural sediments. Several C14/AMS dates of more than 42,000 BP have been obtained from a depth of approximately 4 m. Cultural layers with chert flakes and animal bones at 5 m depth remain undated (Ono 2021; Ono et al. 2023a, 2023b; Ono, Pawlik, and Fuentes 2024). Other early modern human traces are found on Mindoro Island in the Philippines, at the Leang Saru site in the Talaud Islands (between Mindanao and Sulawesi) (Ono, Soegondho, and Yoneda 2009; Ono et al. 2015; Tanudirjo 2001, 2005), and at Golo Cave on Gebe in the northern Maluku Islands next to New Guinea (Bellwood 2019). Uranium dating of rock art in southern Sulawesi has yielded several early dates, the oldest ranging between 44,000 and 51,000 BP (Aubert et al. 2014, 2019; Oktaviana et al. 2024).

Along the southern routes (Figure 1), many sites have been found on Sumatra and Java Islands from periods predating modern humans. At Liang Bua Cave on Flores Island, *Homo floresiensis* remains were dated between 200,000 and 60,000 BP, with evidence of modern humans merging after 50,000 BP (Sutikna et al. 2016; 2018). Currently, the oldest C14/AMS dates for modern humans in Wallacea are approximately 44,000 BP at Laili Cave and 42,000 at Jerimalai (or Asitau Kuru) Cave in Timor (Hawkins et al. 2017; O'Connor, Ono, and Clarkson 2011; Shipton

et al. 2019).

The earliest evidence for early modern human migration into Sahul comes from Optically Stimulated Luminescence (OSL) dating of sediments at the Madjedbebe site in Australia, which indicates early modern human occupation more than 60,000 BP (Clarkson et al. 2017). Although these OSL dates possibly indicate the first arrival of modern humans in Sahul, they are controversial because OSL generally yields older dates than those provided by C14/AMS (carbon-14 and Accelerator Mass Spectrometry) for the same strata and is less accurate. However, there are no C14/AMS dates beyond 50,000 BP.

In the Papuan Highlands of New Guinea, Near Oceania, the earliest Pleistocene site is Kosipe Mission, with C14 dates ranging from 49,000–44,000 BP (Summerhayes et al. 2010). Further Pleistocene evidence comes from the Huon Peninsula in northern New Guinea, with dates approximately 40,000 BP (Groube et al. 1986). Late Pleistocene sites have also been reported in the Admiralty Islands, New Britain, New Ireland, and Buka in the northern Solomon Islands (Kirch 2010: 135–136; Ono 2018; Ono et al. 2023b; Summerhayes 2009). The abundance of early dates from northern and eastern New Guinea (Figure 2) suggest a first colonisation *via* the northern route through Wallacea.

If a coastal route were taken eastward along the northern coast of New Guinea, rainforests and mountains would have been accessible by entering lagoons and ascending rivers, providing many attractive locations for landfall, and a seafaring strategy that could even be followed with rafts. From Vogelkop at the extreme western end of New Guinea to the Huon Peninsula, there is approximately 1,800–2,000 km of coastline where landfalls were guaranteed. Many islands scattered offshore, including high volcanoes and low-lying reefs, are reachable during such voyages. Although the shortest distance between New Guinea and New Britain Island is just 91 km, crossing the Vitiaz Strait may have been seasonal. Hydrologically, during the austral summer (December to February), west-to-east winds and currents from the monsoon season would have favoured seafaring from New Guinea to New Britain across the Strait.

The northern route from Sulawesi to the Maluku Islands into the region of New Guinea and the southern route leading to northern Australia have long been the two main routes suggested for early human migration from Wallacea into Sahul or Near Oceania (Birdsell 1977; Sondaar 1989; see Figure 1). Some GIS studies suggest that the northern route may have been easier path for early modern humans to reach Sahul (Kealy, Louys, and O'Connor 2017; 2018), but many islands in Wallacea would have been visible along both possible routes. In Wallacea, the estimated distance between each island ranged from 10 to 50 km. The islands along the southern route appeared close spaced as far as Timor, at the eastern end of the southern route. Some islands along the northern route are more isolated. For example, the Talaud Islands are located approximately 100 km from both Mindanao and

Sulawesi and more than 120 km from the northern Maluku Islands (Figure 1). Thus, if early modern humans reached Sulawesi or Maluku from the Philippines *via* the Talaud Islands, they would have required seafaring skills to cross over 100 km. Currently, the oldest archaeological trace of humans on the Talaud Islands dates to around 35,000 BP (Ono, Soegondho, and Yoneda 2009; Ono et al. 2015; Tanudirjo 2005), suggesting that the Mindanao-Talaud-Sulawesi/Maluku route was not used during the earliest modern human dispersal through Wallacea.

Overall, current archaeological evidence indicates that early modern humans could have used both the northern and southern routes from Wallacea into Near Oceania. It should also be noted that the northern and western coasts of Sahul were visible from several high altitude Wallacean Islands, including Alor and Timor, during the late Pleistocene (Kealy, Louys, and O'Connor 2017, 2018; Norman et al. 2018). This supports the possibility that early sea crossings by modern humans were intentional (Bird et al. 2019).

Hypothetically, the simplest forms of boats to construct would have been rafts built from bamboo stems or large floating logs and used as rafts for contingent (under the force of circumstances) or freely intentional voyages. Bamboo has sympodial stems containing natural air pockets, making it ideal for constructing lightweight, durable rafts capable of carrying large loads (Anderson 2010; Bednarik 1998; Bednarik, Hobman, and Rogers 1999; Kaifu 2020; Oda and Ono 2022). An experimental study by Bednarik (1998) and Bednarik, Hobman, and Rogers (1999) used a bamboo raft for navigation to the estimated position of the past Sahul coast (in northern Australia) and confirmed that such a craft could reach the coast within 5–6 days.

By approximately 35,000 BP, archaeological traces of modern humans appeared on remote Wallacean Islands such as the Talaud Islands, over 100 km from their nearest neighbours (Ono, Soegondho, and Yoneda 2009). In Near Oceania, human traces also appeared early on remote islands around Sahul. For example, lithics and other artefacts from Manus Island, approximately 230 km from the New Guinea coast, date to around 20,000 BP (Kennedy 2002). However, traces on such remote islands remain sparse and intermittent in the Pleistocene record, making it unclear whether the necessary sea crossings were intentional or the result of accidental drift and temporary settlement.

3 Late Pleistocene to Middle Holocene Seafaring and Maritime Networks

3.1 Volcanism and Seafaring

Maritime adaptation changed during the late Pleistocene and early Holocene. Early voyages from Sahul to the Bismarck Archipelago and further east to the Solomon Islands occurred after 40,000–30,000 BP (Allen, Gosden, and White 1989; Leavesley and Chappell 2004; Specht 2005a, 2005b). The inter-island dis-

tances extended to a range of 100–200 km, and the voyagers had to navigate the pelagic ocean (open sea far from land), where the islands ahead could not be sighted.

However, it should be noted that there are many volcanoes (high islands) in the Bismarck Archipelago. The numbers of volcanoes in the different island groups is as follows: Admiralty (2); New Ireland (2); New Britain (18); the offshore islands of northern New Guinea (12); and Bougainville in the Solomon Islands (6).

Among these, those with high elevations of more than 1,000 m or 2,000 m above sea level include: Langila (1,330 m), Bamus (2,248 m), Bola (1,155 m), Hargy (1,148 m), Oto group (1,277 m), and Ulawun (2,334 m) (all on New Britain Island); Karkar (1,839 m), Manam (1,807 m), Long Island (1,280 m), and Umboi (1,584 m) (among the offshore islands of New Guinea); and Bagana (1,750 m), Balbi (2,725 m), Billy Mitchel (1,544 m), Loloru (1,887 m), Takuan group (2,210 m), and Tore (2,200 m) (all on Bougainville Island). The eruption histories vary considerably among these volcanoes: some last erupted in the Pleistocene or early Holocene, while others in the early to modern historical period. For instance, Long Island, off the coast of northern New Guinea, is 1,280 m high, has a large caldera lake (100 m × 120 m), and erupted at least 9 times between 1933 and 1993. Its eruption in 1660 had a strength comparable to that of the 1883 Krakatau eruption, and ash from the 1660 eruption was found in the highlands of Papua New Guinea. On the Admiralty Islands, Lou Island erupted in 240 BC and 350 AD, while the nearby St. Andrew Strait (270 m) erupted in 1953–1957, and Baluan Island (254 m) erupted during the Holocene.

It is not always clear whether volcanoes with recent eruption records also erupted between the late Pleistocene and early Holocene. Although not easily verified, it is likely that volcanoes with ash clouds reaching several kilometres above the sea or producing large explosive sounds provided effective signs of distant land during past seafaring activities, even if the source volcanoes had relatively low elevation. Drifting pumice could have been another sign of distant volcanic islands for navigators.

Obsidian was used to determine dating in chronological sequences. Various scientific techniques were applied to obsidian samples, including hydration analyses, X-ray fluorescence spectrometry (XRF), neutron activation analysis (NAA).

3.2 Obsidian Sources and Seafaring Networks

The oldest archaeological evidence for intentional human seafaring and maritime transportation between islands was provided by excavated obsidian (volcanic glass). Excavated obsidian can be traced to its source location if its chemical components match that of a known geological obsidian deposit. From the accumulated results of archaeological excavations and studies of geological deposits, we can trace the geographical distribution of each obsidian type and estimate transportation

routes and distances over time. Obsidian has been found in many late Pleistocene and Holocene archaeological sites in maritime Asia and Oceania and has been studied intensively.

Early obsidian trading routes have been reported from the Bismarck Archipelago in Near Oceania and from Timor and Kisar in Wallacea (O'Connor, Shipton, and Kealy 2024; Pengilley et al. 2019; Reepmeyer, O'Connor, and Brockwell 2011; Reepmeyer et al. 2019). The distribution of obsidian has varied considerably over time. In Near Oceania, Talasea obsidian from New Britain was apparently transported to the Buang Merabak site in central New Ireland at around 20,000 BP, albeit in very limited amounts (Leavesley and Allen 1998; Leavesley and Chappell 2004). Obsidian from other sources was also transported to the Matenbak site in southern New Ireland around 20,000–18,000 BP (late Pleistocene) and during the Holocene (Summerhayes and Allen 1993). Among 4 different sources identified in the Matenbak assemblage, the majority of pieces came from the Mopir source ($n = 37$, 75.5%), followed by Kutau Bao ($n = 9$, 18.4%), Hamilton ($n = 2$, 4.1%), and Gulu ($n = 1$, 2%). The late Pleistocene level yielded at least 47 obsidian pieces, and over 30% of which were from Mopir (Summerhayes and Allen 1993: 146).

The distance from the Talasea and Mopir obsidian sources in New Britain to New Ireland is approximately 300 km if people followed a direct sea route from coast to coast (Figure 3, Route A). The shortest distance between the 2 islands is approximately 30 km. If obsidian was transported overland or in stages along the northern coast (Figure 3, Route B) or the southern coast (Figure 3, Route C) of New Britain, then the maximum sea-crossing distance required would not have exceeded 30 km. It is unclear which routes were used during the late Pleistocene, although coastal routes such as Routes B and C are considered the most likely.

Notably, the transport of New Britain obsidian began around the time of the Last Glacial Maximum (LGM), the coldest period of the last ice age, from 21,000 to 16,000 BP. Approximately 21,000 years ago, human traces were found at the Pamwak site on Manus Island (Figure 3), approximately 230 km from the northern coast of New Guinea. As discussed later, the Pamwak site also yielded late Pleistocene evidence of marsupials being transported from the New Guinea mainland. The required transport distance far exceeded the 130 km necessary for sea crossings to Buka Island in the Solomons, suggesting that human seafaring capabilities had already significantly advanced by the late Pleistocene. Lou Island obsidian was also imported to the Pamwak site on the Manus mainland during the terminal Pleistocene (13,000 BP) (Figure 3). During the middle Holocene, a new style of stemmed obsidian tools appeared in New Britain and was transported into the Sepik-Ramu Rivers in the eastern Highlands of New Guinea (Specht 2005a; 2005b).

In Wallacea, evidence of obsidian trade during the late Pleistocene to early Holocene was recently found among the islands of Timor, Alor, and Kisar along the

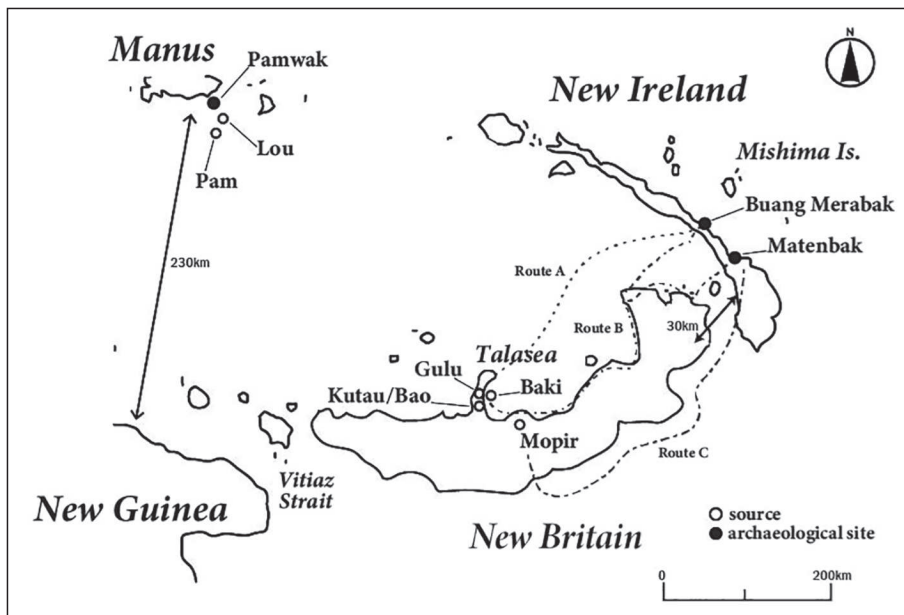


Figure 3 Major obsidian sources in New Britain and possible transport routes (based on Leavesley and Allen 1998; Summerhayes and Allen 1993)

southern migration route into Sahul. Obsidian lithics from the late Pleistocene and early Holocene were excavated at the Tron Bon Lei site of Alor Island; the Hatu Sour, Laili, Bui Ceri Uato, Matja Kuru 1 and 2, Jerimakai (now known as Asitau Kuru), and Lene Hara sites of Timor Island; and the Here Sorot Entapa (HSE) site of Kisar Island (Figure 4) (O'Connor et al. 2019; O'Connor, Shipton, and Kealy 2024; Reepmeyer, O'Connor, and Brockwell 2011; Reepmeyer et al. 2016, 2019; Shipton et al. 2019). The sources of these obsidian finds are not yet known but may be located somewhere between these islands (O'Connor, Shipton, and Kealy 2024). As shown in Figure 4, the reconstructed distances to Kisar Island from neighbouring islands during the late Pleistocene (including LGM) are approximately 36–46 km from the Wetar, Roma, and Leti Islands, and approximately 25 km from the north-eastern end of Timor Island (O'Connor, Shipton, and Kealy 2024; Reepmeyer et al. 2019).

During the late Pleistocene, shell fishhooks and ground *Tridacna* shell adzes also appeared on the Wallacean Islands (O'Connor, Shipton, and Kealy 2024). One shell hook, the earliest known J-shaped jabbing type, was excavated from Jerimalai (now known as Asitau Kuru) and dated to approximately 21,000 BP (O'Connor, Ono, and Clarkson 2011). The site also yielded several fishhooks dating back to the early Holocene, and similar jabbing hooks were excavated from Lene Hara (see Figure 4, O'Connor and Veth 2005). The largest and most diverse assemblage of

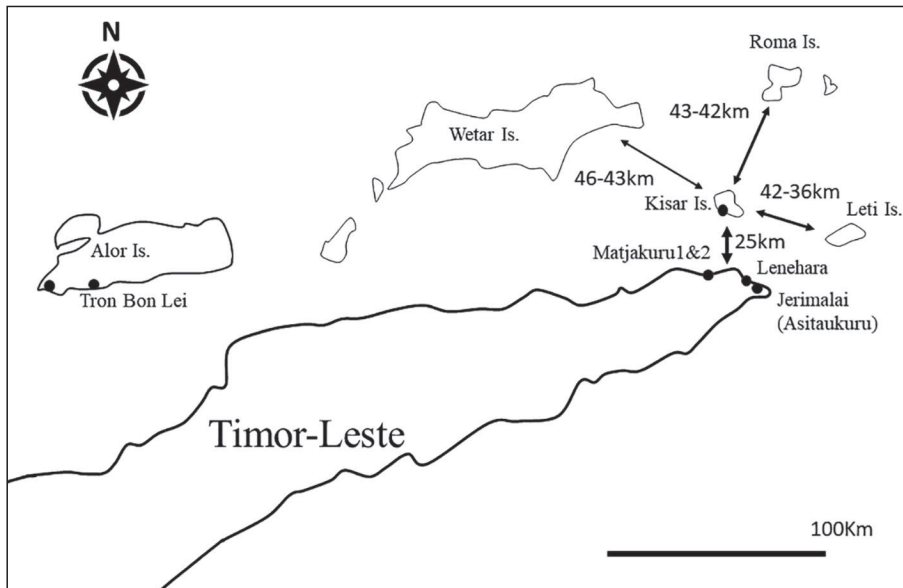


Figure 4 Sites with obsidian lithics on the Wallacean Islands of Alor, Timor, and Kisar, and proximity of Kisar to neighbouring islands. Adapted from O'Connor et al. (2019) and O'Connor, Shipton, and Kealy (2024).

hooks was excavated from Makpan on Alor Island: 214 hooks, including J-shaped jabbing hooks and rotating hooks, a possible lure, possible net sinkers, and hook blanks (Langley et al. 2023). Tron Bon Lei on Alor also yielded several jabbing hooks, including one associated with female human remains dated to approximately 10,000 BP (O'Connor et al. 2017). Fishhooks were also found at Here Sorot Entapa on Kisar Island, dated to approximately 15,500 BP (O'Connor et al. 2019). These findings suggest that maritime skills and knowledge were widely spread, together with obsidian and other resources, through seafaring and maritime networks during the LGM and early Holocene in Wallacea and Near Oceania.

3.3 Translocation of Marsupials and Round-Trip Voyaging

There is evidence of the prehistoric translocation of living marsupials in both Near Oceania and Wallacea during the early Holocene. Translocation led to the establishment of new populations on islands that the animals could not have reached on their own. At the Buang Merabak and Matenbak sites in New Ireland, a significant number of grey cuscus (*Phalanger orientalis*) individuals appeared archaeologically around 20,000 BP, slightly earlier than the appearance of obsidian. At the Matangkupkum rock shelter next to Matenbak, the grey cuscus also appeared approximately 16,000 years ago (Figure 5).

These animals are thought to have been transported from the neighbouring

New Britain Island, where they did not naturally inhabit before that time, implying an even earlier introduction from mainland New Guinea to New Britain (Allen and Gosden 1996; Flannery and White 1991; Leavesley 2005; Leavesley and Allen 1998). Obsidians from Talasea and Mopir in New Britain were also found at these sites (as noted above). By approximately 13,000 BP, towards the end of the Pleistocene, cuscus, bandicoot, and *Canarium* nut appeared at the Pamwak site on Manus Island (Figure 5), approximately 230 km from the mainland New Guinea coast (Kennedy 2002; Summerhayes 2003). These marsupials and trees are naturally widespread on the New Guinea mainland and required human transport by seacraft to reach Manus.

In the early Holocene, between 8,400 and 7,000 BP, the New Guinean bush wallaby (*Thylogale brunii*) was carried to New Ireland. During the middle to upper Holocene, there were secondary introductions of *P. orientalis* to Nissan Island and the Solomon Islands. In the late Holocene, the New Guinean spotted cuscus (*Spilocuscus maculatus*) was carried to the St. Matthias (Mussau) Islands (Flannery 1995; Heinsohn 2005; Kirch 1997; Summerhayes 2007). It is likely that marsupials were continuously translocated from New Guinea to neighbouring large islands and then further to smaller satellite islands scattered to the northeast and east in Near Oceania. By approximately 10,000 BP, *Canarium* nuts also appeared at the Kilu site on Buka Island in the Solomons group (Wickler 2001).

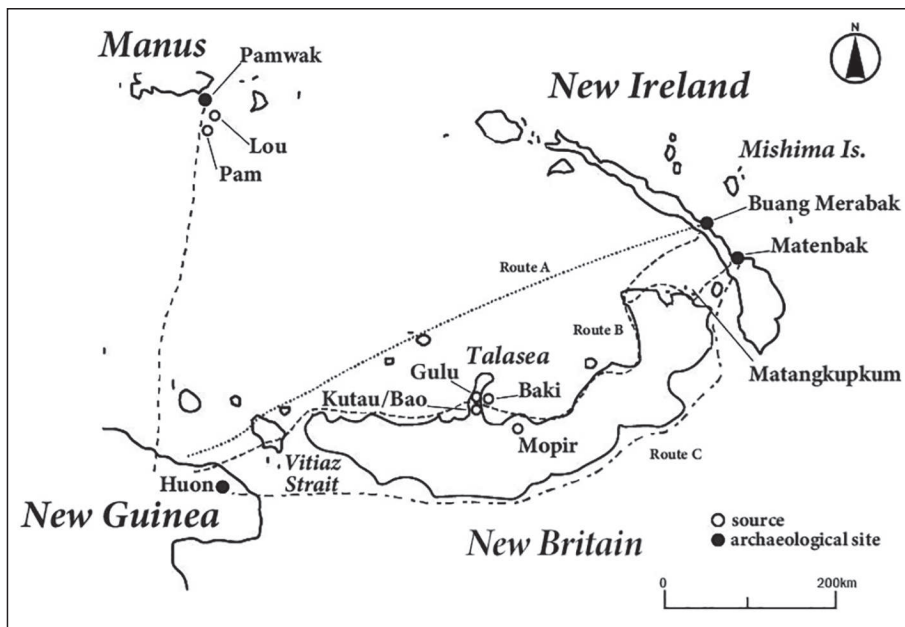


Figure 5 Possible routes of marsupial translocation between New Guinea, Manus, New Britain, and New Ireland. Adapted from Leavesley and Allen (1998); Summerhayes and Allen (1993).

In the northern Moluccas of Wallacea, excavations at Golo Cave and Wetef Rock Shelter in Gebe, and at Gua Siti Nafisah in Halmahera, confirmed that forest wallabies (*Dorcopsis* spp.) existed on these islands during the early Holocene. They were also possibly intentionally translocated by humans from New Guinea (Bellwood 2019; Flannery et al. 1998). A few bandicoot bones were also found in Holocene layers of Gua Siti Nafisah. *Dorcopsis* disappeared from Gebe after the middle Holocene and is now considered extinct there. The fossilised teeth were identified as either brown dorcopsis (*Dorcopsis muelle*) or white-striped dorcopsis (*D. hageni*). The natural distribution of brown dorcopsis extends from the Vogelkop Peninsula of western New Guinea to offshore islands such as Misool, Yapen, Salawati, and possibly Batauta and Waigeo. It is locally known as *djief* and is still hunted today, as it was during the late Pleistocene (Pasveer 2004: 204). Peter Bellwood (pers. com. Feb. 2022) suggests that Pleistocene humans did not always migrate eastward; back migration through voyaging was an important part of social exchange and trading (Hull et al. 2019). As a late Holocene example, human remains from the Morotai and Kayoa Islands in northern Moluccas have been dated to around 2,000 BP and include individuals with mitochondrial DNA (mtDNA) and Y-chromosome haplogroups associated with both Austronesian and Papuan ancestries, indicating that admixture began around 2,000 years ago (Oliveira et al. 2022) and that indigenous Papuan and Melanesian groups also migrated westward into Wallacea. Further west in Wallacea, archaeological evidence of marsupial translocation has been reported in Timor-Leste, where the above-mentioned *Phalanger orientalis* was unearthed.

These instances suggest that marsupials retained high exchange values as part of late Pleistocene and early Holocene seafaring, prior to the introduction of pigs, jungle fowl, and dogs. Marsupials were a valuable source of food; therefore, hunting and food exchange continued from the Pleistocene into the Holocene. Marsupial diets are diverse (Freeman 2018), but the above-mentioned species are mainly herbivorous, depending on the leaves of grasses and trees. In the case of *Phalanger orientalis*, the diet includes leaves and fruits (Leavesley 2005). Akimichi (1998: 163–182) proposed that the intestines of herbivorous marsupials may be an important source of vitamins and nutrients, after observing the Seltaman people in Papua New Guinea (approximately 1,200 m above sea level, in the Highland Fringe of Western Province). Raw enteral contents from the very long intestine of a hunted marsupial (*nuuk*) was served as a paste on cooked sweet potato (Figure 6). The translocation of marsupials in Near Oceania may have been based on food preferences for marsupial internal organs, which have persisted since the Pleistocene.

Anthropogenic translocation of animals is one of the most remarkable prehistoric seafaring activities recorded in Near Oceania. It was perhaps largely carried out by Papuan speakers before the later expansion and intrusion of Austronesian



Figure 6 Hunted marsupial (left), long intestine (middle), and enteral contents eaten as paste on cooked sweet potato (right). Seltaman people, Papua New Guinea (Photo: Akimichi, 1987).

culture, which altered or replaced Papuan food habits and possibly an earlier range of hunting and fishing technologies (Heinsohn 2003, 2010; Ono 2021; Specht 2005b).

4 Austronesian Migration and Middle to Late Holocene Seafaring

4.1 Austronesian Colonisation in Near Oceania

Around the middle Holocene, Austronesian-speaking farmers began to spread along the southern continental coast of East Asia and then into Taiwan, ISEA, and Oceania. The first wave of dispersal involved population expansion into Taiwan before 4,000 BP, with Austronesian migration into ISEA, including Wallacea, from 4,000 to 3,000 BP (Bellwood 2005; Donohue and Denham 2010; Hung et al. 2011; Ono 2016, 2018). Austronesian culture is characterised by language (Bellwood 1979; 2005), and notably by certain elements in pottery design and the use of outrigger sailing canoes.

Among the Austronesian groups, the earliest long voyage (or voyages) reached the Mariana Islands approximately 3,500 years ago, possibly from somewhere in the Philippines. The direct distance from the Philippine Archipelago to the Mariana Islands is approximately 2,000 km, which is far greater than the distances achieved by late Pleistocene and early Holocene human seafaring noted above in ISEA and Oceania (and possibly other regions in the world).

Linguistic studies and the earliest pottery found in Marianas clearly indicate that the first immigrants were Austronesian. The inhabitants of the Mariana Islands are the Chamoro people. Their languages belong to the West Malayo–Polynesian group of Austronesian languages, and their ancestors are presumed to have been

Austronesian. Early pottery in the Mariana Islands, known as ‘Mariana red pottery’, is red-slipped with some vessels displaying dentate-stamp and circle-stamp decorations (Carson et al. 2013). Some of these decorations were filled with white lime powder. These are all known traits of an early Austronesian pottery type that possibly developed in the northern Philippines somewhere between 3,800 and 3,400 years ago (Hung et al. 2011). The first Mariana migrants are thus thought to have been Austronesian groups from the Philippines, although north to south navigation from the northern Philippines into the Marianas might not have been easy, according to simulation studies based on reconstructions of past wind movements and sea currents.

The simulations indicate that south-to-north navigation may have been less difficult, and that the southern Philippines (e.g., Mindanao) or northern Indonesia (e.g., Sulawesi and northern Maluku) are strong candidate areas for the origins of the Mariana immigrants. However, no dentate- or circle-stamp pottery has been found in Indonesia prior to 3,000 BP. Some sites revealed this style of pottery in northern (Aziz et al. 2018) and central Sulawesi (Ono 2018; Ono et al. 2019, 2023b) between 3,000 and 2,000 BP. In addition, no domesticated animals such as pigs, dogs, or Asian rats were found on the Mariana Islands during the first 1,000 years. The absence of these domesticated animals suggests that the early voyages were long (and thus difficult) to transport live animals to the Marianas. All current evidence, both direct and indirect, points to the likelihood of early migration from the north or somewhere in the Philippines.

Another early Austronesian pottery tradition with dentate-stamped decorations is Lapita pottery. This emerged around 3,300 BP in the Mussau Islands, the northernmost in the Bismarck group, slightly later than in the Marianas (Kirch 1997; 2000), and quickly expanded eastward over the following 500 years. Lapita spread to eastern Melanesia (Solomon Islands, New Caledonia, Vanuatu, and Fiji), and western Polynesia (Samoa) between 3,300 and 2,900 BP (Bedford 2006; Specht and Gosden 1997; Summerhayes 2001). All islands east of the central Solomon group have no human traces before Lapita, so the early Austronesian migrants were likely the first to reach these islands, collectively referred to as ‘Remote Oceania’ (Green 1991; Pawley and Green 1973).

Similar dentate-stamped pottery traditions have been reported in the Philippines (northern Luzon), Micronesia (Mariana Islands), and Indonesia (Sulawesi). Thus, the pottery trail and possible origins of Lapita pottery can be traced to any of these islands. Based on these possible dates, northern Philippines and the Marianas are currently more likely. In addition, if long-distance north-to-south seafaring was possible from northern Philippines to the Marianas, then travel from the Marianas to the Bismarck Islands in Melanesia was also likely (Hull et al. 2019). However, the precise dates of migration into northern Philippines and Mariana, as well as the relationships among pottery types and decorations in these

regions and the Lapita tradition, remain debated. More time and archaeological evidence are needed to determine the exact origins of ‘Lapita people’ and their pottery tradition.

The eastward movement and colonisation of Austronesian people with Lapita pottery likely involved complex interactions with pre-existing populations in Near Oceania. Sheppard (2011) discussed the technological evolution of seacrafts that enabled Austronesian colonisation beyond the Near/Remote Oceania boundary. Unfortunately, the exact types of seacrafts used are not yet known, although their voyaging range may have extended up to 800 km, based on the distances covered to settle remote islands in Melanesia and west Polynesia. As proto-Oceanic terms for ‘outrigger’ and ‘canoe’ can be reconstructed by linguistic study (Pawley and Ross 1995), outrigger canoes were likely used for Austronesian maritime migration. Double-outrigger canoes are only known in Near Oceania, whereas single-outrigger canoes are widespread in Near and Remote Oceania. The latter can be used for long-distance voyages and seafaring in pelagic oceans. Simple dugout canoes are also common in Near and Remote Oceania but are better suited to near-shore use.

Ethnographic records from Near Oceania show considerable variation in the design of outrigger canoes and canoes without outriggers, such as the *mon*, *ora*, *lisi*, and *binabina* war canoes of the Solomon Islands (Figure 7) and the *lakatoi* (Figure 8), a large multi-hulled sailing vessel with claw-shaped sails (Haddon and Hornell 1936–1938). No archaeological evidence exists for these canoe types, and their origins and periods of first use in Near Oceania remain unknown. Nevertheless, the abundant archaeological evidence of obsidian transportation and trade, especially after the early Holocene, suggests that prototype designs may have appeared by at least the middle to late Holocene following Austronesian migration into Near Oceania.



Figure 7 Model of a *mon* war canoe from the Solomon Islands (National Museum of Ethnology, H0138277, collected by G. Brown in the late 19th Century)



Figure 8 *Lakatoi* in the Papuan Gulf (Lindt 1887, Plate VII)

4.2 Obsidian Networks and Seafaring by Austronesian Migrants

In Near Oceania, obsidian continued to be actively transported by Austronesian people after the middle Holocene, using the same sources that had been used continuously since the late Pleistocene and early Holocene. The major sources in Near Oceania were New Britain, at Talasea (Kutao/Bau), and Mopir at the Willaumez Peninsula, some 60 km southeast of Talasea (Fullagar et al. 1991). Additionally, obsidian from the Lou and Admiralty Islands was also transported to northern Melanesia in Remote Oceania, and even to Island Southeast Asia to the west.

The distribution patterns of obsidian types and the composition of sources represented at each site changed drastically during the Lapita period, after the Austronesian migration into Near Oceania (Figure 9). In the early Lapita phase, Talasea obsidian dominated all Bismarck Archipelago assemblages (3,300–3,000 BP). Talasea obsidian was traded extensively to New Ireland, Mussau, the Duke of York Islands, Nissan, and mainland New Guinea. During the early Lapita phase, Admiralties (Lou) obsidian was used only on Manus Island, which is located close to Lou Island (White and Harris 1997). Later, in the middle Lapita phase (3,000–2,800 BP), Admiralty obsidian spread through the eastern Bismarck Archipelago of Mussau, New Ireland, the tip of east New Britain, and Buka in the northern Solomon Islands. Among over 300 obsidian samples excavated from Buka, nearly 90% had an Admiralty origin (Wickler 2001).

Obsidian movement during the Lapita period was prominent not only in Near Oceania but also in Remote Oceania to the east (eastern Solomons), north (eastern Micronesia), and ISEA to the west. In Remote Oceania, obsidian flakes excavated at the Nenumbo site (SE-RF-2) on Reef Island, eastern Solomon Islands (3,000–2,700 BP), were from Talasea, approximately 2,000 km distant (Green 1976; Kirch 1997; Sheppard and Green 1991; Specht 1981).

Beyond the Nenumbo site in the Reef Islands, obsidian sources naturally occur on Gaua Island in Vanuatu, Vanua Lava Island in the Banks group, Upolu in American Samoa (Tutuia), and northern Tonga (Tafahi) in western Polynesia. In Vanuatu, obsidian from outside the area was first found at the Makué site on Aore Island, south of Luganville, in Espiritu Santo. The major sources were the Willaumez Peninsula, west New Britain (3,100–3,000 BP), with some obsidian coming from the Banks and Admiralty Islands (Galipaud et al. 2014). At the Teouma site on southern Efate Island in Vanuatu, obsidian sources were predominantly Kutao/Bau and the Willaumez Peninsula in west New Britain. In Fiji, a few obsidian flakes were found at 2 sites, Naigani and Bourewa, originating from Kutao/Bau in the Bismarck Archipelago. Obsidian from Tafahi in Tonga was detected in Lakeba, Fiji.

Obsidian from sources in Near Oceania was also traded westward into ISEA. Obsidian from Talasea and Lou was found at Bukit Tengkorak, Sabah, and dated to 3,300–2,800 BP (Bellwood and Koon 1989; Chia 2003; Ono 2003, 2004; see Figure 9). Obsidian from Bukit Tengkorak has multiple origins (Chia 2003; 2008):

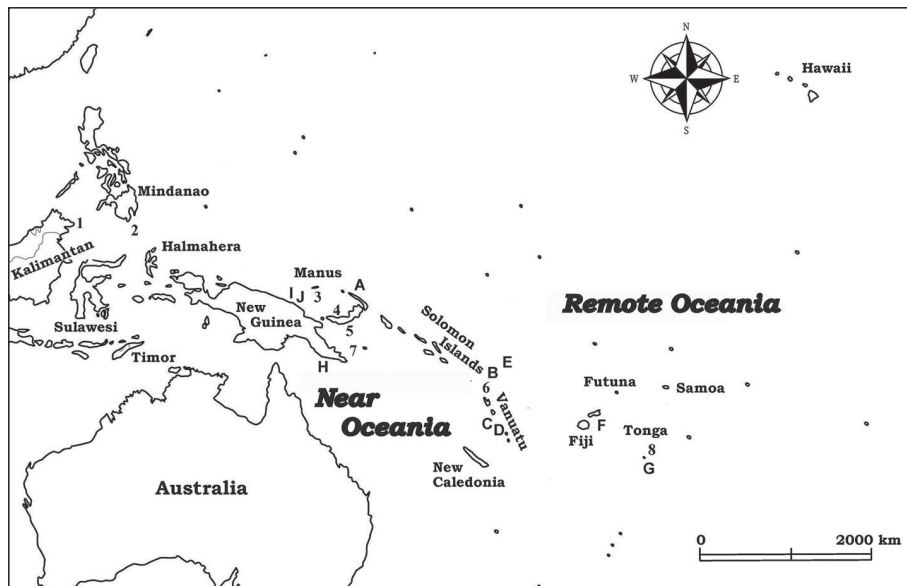


Figure 9 Obsidian sources and excavated sites in Island Southeast Asia, Near Oceania, and Remote Oceania. Sources: 1. Bukit Tengkorak; 2. Talaud Island; 3. Lou Island; 4. Talasea (Kutau/Bai; Willaumez Peninsula); 5. Mopir; 6. Banks Islands (Vanua Lava, Gaua); 7. Fergusson Islands (east, west); 8. Tafahi Island (Tonga). Excavated sites: A. New Ireland; B. Nenumbo (Reef Island); C. Makué (Aloe Island); D. Teouma (Efate Island); E. Tikopia Island; F. Lakeba Island (east Fiji); G. Tongatapu Island (Lahapa, Talasiu); H. Oposisi (Yule Island); I. Ali Island, Seleu Island (West Sepik); J. Tarawai Island (East Sepik).

Talasea ($n = 17$), Lou in the Admiralty Islands ($n = 1$), and unknown ($n = 12$). The same obsidian type with an unknown source was also found at a Neolithic site on the Talaud Islands between Mindanao and Sulawesi. The distances from Bukit Tengkorak to Talasea and Lou are 3,800 km and 3,300 km, respectively (Tykot and Chia 1997).

The results summarised in Table 1 are consistent with linguistic data and other material cultures of the Admiralty Islands and the islands in eastern Micronesia. Obsidian was likely transported first by early Melanesian migrants and later by the Caroline islanders as part of maritime trading between the regions (Nagaoka et al. 2022).

On the Sepik coast, 1,602 samples were examined using PXRF. Obsidian was mostly from the Admiralty Islands and west New Britain. The age of the pieces is unknown, but the exclusive presence of Aiser and later styles of pottery on Seleo Island suggests that Fergusson obsidian (from eastern New Guinea) probably did not reach the north coast of New Guinea before 1,000 BP (Golitzko, Schauer, and Terrell 2012).

Overall, it is clear that north Melanesian obsidian was extensively transported across Melanesia and eastern Micronesia throughout the prehistoric period. The distribution of obsidian changed significantly over time. In particular, from the late Pleistocene to the early Lapita phases, the obsidian sources of west New Britain

Table 1 Details of obsidian movements from the Admiralty and Fergusson Island groups in northern New Guinea

Source	Direction	Destination	Dates	References
Lou Island (Admiralty group)	Eastward	Santa Cruz group, including Tikopia	middle and late Lapita phases	Torrence and Swadling 2008
	Westward	New Guinea mainland	around 1,600 BP	
		Biak, the westernmost of New Guinea	around 1,600 BP	
Admiralty Islands	Northward	Eastern Micronesia (Pohnpei Island and Kapingamarangi Atoll)	2,000 to 1,000 BP	Nagaoka et al. 2022
Admiralty Islands (high probability)	Northward	Lenger, a small island of inner reef, Pohnpei	around 2,000 BP/ first half of the second millennium AD (oldest obsidian flakes)	Nagaoka 2008; Ono et al. 2021
Admiralty Islands & West New Britain	Westward	Northern New Guinea, Sepik coast	after 1,000 BP?	Golitzko, Schauer, and Terrell 2012
Fergusson Islands	Westward	Papuan Gulf coast: Austronesian communities in Papuan Tip: Oposisi (Yule Island), Ape Venue, Mailu	around 1,600–2,000 BP	Irwin and Holdaway 1996
West Fergusson Islands: Ali	Westward	Northern New Guinea, Sepik coast	after 1,000 BP?	Golitzko, Schauer, and Terrell 2012

predominated, and their distribution reached Remote Oceania to the east. After the middle Lapita phase, Admiralty Island obsidian became a major trade item.

This evidence for the expansion of trading networks is related to the discussion of the obsidian found in Tikopia, where a ‘Polynesian Outlier’ society exists today. Kirch and Swift (2017) proposed 3 stages of obsidian movement into Tikopia: (1) an initial dominant connection with west New Britain, coupled with the Austronesian seafaring colonisation event during the early Lapita phase; (2) an increase in Admiralty obsidian (replacing west New Britain sources) during the late Lapita phase, though long-distance voyages became much less frequent except for possible migration or voyaging to eastern Micronesia; and (3) a new linkage with the Tongan source to the east (from around 765 BP), which then suddenly stopped (McCoy et al. 2020).

The Polynesian Outlier Islands were originally settled from west Polynesia and initially had intimate contact with Tonga. The change in inter-island contact between Tonga and Tikopia may be associated with the general trend in west Polynesian prehistory. During the late Lapita phase in Tonga, around 2,700–2,600 BP, Tafahi obsidian from nearby Niuatoputapu in the north was traded south to Lapaha and Talasia in Tongatapu, as well as Lakeba in eastern Fiji (see Figure 9). Later, during the rise of Polynesian chiefdoms (1,000–400 BP), Tafahi obsidian was taken to Samoa, 300 km north, which is much closer than southern Tongatapu or Lakeba in Fiji (600 km) (Reepmeyer, Clark, and Sheppard 2012). This change may be reflected in the sudden stop in the movement of obsidian towards Tikopia (noted above).

4.3 ‘Ethno-Networks’ in Near Oceania during the Late Holocene

Trading and exchange networks based on seafaring have been documented in many ethnographic reports from Near Oceania and are consistent with archaeological records of the movement of materials. Several inter-island exchange networks existed in the Vitiaz Strait, where local commodities were exchanged in large quantities among Austronesian and Papuan groups—networks that can be traced back to the prehistoric Lapita phase (Harding 1967). In New Ireland and its outer islands, such as Tabar, Lihir, Tanga, and Feni, and further east to Nissan Atoll and Buka Island, inter-island trade networks (Figure 10) involved canoes, dyes, earthenware, pigs, armlets, and shell ornaments (*kemetas*) as major trade goods between neighbouring islands (Terrell 1986). *Kemetas* are small top shells (*Chrysostoma paradoxum*). Lihir Island is a major production area, and the Lihir people processed the shells for shell beads and traded them using canoes.

Talasea obsidian from the Willaumez Peninsula in New Britain (Figure 3) was also traded by several ethnic groups eastward into New Ireland and westward into the Vitiaz Strait (Goto 2003; 2004; 2023). Obsidian was distributed across an area of approximately 100 km², primarily concentrated around Talasea on the central

and eastern coasts of the Willaumez Peninsula. The extraction sites were not monopolised by any particular group. Quarrying was primarily performed by men, and while specific quarries were associated with particular lineages, individuals could mine relatively freely within the quarries of their own groups. Obsidian was traded as raw stone block, and people produced blades for use as disposable tools (Parkinson 1999: 103). The sharpness of the blade edge was more important than its form; thus, edge retouching was rare (Specht 1981: 346–347).

Communities on the Willaumez Peninsula engaged in exchanges of goods with related tribes within the Peninsula within distances of approximately 20–30 km. They belonged to similar linguistic groups and traded items among themselves. For

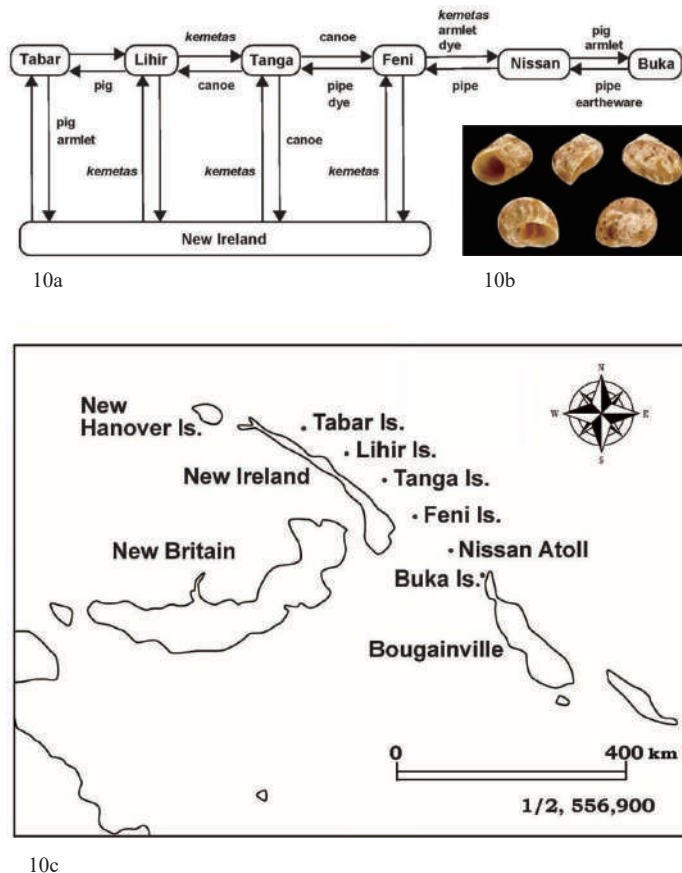


Figure 10 a: Exchange networks in New Ireland and its outer islands. Lihir Island is the major centre of *kemetas* production (based on Terrell 1986, revised by the authors); b: *Nassarius* shells. Download from https://en.wikipedia.org/wiki/Chrysostoma_paradoxum#/media/File:Chrysostoma_paradoxum_01.JPG (accessed on 6 June 2025); c: Location of each island mentioned in the texts and in Figure 10a.

example, obsidian was exchanged for ceremonial cosmetics such as red and white pigments (Goto 2023). These communities were connected through marriage ties, and it was a common practice to bring obsidian blocks as gifts when visiting neighbouring settlements. This practice is better described as ‘exchange’ rather than ‘trade’ (Goto 2023: 230). In contrast, the trade of Talasea obsidian across the Vitiaz Strait was characterised by its seasonal nature, larger scale, and the involvement of specialised intermediaries, marking a significant distinction (Specht 1981: 349). Obsidian, along with other goods, was transported across the Vitiaz Strait to the mainland New Guinea coast and then further inland.

The Tolai people, located on the eastern tip of New Britain, obtained bivalve shells and shell beads from offshore islands and New Ireland. These items entered the trade networks along the northern coast and moved westward. They were imported into the Nakanai tribe, a centre of trade on the northeastern coast. In exchange, the Nakanai provided the Tolai with *Nassarius* shells (small sea snails), which the latter used as a bride price (Counts and Counts 1970: 98). Although the shellfish had no edible value, their shells became essential materials for *tambu* shell money used as a bride price when transported eastward to the Tolai (Goto 2003; 2023). Additionally, the Nakanai supplied obsidian, red pigment, and various goods (e.g., wooden bowls and pottery) acquired from western groups to the Tolai people. In return, they traded shell beads and mother-of-pearl obtained from eastern Tolai with the Bakovi group on the Willaumez Peninsula, acquiring obsidian, red dye, and tortoise shell bracelets (Chowning 1978). In summary, shell beads moved westward along the northern coast of New Britain, whereas pottery and wooden bowls entering the Vitiaz Strait moved eastward. East of the Willaumez Peninsula, obsidian and shell beads flowed in opposite directions, whereas west of the Peninsula, they moved in the same direction (Goto 2023).

Another well-known maritime network in the Vitiaz Strait was the trading network of the Siassi islanders. The Siassi islanders are primarily traders who speak Austronesian languages, whereas Papuan languages are spoken along the coastline and inland areas of mainland New Guinea. In addition, many groups around the strait understood Siassi as a common language. In cases involving different language groups between coastal and inland areas, barter exchanges were conducted through so-called ‘silent trade’ (Harding 1967: 74). The Siassi islanders had no direct contact with inland groups in mainland New Guinea. In this system, obsidian from the Willaumez Peninsula was transported along the northern coast of New Britain, eventually reaching the island’s western tip where the Siassi islanders acquired it. They then crossed the strait by canoe, bringing obsidian to the coastal areas of mainland New Guinea as well as to the Siou and Tami Islands (Hogbin 1951: 82). From there, the Siou people took obsidian inland, while the Tami people distributed it throughout the Huon Gulf region.

The Siassi islanders themselves did not produce pottery. Therefore, they

obtained pottery from the Siou region and supplied it to the outer islands and New Britain. Meanwhile, the exchange rate for obsidian increased the further west it travelled from its place of origin (Harding 1967: 42). In this system, the Siassi islanders would trade a few coconuts for 3 pottery vessels, then exchange those vessels in New Britain for a single block of obsidian. They would then transport the obsidian back to Siou and trade it for 10 pottery vessels, which they would again bring to New Britain in exchange for a pig (Harding 1967: 139). Obsidian transported across islands to distant locations became increasingly valuable, and around mainland New Guinea, flakes detached from obsidian cores became key trade items (Liley 1986: 345–357). In sum, obsidian was a crucial strategic exchange good in the silent trade between Austronesian and Papuan language groups. In mainland New Guinea, it was transported deep into the mountains through small-scale inland trade and carried as flakes on foot. As obsidian was traded in flake form, further detailed observations are limited. However, following the introduction of metals by Europeans, the trade in obsidian appears to have rapidly declined (for example Watson and Cole 1978: 199–200).

Another important example in Near Oceania is the *Kula*, an inter-island exchange network in the Massim area of the Solomon Sea, which has attracted significant anthropological attention (Leach and Leach 1983; Malinowski 1922). In the *Kula* exchange, 2 types of shells are exchanged *via* an inter-island trading network, in which *mwali* (*Conus* shell armlet) circulate counterclockwise, while *soulava* (*Spondylus* shell beads) circulate clockwise (Figure 11). Traders employ single-out-rigger sailing canoes (*masawa*) with beautifully decorated splash boards and white egg-cowry shells at the bow (Figures 12 and 13).

The *Kula* exchange entails complex political and ritual processes by which inter-group relations are confirmed based on whether the bonds are allied or non-allied; it is not merely a simple reciprocal exchange transaction. Furthermore, the Kiriwina language was spoken in the northern Massim area, whereas the Dobuan language was spoken in the south. The former served as a *lingua franca* among the people of the D'Entrecasteaux, Amphlett, and Trobriand Islands, but the Dobuan people lacked knowledge of Kiriwina within the *Kula* network. The *Kula* network was not exclusively an inter-island network within the Massim area because non-*Kula* bonds were widespread, allowing Fergusson obsidian to enter into the *Kula* circuit. The collection of obsidian materials from a source location and their connection *via* several communities to the *Kula* network clearly illustrate the complexity of such trading systems in Near Oceania (Goto 2002, 2004; Malinowski 1922; Norick 1976).

The Admiralty Islands were inhabited by 3 ethnic groups with distinct Austronesian languages (Smythe 1970): the Titan (fishers), Matankor (semi-farmers/fishers), and Usiai (farmers) (Mitton 1979). The Titan or Manus lived on the islands and coasts south of Manus Island, the Matankor on the northern and south-



Figure 11 Shell valuables in the Massim *Kula* exchange. Left: *Mwali*, Right: *Soulava* (Photos: Akimichi, 1984 at Trobriand Islands)



Figure 12 Decorated splashboard at the bow of a single-outrigger sailing canoe (*masawa*) used in the *Kula* exchange. The splashboard displays unique motifs in white, red, and black pigments, along with white egg-cowry shells (Photo: Akimichi, 1984 at Trobriand Islands)



Figure 13 *Masawa*-type *Kula* canoe collected from Kitava Island in 1985 (National Museum of Ethnology, H0124235. Photo: Chinami Miyahara)

ern islands near-shore and offshore near Manus Island, and the Usiai farmers on the main island of Manus. Lou Island, known for obsidian production, belonged to the Matankor. Foodstuffs (fish, taro, and sago flours), ceramics, and coconut oil were traded among these groups. The Titan and Matankor traditionally travelled using single-outrigger sailing canoes and exchanged local products at markets held on the

beach of Manus main island (Akimichi and Sakiyama 1991).

In the Papuan Gulf of Papua New Guinea, the Motu people inhabiting Port Moresby and nearby areas conducted annual trade with the Papuan people in the Gulf region to the west. During this trade, the earthenware pottery produced by the Motu was exchanged in bulk for sago starch prepared by sago gatherers living in the marsh swamps of the Gulf region. The *lakatoi*, a large multi-hulled sailing vessel with claw-shaped sails, was used for westward voyages carrying pottery (Figure 8), returning to Port Moresby with loads of sago starch. This trade, known as *Hiri* in the Motu language, and was carried out between Austronesian and Papuan groups (Bruno et al. 2016).

In north Malaita, on the Solomon Islands, the Lau people lived on artificial islets in Lau Lagoon. As Lau lacked cultivated land, its people has to exchange fish and marine products for taro, yam, and other vegetables from coastal communities on Malaita Island. Their major trading counterparts were the Baegu and Baelelea, who dwell on the hillsides of Malaita Island (Ross 1973). The Lau used to paddle plank canoes to the Malaita coast—a journey taking less than an hour. Lau, Baegu, and Baelelea farmers in Malaita maintained intimate economic relations, with the exchange ratio between fish and tubers pre-negotiated. Only women were allowed to participate in the exchange to prevent conflicts between the groups (Akimichi 1978; 1991). This represents a basic unit or style of inter-tribal relations widely seen across ISEA and Oceania.

The ethnographic instances above illustrate inter-island exchanges in Near Oceania that had economic, social, and religious significance. Among these, the social and religious connotations of exchange are least demonstrated archaeologically. Different ethnic groups often intermingled in these inter-island exchange networks. Akimichi (1995; 2018) proposed calling this kind of exchange an ‘ethno-network’.

Here, the ethno-network is defined as a comprehensive set of inter-group relationships maintained through commodity exchanges and social/religious transactions, including trade, intermarriage, and rituals. Counterparts in these relationships may be from the same or different ethnic groups. Reciprocal and tributary transactions as well as trade in commodities such as obsidian, clay pots, shell ornaments, diverse implements, food items, medicines, and dyes were included. After European contact, iron, glass, guns, and mirrors were added to the items exchanged. Complex trade often accompanied a division of labour in which collectors, middlemen, and traders intermingled, linking these ethno-networks to the global world (Akimichi 2018).

In the Santa Cruz Archipelago, inter-island trade occurred between distinct language groups in the easternmost Solomon Islands. Coiled red feather money, red feathers (carefully prepared from the honeyeater *Myzomela cardinalis*), shell discs, woven cloth, and women were traded. Of the 11 languages in the Santa Cruz

group, 3 are classified as Papuan and 8 as Austronesian. Among the latter, 3 are Polynesian languages spoken in Taumako in the Duff Islands, and 2 (Pileni and Tikopia-Anutan) are Polynesian Outlier languages (George 2013, 2017; Tryon 2009). Voyages were once undertaken between Santa Cruz and western Polynesia: the distributions of Talasea. Obsidian, Lapita earthenware, and stone adzes made of chert indicate inter-island trade between Samoa (Tafafi, Tutulia), the Santa Cruz Islands (Nenumbo, Reef Islands), and New Britain (George 2017; Green 1976; Kirch 1997).

Seafaring activities also supported relationships between Indonesian fishers from southern Sulawesi Island and Aboriginal groups in Arnhem Land during the historical period. The Makassan people of Sulawesi Island made expeditions to Arnhem Land in northern Australia to collect *beche-der-mer* (sea cucumbers) (Macknight 1976, 1986; Russell 2004). Their voyages to Arnhem Land were seasonal and annual, with the eastward movement taking monsoon winds from the northwest and returning the following year with monsoon winds from the south-east.

Thus, inter-island voyaging and ethno-networks existed across Near Oceania, from Near Oceania to Remote Oceania, and from Near Oceania to Wallacea, from prehistoric times through the ethnographic and historical periods to the present. Dated archaeological assemblages containing obsidian, chert, earthen ware, stone and shell axes/adzes, and whale teeth (Akimichi 1992; Goto 2002, 2004, 2023), together with ethnohistorical and ethnographic records, are expected to reveal the dynamic aspects of ethno-networks in Near Oceania across time (Akimichi 2020: 247–248).

5 Concluding Discussion

5.1 Early Seafaring in Near Oceania and Wallacea

Current archaeological evidence shows that modern humans migrated to the Wallacean Islands and Sahul (Australia and New Guinea) between 50,000 and 44,000 BP, or possibly earlier (60,000 to 50,000 BP) by crossing open seas. In East Asia, early modern humans crossed the sea to reach the Japanese mainland by at least 40,000 BP and the Ryukyu Islands by 36,000 BP. Evidence from Sahul and Wallacea indicates that early modern humans could cross sea distances of more than 80 km as early as 50,000–44,000 years ago.

Although there is no direct evidence for reconstructing early seafaring technology, recent simulation studies support the view that early migration into Sahul involved intentional seafaring with purpose-built seacraft rather than unintentional drift migration (Bird et al. 2019). The bamboo raft is, thus far, the most supported and likely candidate for early modern human seacraft in Wallacea and Near Oceania (e.g., Anderson 2000; Goto 2003; Thorne and Raymond 1989) as well as

in other regions (e.g., Doran 1971).

Bamboo, which belongs to the Gramineae family, inhabits many tropical regions and is abundant in Wallacea. It is highly durable in seawater, and its hollow stems are lighter than solid wood and offer greater buoyancy. Above all, large bamboo stems are easier to cut and process using large stones or stone tools (Kaifu 2020; Kaifu et al. 2019), whereas small bamboo stems can be cut using small lithic flakes, as demonstrated by experimental archaeological studies (Bar-Yosef et al. 2012; Fuentes et al. 2020; Xhaufleur 2014; Xhaufleur et al. 2016, 2017).

To build bamboo rafts, the bamboo must be bundled and tied with string or rope. On the tropical islands of Wallacea, many plants, including rattan (a vine-like palm), can be used for string or rope. Although plant materials are rarely well preserved, archaeologically, use-wear analysis of stone flake tools has revealed traces of multiple methods of stone tool attachment and the use of plant materials (Fuentes et al. 2019; 2020). Early modern humans (*Homo sapiens*), who mainly practiced hunter-gatherer economies, likely had cognitive and observational abilities comparable to modern humans. It is therefore reasonable to assume they realised the value of bamboo and other useful plants.

The raft hypothesis for sea voyaging from Wallacea to Near Oceania also proposes the use of simple sails made from hand-plaited palm or pandanus leaves. Even today, such leaves are commonly used to make plaited mats and containers in Southeast Asia and Oceania. In the Trobriand Islands of Papua New Guinea, *Kula* canoes were also made with plaited pandanus leaves. If a sail can be adjusted according to the wind direction, the speed increases; therefore, sails may have played an important role in long-distance travel, even with rafts. It is especially noteworthy that when travelling towards Sahul, the voyage could be aimed at a large continental coastline. Even if navigation or drift followed a north-to-south direction rather than a west-to-east direction, a raft could still reach the Sahul coast, particularly during the northwesterly monsoon season around December.

Kaifu argues that sails were not used during the Pleistocene because no archaeological evidence for them exists, and no historical or pictorial material records sailboats older than 5,000 BC (Kaifu 2020; Kaifu et al. 2019). However, all recorded sailboats exhibit highly developed designs from the Neolithic period onwards. We assume that Pleistocene sails were less developed, requiring only a pole that could become a mast if there was wind to hang a simple sail made from leaves, as described above. Such organic materials are not easily preserved, and these vessels may not have been recognised as ‘sailing boats’ even by people at the time. Technically, making sails is simple, and *Homo sapiens* could easily observe that wind acting on an object increases a boat’s speed (Ono, Pawlik, and Fuentes 2024). Although it remains uncertain whether sails were necessary to reach the Ryukyu Islands, simple sails would certainly have been useful in Wallacea and Oceania, where seasonal winds regularly blow from a specific direction (Oda and

Ono 2022).

To test the raft hypothesis, Bednarik and his team conducted an experimental navigation with a bamboo raft in December 1998, sailing from the coasts of Alor and Timor Islands to the former coastline of Sahul. Their first attempt, using a large raft weighing 28 metric tons, failed. However, their second attempt, using a lighter 12-ton bamboo raft, successfully reached the target (90 km from the Timor coast) in 5 days (Bednarik, Hobman, and Rogers 1999). The rafts used in this experiment were built using stone tools and equipped with removable palm sails, 65 liters of water, and food. The raft travelled at an average speed of 2 knots, reaching up to 5 knots with strong tailwinds (Bednarik, Hobman, and Rogers 1999). Although such navigation by bamboo rafts is close to drifting (with little sail control and no keel), when the destination is a large continent such as Sahul and the prevailing wind is steady and favourable, the probability of success is high—in this case, the December monsoon wind blowing primarily from the northwest to the southeast.

As monsoon seasonality certainly existed during the late Pleistocene (Norman et al. 2018), early modern humans likely selected the most favourable season for sea crossings (Kealy, Louys, and O'Connor 2017, 2018; Norman et al. 2018), making the continental coastline of Sahul a feasible target for departure from the relatively small islands (with limited terrestrial resources) in eastern Wallacea.

For long-distance navigation requiring more than a few days, it was essential to store food and water on a boat or raft and to catch fish as a source of protein. Archaeological findings from Jerimalai (or Asitau Kuru), as well as other late Pleistocene sites on the Timor, Kisar, and Alor Islands, indicate that early modern human groups in the region relied heavily on marine and coastal resources for food, as well as production of tools and ornaments (O'Connor, Ono, and Clarkson 2011; O'Connor et al. 2019; Samper Carro et al. 2015). An important advantage of rafts is their ability to carry large quantities of food and water and to allow people to lie down and rest. In addition, because rowing or paddling is not required, their main activities on a raft would likely have included adjusting sails and fishing when needed. However, the movement of rafts in open seas is significantly influenced by wind direction, waves, and tidal currents, making them functionally close to drifting devices.

In an experimental voyage, Bednarik and his team sailed for 10 days and succeeded in travelling 500 km to the current coastal region of northern Australia (Bednarik, Hobman, and Rogers 1999). Eventually, the raft became stranded; however, the experiment showed that rafts equipped with simple sails could be effective for longer trips. However, this is not the only possibility that needs to be considered. If the number of passengers could be adjusted to 2 or 3, and food and water was stored in vacant spaces, it would have been possible to reach the ancient coastline of Sahul, even by a semi-drifting voyage in a dugout canoe. In Australia, several stone tools, presumed to be locally polished stone axes, have been exca-

vated from Pleistocene sites (Clarkson et al. 2017). These tools were used for woodworking, suggesting that dugout canoes should not be ruled out as a potential mode of early human travel to Sahul.

5.2 Seafaring and Maritime Networks from the Late Pleistocene to Holocene

As discussed, the routes or trails indicated by movement of obsidian and marsupials between islands in Near Oceania and Wallacea are strongly related to seafaring from the late Pleistocene through the Holocene, and into more recent times. Prehistoric seafaring trails can also be traced archaeologically through items such as pottery, dyes, shells, stone artefacts, and foodstuffs.

The most visible trails, revealed through archaeology or biogeography, are marked by (1) obsidian (Reepmeyer, O'Connor, and Brockwell 2011; Reepmeyer et al. 2016; Summerhayes 2009); (2) pottery (Carson et al. 2013; Clark and Winter 2019; Ono et al. 2019); (3) animal bones, including those of marsupials, pigs (Clark et al. 2013; Intoh 1986), and rats (Anderson 2009; Matisoo-Smith and Robins 2004); and (4) plants, including taro, paper mulberry, and *Canarium* nuts (Matthews 2007). It is not appropriate to treat each trail as independent because inter-island exchanges involved transporting diverse commodities and other materials together. Furthermore, seafaring to neighbouring islands, as well as to uninhabited reefs and islands, was carried out for multiple purposes, including *ad hoc* and seasonal trade, social visits, temporary refuge, rest, freshwater supply, and religious sanctuary.

As the sources can be distinguished geologically, and the material is common, useful, and well-preserved, obsidian provides the most robust archaeological evidence of human movement and seafaring. Obsidian shows not only distribution areas from sourced locations but also highlight changes in tool design and usage according to the distance from the source and cultural shifts over time.

The translocation of marsupials in Near Oceania underscores the importance of seafaring with wild animals transported by boats prior to the introduction of domesticates (such as pigs, jungle fowls, dogs, and rats). From the excavated marsupial bones, westward back-migration from New Guinea to Wallacea was confirmed, helping to dispel the simplistic model of eastward dispersal of people and materials across Oceania. Rich ethnographic records of inter-island movement in Near Oceania include exchanges in the Vitiaz Strait, New Ireland and its satellite islands, the *Kula* exchange in Massim, pottery-sago trade by the Motu, and trade in the Admiralty Islands, as well as the Lau/Baegu and Baelelea trade networks in north Malaita. These highlight the significance of 'ethno-networks', which may be key to understanding prehistoric seafaring in Island Southeast Asia and Oceania.

With regard to seafaring technology and seacraft types, details of their development are barely known or discussed because no archaeological materials related to canoes and other seacrafts have been discovered in late Pleistocene and middle

Holocene sites in ISEA and Near Oceania. As discussed above, we highlighted experimental studies and the possibility of bamboo rafts being used for late Pleistocene sea crossings in Wallacea and Near Oceania (Anderson 2000, 2017; Bednarik, Hobman, and Rogers 1999). Another candidate is the dugout canoe (Goto 2023; Kaifu 2020; Kaifu et al. 2015, 2019). The appearance of longer-distance seafaring, over 100–200 km, after the initial migrations around 40,000–20,000 BP, during the late Pleistocene, in both Wallacea and Near Oceania, suggests shifts in the development of vessels and seafaring technology, though the exact nature of this shift remains unclear. With raft technology, intentional navigation over 100–200 km must have been very difficult; therefore, other types of seacraft were likely used. Currently, the most plausible candidate is the dugout canoe, which may also have employed simple sails similar to those used on rafts. The archaeological traces of intensive pelagic fishing on Timor Island, dating back to approximately 40,000 BP, and the possible emergence of fishing hooks after approximately 20,000 BP (O'Connor, Ono, and Clarkson 2011), further supports the likely use of such canoes, which offer greater navigational control than rafts. However, the limited archaeological evidence suggests that long-distance seafaring was rather rare. Shorter-distance seafaring along coastlines or between inter-visible islands using either rafts or dugout canoes may have become more common with the emergence of obsidian and marsupial exchange networks during the late Pleistocene.

Following the terminal Pleistocene and into the early Holocene, dugout canoes may have become the primary vessels for fishing and sea crossings in Wallacea and Near Oceania. The substantial increase in archaeological discoveries of *Tridacna* shell adzes and shell hooks in Wallacea and Near Oceania supports this trend. A diverse array of shell hooks and other artefacts has been reported from islands in southern Wallacea, and *Tridacna* shell adzes have also been found on Mindoro Island in the Philippines (Ono, Pawlik, and Fuentes 2024; Pawlik et al. 2015), the Maluku Islands in northern Wallacea (Bellwood 2019), and New Guinea in Near Oceania, all dating to the terminal Pleistocene or early Holocene. Dugout canoes have been archaeologically documented elsewhere after the early Holocene, and currently, the largest number of such canoes have been found in Jomon sites in Japan—around 160 vessels in total (Tsuji 2000). The oldest dated Jomon dugout canoe is from the Kaminarishita site in Chiba prefecture, dating to approximately 7,500 BP (Hattori et al. 2019), while the world's oldest dugout canoe may have been reported in the Netherlands, dating to between approximately 9,500 to 8,500 BP.

Much longer seafaring distances, exceeding 1,000 km, were achieved during the Southeast Asian Neolithic period by Austronesian migrants after approximately 4,000 BP. This could be strongly linked to the development of outrigger sailing canoes, although current knowledge largely depends on linguistic and ethnographic evidence owing to the lack of archaeological evidence. The exact origin of outrig-

ger canoes (with or without sails) remains unknown. Today, these canoes are widespread, from Madagascar and Sri Lanka across the Indian Ocean to Island Southeast Asia and most of Oceania, and exhibit a wide range of sail designs, from simple to complex, or none at all. Although Taiwan is regarded as a likely place of origin of the Austronesian language group based on linguistic and other lines of evidence, the major boat types in this region are the dugout canoe, bamboo boat (distinct from a raft), and gondola-type canoes without outriggers, such as the *tatala* and *cinedkeran* of Lanyu Island (Figure 14), but surprisingly, no outrigger canoes (Goto 2023).

Historically, in Melanesia, various canoes without outriggers have been used, such as the *ora* war canoe in the Solomon Islands (Figure 15) and the *masawa*-type *Kula* canoe with splashboards and sideboards. These are similar to semi-structured boats (large hulls with added parts) used in prehistoric Japan during the Yayoi and Kofun periods (Figure 16). These may have shared a similar origin in the distant past or may be the result of independent development in different regions. Further archaeological, anthropological, and ethnological research is needed to investigate these unresolved questions.



Figure 14 *Tatala* canoe of Lanyu Island, Taiwan, stored at the National Museum of Ethnology (National Museum of Ethnology, H0162249. Photo: Osamu Monden)



Figure 15 The *ora* war canoe of Ugi Island, Solomon Islands (National Museum of Ethnology Collection X0077114. Photo: Toshio Asaeda, 28 June 1933) [making the image brighter makes the canoe structure more visible]

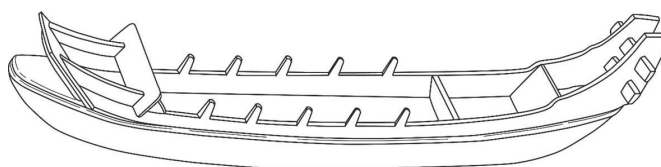


Figure 16 A semi-structured boat of the late Yayoi to Kofun periods in ancient Japan (reconstruction; drawn by Chinami Miyahara)

Acknowledgements

This study was partly based on research supported by the Japan Society for the Promotion of Science (JSPS) (KAKENHI Grant Numbers JP16H06409, JP18KK0019, JP20K20504, and JP21H04368). Special thanks are due to Yumi Edamitsu and P. J. Matthews for their assistance in editing the figures and text.

References

- Akimichi, T.
- 1978 The Ecological Aspect of Lau (Solomon Islands) Ethnoichthyology. *The Journal of the Polynesian Society* 87(4): 301–326.
 - 1991 Sea Tenure and Its Transformation in the Lau of North Malaita, Solomon Island. *South Pacific Study* 12(1): 7–22.
 - 1992 The Surviving Whale-Tooth: Cultural Significances of Whale Products in Oceania. *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 17(1): 121–142.
 - 1995 *Kaiyo minzokugaku: Umi no nachurarisuto tachi* (Maritime Peoples of the Pacific: An Anthropological Study). Tokyo: University of Tokyo Press. (in Japanese)
 - 1998 Pig and Man in Papuan Societies: Two Cases from the Seltaman of the Fringe Highlands and

- the Gidra of the Lowland. In S. Yoshida and Y. Toyoda (eds.) *Fringe Area of Highlands in Papua New Guinea* (Senri Ethnological Studies 47), pp. 163–182. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 2018 Umi no esuno-nettowaku ron to kaimin: Ibunka koryu no ninaite wa dare ka (The Maritime Ethno-Networks and the Sea-Folks). In R. Ono, K. Nagatsu, and M. Intoh (eds.) *Kaimin no idoshi: Nishi Taiheiyō no nettowaku shakai* (The Ethnography of the Sea-Folk's Migration), pp. 38–65. Kyoto: Showado. (in Japanese)
- 2020 Owari ni: “Umi” kenkyū no shinjidai ni mukete (Epilogue: For the New Era of the Maritime Study). In T. Akimichi and M. Intoh (eds.) *Hito wa naze umi o koeta noka: Oseania koko gaku no chosen* (Why Did the Humans Cross the Ocean: A Challenge to the Archaeology in Oceania), pp. 243–245. Tokyo: Yuzankaku. (in Japanese)
- Akimichi, T. and O. Sakiyama
1991 Manus Fish Names. *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 16(1): 1–29.
- Allen, J. and C. Gosden
1996 Spheres of Interaction: Modelling the Culture History of the Bismarck Archipelago. In J. Davidson, G. Irwin, B. F. Leach, A. Pawley, and D. Brown (eds.) *Oceanic Culture History: Essays in Honour of Roger Green*, pp. 183–197. Dunedin: New Zealand Journal of Archaeology.
- Allen, J., C. Gosden, and J. P. White
1989 Human Pleistocene Adaptations in the Tropical Island Pacific: Recent Evidence from New Ireland, a Greater Australian Outlier. *Antiquity* 63(240): 548–561.
- Anderson, A. J.
2000 Slow Boats from China: Issues in the Prehistory of Indo-Pacific Seafaring. In S. O'Connor and P. Veth (eds.) *East of Wallace's Line: Studies of Past and Present Maritime Cultures of the Indo-Pacific Region*, pp. 13–50. Rotterdam: AA Balkema.
2009 The Rat and the Octopus: Initial Human Colonization and the Prehistoric Introduction of Domestic Animals to Remote Oceania. *Biological Invasions* 11: 1503–1519.
2010 The Origins and Development of Seafaring: Towards a Global Approach. In A. Anderson, J. H. Barrett, and K. V. Boyle (eds.) *The Global Origins and Development of Seafaring*, pp. 3–16. Cambridge: McDonald Institute for Archaeological Research.
2017 Ecological Contingency Accounts for Earliest Seagoing in the Western Pacific Ocean. *The Journal of Island and Coastal Archaeology* 13(2): 224–234.
- Aubert, M., A. Brumm, M. Ramli, T. Sutikna, E. W. Saptomo, B. Hakim, M. J. Morwood, G. D. van den Bergh, L. Kinsley, and A. Dosseto
2014 Pleistocene Cave Art from Sulawesi, Indonesia. *Nature* 514(7521): 223–227.
- Aubert, M., R. Lebe, A. A. Oktaviana, M. Tang, B. Burhan, Hamrullah, A. Jusdi, Abudullah, B. Hakim, J. Zhao, I. M. Geria, P. H. Sulistyarto, R. Sardi, and A. Brumm
2019 Earliest Hunting Scene in Prehistoric Art. *Nature* 576(7787): 442–445.
- Aziz, N., C. Reepmeyer, C. Geoffrey, Sriwigati, and D. A. Tanudirjo
2018 Mansiri in North Sulawesi: A New Dentate-Stamped Pottery Site in Island Southeast Asia. In S. O'Connor, D. Bulbeck, and J. Meyer (eds.) *The Archaeology of Sulawesi: Current Research on the Pleistocene to the Historic Period* (Terra Australis 48), pp. 191–205. Canberra: ANU Press.
- Bar-Yosef, O., M. I. Eren, J. Yuan, D. J. Cohen, and Y. Li
2012 Were Bamboo Tools Made in Prehistoric Southeast Asia? An Experimental View from South China. *Quaternary International* 269: 9–21.
- Bedford, S.
2006 The Pacific's Earliest Painted Pottery: An Added Layer of Intrigue to the Lapita Debate and Beyond. *Antiquity* 80(309): 544–557.
- Bednarik, R. G.
1998 An Experiment in Pleistocene Seafaring. *International Journal of Nautical Archaeology* 27(2): 139–149. [https://doi.org/10.1016/S1057-2414\(98\)80070-8](https://doi.org/10.1016/S1057-2414(98)80070-8)

- Bednarik, R. G., B. Hobman, and P. Rogers
 1999 Nale Tasih 2: Journey of a Middle Palaeolithic Raft. *International Journal of Nautical Archaeology* 28(1): 25–33. [https://doi.org/10.1016/S1057-2414\(99\)80004-1](https://doi.org/10.1016/S1057-2414(99)80004-1)
- Bellwood, P. S.
 1979 *Man's Conquest of the Pacific: The Prehistory of Southeast Asia and Oceania*. Oxford: Oxford University Press.
 2005 *First Farmers: The Origins of Agricultural Societies*. Oxford: Blackwell.
 2017 *First Islanders: Prehistory and Human Migration in Island Southeast Asia*. Hoboken: Wiley Blackwell.
 2019 *The Spice Islands in Prehistory: Archaeology in the Northern Moluccas, Indonesia* (Terra Australis 50). Canberra: ANU Press.
- Bellwood, P. S. and P. Koon
 1989 'Lapita Colonists Leave Boats Unburned!': The Question of Lapita Links with Island Southeast Asia. *Antiquity* 63(240): 613–622.
- Bird, M. I., S. A. Condie, S. O'Connor, D. O'Grady, C. Reepmeyer, S. Ulm, M. Zega, F. Saltr  , and C. Bradshaw
 2019 Early Human Settlement of Sahul Was Not an Accident. *Scientific Reports* 9(1): 8220.
- Birdsell, J. B.
 1977 The Recalibration of a Paradigm for the First Peopling of Greater Australia. In J. Allen, J. Golson, and R. Jones (eds.) *Sunda and Sahul: Prehistoric Studies in Southeast Asia, Melanesia and Australia*, pp. 113–167. Cambridge: Academic Press.
- Bruno, D., T. Richards, M. Goddard, T. Dutton, M. Leavesley, I. J. McNiven, and H. Mandui
 2016 Historicizing Motu Ceramics and the Hiri Trade. In T. Richards, B. David, K. Aplin, and I. J. McNiven (eds.) *Caution Bay Studies in Archaeology 1, Archaeological Research at Caution Bay, Papua New Guinea: Cultural, Linguistic and Environmental Setting*, pp. 65–74. Oxford: Archaeopress Publishing.
- Carson, M., H. Hung, G. Summerhayes, and P. S. Bellwood
 2013 The Pottery Trail from Southeast Asia to Remote Oceania. *The Journal of Island and Coastal Archaeology* 8(1): 17–36.
- Chia, S.
 2003 *The Prehistory of Bukit Tengkorak as a Major Pottery Making Site in Southeast Asia* (Sabah Museum Monograph 8). Kota Kinabalu: Sabah State Museum.
 2008 Prehistoric Sites and Research in Semporna, Sabah, Malaysia. *Bulletin of the Society for East Asian Archaeology* 2: 1–5.
- Chowning, A.
 1978 Changes in West New Britain Trading Systems in the Twentieth Century. *Mankind* 11: 296–307.
- Clark, G. R. and O. Winter
 2019 The Ceramic Trail: Evaluating the Marianas and Lapita West Pacific Connection. In S. Bedford and M. Spriggs (eds.) *Debating Lapita: Distribution, Chronology, Society and Subsistence* (Terra Australis 52), pp. 37–60. Canberra: ANU Press.
- Clark, G., F. Petchey, S. Hawkins, C. Reepmeyer, I. Smith, and W. B. Masse
 2013 Distribution and Extirpation of Pigs in Pacific Islands: A Case Study from Palau. *Archaeology in Oceania* 48(3): 141–153.
- Clarkson, C., Z. Jacobs, B. Marwick, R. Fullagar, L. Wallis, M. Smith, R. G. Roberts, E. Hayes, K. Lowe, X. Carah, S. A. Florin, J. McNeil, D. Cox, L. J. Arnold, Q. Hua, J. Huntley, H. E. A. Brand, T. Manne, A. Fairbairn, J. Shulmeister, L. Lyle, M. Salinas, M. Page, K. Connell, G. Park, K. Norman, T. Murphy, and C. Pardoe
 2017 Human Occupation of Northern Australia by 65,000 Years Ago. *Nature* 547(7663): 306–310. <https://doi.org/10.1038/nature22968>
- Counts, D. and D. Counts
 1970 The Vula of Kaliai: A Primitive Currency with Commercial Use. *Oceania* 41(2): 90–105.

- Donohue, M. and T. Denham
 2010 Farming and Language in Island Southeast Asia: Reframing Austronesian History. *Current Anthropology* 51(2): 223–256.
- Doran, E., Jr.
 1971 Sailing Raft as a Great Tradition. In C. L. Riley, J. C. Kelley, C. W. Pennington, and R. L. Rands (eds.) *Man across the Sea: Problems of Pre-Columbian Contacts*, pp. 115–138. Austin: University of Texas Press.
- Erlandson, J.
 2001 The Archaeology of Aquatic Adaptations: Paradigms for a New Millennium. *Journal of Archaeological Research* 9(4): 287–350.
- Flannery, T. F.
 1995 *Mammals of the South-West Pacific and Moluccan Islands*. Chatswood: Reed Books.
- Flannery, T. F. and J. P. White
 1991 Animal Translocation. *National Geographic Research and Exploration* 7(1): 96–113.
- Flannery, T. F., P. S. Bellwood, J. P. White, T. Ennis, G. Irwin, K. Schubert, and S. Balasubramaniam
 1998 Mammals from Holocene Archaeological Deposits on Gebe and Morotai Islands, Northern Moluccas, Indonesia. *Australian Mammalogy* 20(3): 391–400.
- Flannery, T. F., P. S. Bellwood, P. White, A. Moore, Boeadi, and G. Nitihaminoto
 1995 Fossil Marsupials (Macropodidae, Peroryctidae) and Other Mammals of Holocene Age from Halmahera, North Moluccas, Indonesia. *Alcheringa: An Australasian Journal of Palaeontology* 19(1): 17–25.
- Freeman, M. S.
 2018 Marsupial Diet. In J. Vonk and T. Shackelford (eds.) *Encyclopedia of Animal Cognition and Behavior*, pp. 1–8. New York: Springer International Publishing. https://doi.org/10.1007/978-3-319-47829-6_1157-1
- Fuentes, R., R. Ono, J. Carlos, C. Kerfant, Sriwigati, T. Miranda, N. Aziz, H. O. Sofian, and A. Pawlik
 2020 Stuck within Notches: Direct Evidence of Plant Processing during the Last Glacial Maximum to Holocene in North Sulawesi. *Journal of Archaeological Science: Reports* 30: 102207.
- Fuentes, R., R. Ono, N. Nakajima, H. Nishizawa, J. Siswanto, N. Aziz, Sriwigati, H. O. Sofian, T. Miranda, and A. Pawlik
 2019 Technological and Behavioural Complexity in Expedient Industries: The Importance of Use-Wear Analysis for Understanding Flake Assemblages. *Journal of Archaeological Science* 112: 105031. <https://doi.org/10.1016/j.jas.2019.105031>
- Fullagar, R., G. Summerhayes, B. Ivuyo, and J. Specht
 1991 Obsidian Sources at Mopir, West New Britain Province, Papua New Guinea. *Archaeology in Oceania* 26(3): 110–114.
- Galipaud, J.-C., C. Reepmeyer, R. Torrence, S. Kelloway, and P. White
 2014 Long-Distance Connections in Vanuatu: New Obsidian Characterisations for the Makué Site, Aore Island. *Archaeology in Oceania* 49(2): 110–116.
- George, M.
 2013 Polynesian Navigation and Te Lapa— “The Flashing”. *Time and Mind: The Journal of Archaeology, Consciousness and Culture* 5(2): 135–173.
 2017 Te Laa o Lata of Taumako: Gauging the Performance of an Ancient Polynesian Sail. *The Journal of the Polynesian Society* 126(4): 377–415.
- Golitko, M., M. Schauer, and J. E. Terrell
 2012 Identification of Fergusson Island Obsidian on the Sepik Coast of Northern Papua New Guinea. *Archaeology in Oceania* 47(3): 151–156.
- Goto, A.
 2002 Kura kokan no butaiura: Sono busshitsu bunka teki sokumen. *Busshitsubunka* (Material Culture: Journal of Archaeologico-Folkloric Studies) 73: 1–16. (in Japanese)
 2003 *Umi o watatta Mongoroido: Taiheiyo to Nihon eno michi*. Tokyo: Kodansha Press. (in Japanese)

- 2004 Kokuyoseki no tabi: Minzokushi ni miru Bisumaruku shoto to Nyuburiten-to san Kokuyoseki no koeki. *Tonan Ajia kokogaku* (Journal of Southeast Asian Archaeology) 24: 1–18. (in Japanese)
 - 2023 *Indigenous Boats on the Rim and Islands of the Pacific: A Prelude to the Out-of Eurasia Anthropological History* (Monograph Series of the Anthropological Institute, Nanzan University 1). Nagoya: Anthropological Institute, Nanzan University. (in Japanese)
- Green, R. C.
- 1976 Lapita Sites in the Santa Cruz Group. In R. C. Green and M. M. Cresswell (eds.) *Southeast Solomon Islands Cultural History: A Preliminary Survey* (Bulletin of the Royal Society of New Zealand 11), pp. 245–265. Wellington: Royal Society of New Zealand.
 - 1991 Near and Remote Oceania: Disestablishing “Melanesia” in Culture History. In A. Pawley (ed.) *Man and a Half: Essays in Pacific Anthropology and Ethnobotany in Honour of Ralph Bulmer*, pp. 491–502. Auckland: The Polynesian Society.
- Groube, L. M., J. Chapell, J. Muke, and D. Price
- 1986 A 40,000 Year-Old Human Occupation Site at Huon Peninsula, Papua New Guinea. *Nature* 324(6096): 453–455.
- Haddon, A. C. and J. Hornell
- 1936–1938 *Canoes of Oceania*. Honolulu: Bishop Museum Press.
- Harding, T. G.
- 1967 *Voyagers of the Vitiaz Strait: A Study of a New Guinea Trade System*. Seattle: University of Washington Press for the American Ethnological Society.
- Hattori, T., T. Ota, N. Okubo, K. Ogawa, and T. Hachiya
- 2019 *Ichikawa-shi Kaminarishita iseki (1)–(4) and (7)–(10)* (Tokyo gaikaku kanjo doro mai-zobunkazai chosa hokokusho 14). Yotsukaido: Chiba Prefecture Educational Promotion Foundation. (in Japanese)
- Hawkins, S., S. O’Connor, T. R. Maloney, M. Litster, S. Kealy, J. N. Fenner, K. Aplin, C. Boulanger, S. Brockwell, R. Willan, E. Piotto, and J. Louys
- 2017 Oldest Human Occupation of Wallacea at Laili Cave, Timor-Leste, Shows Broad-Spectrum Foraging Responses to Late Pleistocene Environments. *Quaternary Science Reviews* 171: 58–72.
- Heinsohn, T. E.
- 2003 Animal Translocation: Long-Term Human Influences on the Vertebrate Zoogeography of Australasia (Natural Dispersal Versus Ethnophoresy). *Australian Zoologist* 32(3): 351–376.
 - 2005 Wallaby Extinctions at the Macropodid Frontier: The Changing Status of the Northern Pademelon *Thylogale Browni* (Marsupialia: Macropodidae) in New Ireland Province, Papua New Guinea. *Australian Mammalogy* 27(2): 175–183.
 - 2010 Marsupials as Introduced Species: Long-Term Anthropogenic Expansion of the Marsupial Frontier and Its Implications for Zoogeographic Interpretation. In S. Haberle, J. Stevenson, and M. Prebble (eds.) *Altered Ecologies: Fire, Climate and Human Influence on Terrestrial Landscapes* (Terra Australis 32), pp. 133–176. Canberra: ANU Press.
- Hogbin, I.
- 1951 *Transformation Scene: The Changing Culture of a New Guinea Village*. London: Routledge & Kegan Paul.
- Hull, J. R., P. Piper, G. Irwin, K. Szabó, A. Oertle, and P. Bellwood
- 2019 Observations on the Northern Moluccan Excavated Animal Bone and Shell Collections. In P. Bellwood (ed.) *The Spice Islands in Prehistory: Archaeology in the Northern Moluccas, Indonesia* (Terra Australis 50), pp. 135–166. Canberra: ANU Press.
- Hung, H. C., M. Carson, P. Bellwood, F. Campos, P. J. Piper, E. Dizon, M. J. Bolunia, M. Oxenham, and Z. Chi
- 2011 The First Settlement of Remote Oceania: The Philippines to the Marianas. *Antiquity* 85(329): 909–926.
- Intoh, M.
- 1986 Pigs in Micronesia: Introduction or Re-introduction by the Europeans? *Man and Culture in*

- Oceania* 2: 1–26.
- Irwin, G. and S. Holdaway
 1996 Colonisation, Trade and Exchange: From Papua to Lapita. In J. Davidson, G. Irwin, B. F. Leach, A. Pawley, and D. Brown (eds.) *Oceanic Culture History: Essays in Honour of Roger Green*, pp. 225–235. Dunedin: New Zealand Journal of Archaeology.
- Kaifu, Y.
 2020 *Sapiensu Nippon joriku: 3 mannen mae no daikokai* (Landing to Japan by Sapiens). Tokyo: Kodansha Press. (in Japanese)
- Kaifu, Y., M. Fujita, M. Yoneda, and S. Yamasaki
 2015 Pleistocene Seafaring and Colonization of the Ryukyu Islands, Southwestern Japan. In Y. Kaifu, M. Izuho, T. Goebel, H. Sato, and A. Ono (eds.) *Emergence and Diversity of Modern Human Behavior in Paleolithic Asia*, pp. 345–361. College Station: Texas A&M University Press.
- Kaifu, Y., C.-H. Lin, A. Goto, N. Ikeya, Y. Yamada, W.-C. Chiang, F. Fujita, K. Hara, T. Hawira, K.-E. Huang, C.-H. Huang, Y. Kubota, C.-H. Liu, K. Miura, Y. Miyazawa, O. Monden, M. Muramatsu, Y. Sung, K. Suzuki, N. Tanaka, C.-H. Tsang, S. Uchida, and P.-L. Wen
 2019 Palaeolithic Seafaring in East Asia: Testing the Bamboo Raft Hypothesis. *Antiquity* 93(372): 1424–1441.
- Kealy, S., J. Louys, and S. O'Connor
 2017 Reconstructing Palaeogeography and Inter-Island Visibility in the Wallacean Archipelago during the Likely Period of Sahul Colonization, 65–45,000 Years Ago. *Archaeological Prospection* 24(3): 259–272.
 2018 Least-Cost Pathway Models Indicate Northern Human Dispersal from Sunda to Sahul. *Journal of Human Evolution* 125: 59–70.
- Kennedy, J.
 2002 Manus from the Beginning: An Archaeological Overview. In C. Kaufmann, C. K. Schmid, and S. Ohnemus (eds.) *Admiralty Islands: Art from the South Seas*, pp. 17–28. Zurich: Museum Rietburg Zurich.
- Kirch, P. V.
 1997 *The Lapita Peoples: Ancestors of Oceanic World*. Cambridge: Blackwell Publishers Ltd.
 2000 *On the Road of the Winds: An Archaeological History of the Pacific Islands before European Contact*. Los Angeles: University of California Press.
 2010 Peopling of the Pacific: A Holistic Anthropological Perspective. *Annual Review of Anthropology* 39(1): 131–148.
- Kirch, P. V. and J. A. Swift
 2017 New AMS Radiocarbon Dates and a Re-evaluation of the Cultural Sequence of Tikopia Island, Southeast Solomon Islands. *The Journal of Polynesian Society* 126(3): 313–336.
- Langley, M. C., S. O'Connor, S. Kealy, and Mahirta
 2023 Fishhooks, Lures, and Sinkers: Intensive Manufacture of Marine Technology from the Terminal Pleistocene at Makpan Cave, Alor Island, Indonesia. *The Journal of Island and Coastal Archaeology* 18(1): 33–52. DOI: 10.1080/15564894.2020.1868631
- Leach, J. W. and E. Leach
 1983 *The Kula: New Perspectives on Massim Exchange*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Leavesley, M.
 2005 Prehistoric Hunting Strategies in New Ireland, Papua New Guinea: The Evidence of the Cuscus (*Phalanger orientalis*) Remains from Buang Merabak Cave. *Asian Perspectives* 44(1): 207–218.
- Leavesley, M. and J. Allen
 1998 Dates, Disturbance and Artefact Distributions: Another Analysis of Buang Merabak, a Pleistocene Site on New Ireland, Papua New Guinea. *Archaeology in Oceania* 33(2): 63–82.
- Leavesley, M. and J. Chappell
 2004 Buang Merabak: Additional Early Radiocarbon Evidence of the Colonisation of the Bismarck Archipelago, Papua New Guinea. *Antiquity* 78(301). <http://antiquity.ac.uk/Proj>

Gall/leavesley/index.html#leavesley (accessed on 6 June 2025)

- Liley, I.
1986 Prehistoric Exchange in the Vitiaz Strait, Papua New Guinea. Ph.D. dissertation, The Australian National University, Canberra.
- Lindt, J. W.
1887 *Picturesque New Guinea*. London: Longmans, Green and Company.
- Macknight, C. C.
1976 *The Voyage to Marege': Macassan Trepangers in Northern Australia*. Melbourne: Melbourne University Press.
1986 Macassans and the Aboriginal Past. *Archaeology in Oceania* 21(1): 69–75.
- Malinowski, B.
1922 *Argonauts of the Western Pacific*. London: Routledge & Kegan Paul.
- Matisoo-Smith, E. and J. H. Robins
2004 Origins and Dispersals of Pacific Peoples: Evidence from mtDNA Phylogenies of the Pacific Rat. *Proceedings of the National Academy of Sciences* 101(24): 9167–9172.
- Matthews, P. J.
2007 Plant Trails in Oceania. In K. R. Howe (ed.) *Vaka Moana: Voyages of the Ancestors. The Discovery and Settlement of the Pacific*, pp. 94–97. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- McCoy, M. D., C. Cervera, M. Mulrooney, A. McAlister, and P. V. Kirch
2020 Obsidian and Volcanic Glass Artifact Evidence for Long-Distance Voyaging to the Polynesian Outlier Island of Tikopia. *Quaternary Research* 98: 46–57.
- Mitton, R.
1979 *The People of Manus* (Records of the National Museum and Art Gallery 6). Boroko: National Museum and Art Gallery.
- Nagaoka, T.
2008 Project Report for Archaeological Survey of Lenger Island (HPF Grant #64–05–20458 Special Project). Manuscript submitted to Division of Historic Preservation, Tourism and Parks Department of Land and Natural Resources Pohnpei State Government Federated States of Micronesia.
- Nagaoka, T., P. J. Sheppard, C. R. Sheppard, and N. Kononenko
2022 Obsidian Point Discovered on Kapingamarangi Atoll, Micronesia: Implications for Post-Settlement Regional Interactions. *The Journal of the Polynesian Society* 131(4): 389–426.
- Norick, F. A.
1976 An Analysis of the Material Culture of the Trobriand Islands Based upon the Collection of Bronislaw Malinowski. Ph.D. dissertation, University of California, Berkeley.
- Norman, K., J. Inglis, C. Clarkson, T. Faith, J. Shumleister, and D. Harris
2018 An Early Colonisation Pathway into Northwest Australia 70–60,000 Years Ago. *Quaternary Science Reviews* 180: 229–239.
- O'Connor, S., Mahirta, S. Kealy, C. Boulanger, T. Maloney, S. Hawkins, M. C. Langley, H. A. Kaharudin, Y. Suniarti, M. Husni, and M. Ririmasse
2019 Kisar and the Archaeology of Small Islands in the Wallacean Archipelago. *The Journal of Island and Coastal Archaeology* 14(2): 198–225.
- O'Connor, S., Mahirta, S. C. Samper Carro, S. Hawkins, S. Kealy, J. Louys, and R. Wood
2017 Fishing in Life and Death: Pleistocene Fish-Hooks from a Burial Context on Alor Island, Indonesia. *Antiquity* 91(360): 1451–1468. DOI: 10.15184/aqy.2017.186
- O'Connor, S., R. Ono, and C. Clarkson
2011 Pelagic Fishing at 42,000 Years before the Present and the Maritime Skills of Modern Humans. *Science* 334(6059): 1117–1121. DOI: 10.1126/science.1207703
- O'Connor, S., C. Shipton, and S. Kealy
2024 The Southern Route to Sahul: Modern Human Dispersal and Adaptation in the Pleistocene. In R. Ono and A. Pawlik (eds.) *The Prehistory of Human Migration: Human Expansion, Resource Use, and Mortuary Practice in Maritime Asia*, pp. 5–20. London: IntechOpen.

O'Connor, S. and P. Veth

- 2005 Early Holocene Shell Fish Hooks from Lene Hara Cave, East Timor Establish Complex Fishing Technology Was in Use in Island South East Asia Five Thousand Years before Austronesian Settlement. *Antiquity* 79(304): 249–256. DOI: 10.1017/S0003598X0011405X

Oda, S. and R. Ono

- 2022 Island Migration and Seafaring by *Sapiens* during the Late Pleistocene: Cases of Wallacea and the Ryukyu Islands. *Journal of Southeast Asian Archeology* 41: 93–109. (in Japanese)

Oktaviana, A. A., R. Joannes-Boyau, B. Hakim, B. Burhan, R. Sardi, S. Adhityatama, Hamrullah, I. Sumantri, M. Tang, R. Lebe, I. Ilyas, A. Abbas, A. Jusdi, D. E. Mahardian, S. Noerwidi, M. N. R. Ririmasse, I. Mahmud, A. Duli, L. M. Aksa, D. McGahan, P. Setiawan, A. Brumm, and M. Aubert

- 2024 Narrative Cave Art in Indonesia by 51,200 Years Ago. *Nature* 631(8022): 814–818.

Oliveira, S. K., K. Nägele, S. Carlhoff, I. Pugach, T. Koesbardiati, A. Hübner, M. Meyer, A. A. Oktaviana, M. Takenaka, C. Katagiri, D. B. Murti, R. S. Putri, Mahirta, F. Petchey, T. Higham, C. F. W. Higham, S. O'Connor, S. Hawkins, R. Kinaston, P. Bellwood, R. Ono, A. Powell, J. Krause, C. Posth, and M. Stoneking

- 2022 Ancient Genomes from the Last Three Millennia Support Multiple Human Dispersals into Wallacea. *Nature Ecology and Evolution* 6: 1024–1034. <https://doi.org/10.1038/s41559-022-01775-2>

Ono, R.

- 2003 Prehistoric Austronesian Fishing Strategies: A Comparison between Island Southeast Asia and Lapita Cultural Complex. In C. Sand (ed.) *Pacific Archaeology: Assessments and Prospects*, pp. 191–201. Nouméa: Dép. Archéologie, Service des Musées et du Patrimoine de Nouvelle-Calédonie.

- 2004 Prehistoric Fishing at Bukit Tengkorak, East Coast of Borneo Island. *New Zealand Journal of Archaeology* 24: 77–106.

- 2016 Human History of Maritime Exploitation and Adaptation Process to Coastal and Marine Environments: A View from the Case of Wallacea and the Pacific. In M. Marghany (ed.) *Applied Studies of Coastal and Marine Environments*, pp. 389–426. London: IntechOpen. DOI: 10.5772/60743

- 2018 *Umi no jinruishi: Tonan Ajia to Oseania kaiiki no kokogaku* (Human History in Maritime World: Archaeology in Island Southeast Asia and Oceania). Tokyo: Yuzankaku. (in Japanese)

- 2021 Technological and Social Interactions between Hunter-Gatherers and New Migrants in the Prehistoric (Neolithic) Islands of Southeast Asia and Oceania. In K. Ikeya and Y. Nishiaki (eds.) *Hunter-Gatherers in Asia: From Prehistory to the Present* (Senri Ethnological Studies 106), pp. 127–148. Osaka: National Museum of Ethnology.

Ono, R., N. Nakajima, H. Nishizawa, S. Oda, and S. Soegondho

- 2015 Maritime Migration and Lithic Assemblage on the Talaud Islands in Northern Wallacea during the Late Pleistocene to the Early Holocene. In Y. Kaifu, M. Izuhō, T. Goebel, H. Sato, and A. Ono (eds.) *Emergence and Diversity of Modern Human Behavior in Paleolithic Asia*, pp. 201–213. College Station: Texas A&M University Press.

Ono, R., A. Pawlik, and R. Fuentes

- 2024 The Pleistocene Maritime Migration of Modern Humans in Northern Wallacea: The Cases of Topogaro in Sulawesi and Bubog in Mindoro. In R. Ono and A. Pawlik (eds.) *The Prehistory of Human Migration: Human Expansion, Resource Use, and Mortuary Practice in Maritime Asia*, pp. 33–56. London: IntechOpen.

Ono, R., S. Soegondho, and M. Yoneda

- 2009 Changing Marine Exploitation during Late Pleistocene in Northern Wallacea: Shell Remains from Leang Sarru Rockshelter in Talaud Islands. *Asian Perspective* 48(2): 318–341.

Ono, R., H. O. Sofian, N. Aziz, Sriwigati, A. A. Oktaviana, N. Alamshya, and M. Yoneda

- 2019 Traces of Early Austronesian Expansion to East Indonesia? New Discovery of Dentate-Stamped and Lime-Infilled Pottery from Central Sulawesi. *The Journal of Island and Coastal Archaeology* 14(1): 123–129.

- Ono, R., H. O. Sofian, R. Fuentes, N. Aziz, and A. Pawlik
2023a The GOA Topogaro Complex: Human Migration and Mortuary Practice in Sulawesi during the Late Pleistocene and Holocene. *Journal L'Anthropologie* 127(3): 103155. <https://doi.org/10.1016/j.anthro.2023.103155>
- Ono, R., H. O. Sofian, R. Fuentes, N. Aziz, M. Ririmasse, I. M. Geria, C. Katagiri, and A. Pawlik
2023b Early Modern Human Migration into Sulawesi and Island Adaptation in Wallacea. *World Archaeology* 54(2): 229–243.
- Ono, R., K. Yamano, O. Kataoka, J. Barnabas, T. Nagaoka, C. Katagiri, and K. Yamagiwa
2021 Early Human Migration and Shell Use in Eastern Micronesia: Based on the Results of Recent Excavations on Pohnpei Island, Federated States of Micronesia. *Journal of Southeast Asian Archaeology* 41: 57–72. (in Japanese)
- Parkinson, R.
1999 *Thirty Years in the South Seas: Land and People, Customs and Traditions in the Bismarck Archipelago and on the German Solomon Islands*. Bathurst: Crawford House Publishing. (Originally as *Dreissig Jahre in der Südsee*. Stuttgart: Verlag von Streder und Schröder. 1907.)
- Pasveer, J. M.
2004 *The Djief Hunters, 26,000 Years of Rainforest Exploitation on the Bird's Head of Papua, Indonesia* (Modern Quaternary Research in Southeast Asia 17). London: CRC Press.
- Pawley, A. and R. Green
1973 Dating the Dispersal of the Oceanic Languages. *Oceanic Linguistics* 12(1/2): 1–67.
- Pawley, A. and M. Ross
1995 Chapter 3. The Prehistory of Oceanic Languages: A Current View. In P. Bellwood, J. J. Fox, and D. Tryon (eds.) *The Austronesians: Historical and Comparative Perspectives*, pp. 43–80. Canberra: The Australian National University Press.
- Pawlik, A., P. J. Piper, R. Wood, K. Lim, M. Faylona, B. Mijares, and M. Porr
2015 Shell Tool Technology in Island South East Asia: An Early Middle Holocene Tridacna Adze from Ilin Island, Mindoro, Philippines. *Antiquity* 89(344): 292–308.
- Pengilley, A., C. Brand, J. Flexner, J. Specht, and R. Torrence
2019 Detecting Exchange Networks in New Britain, Papua New Guinea: Geochemical Comparisons between Axe-adze Blades and in Situ Volcanic Rock Sources. *Archaeology in Oceania* 54(3): 200–213.
- Reepmeyer, C., G. Clark, and P. J. Sheppard
2012 Obsidian Source Use in Tongan Prehistory: New Results and Implications. *The Journal of Island and Coastal Archaeology* 7(2): 255–271.
- Reepmeyer, C., S. O'Connor, and S. Brockwell
2011 Long-Term Obsidian Use at the Jerimalai Rock Shelter in East Timor. *Archaeology in Oceania* 46(2): 85–91. DOI: 10.1002/j.1834-4453.2011.tb00102.x
- Reepmeyer, C., S. O'Connor, Mahirta, S. Kealy, and T. Maloney
2019 Kisar, a Small Island Participant in an Extensive Maritime Obsidian Network in the Wallacean Archipelago. *Archaeological Research in Asia* 19: 100139. DOI: 10.1016/j.ara.2019.100139
- Reepmeyer, C., S. O'Connor, Mahirta, T. Maloney, and S. Kealy
2016 Late Pleistocene/Early Holocene Maritime Interaction in Southeastern Indonesia – Timor Leste. *Journal of Archaeological Science* 76: 21–30. DOI: 10.1016/j.jas.2016.10.007
- Ross, H. M.
1973 *Baegu: Social and Ecological Organization in Malaita, Solomon Islands* (Illinois Studies in Anthropology 8). Urbana: University of Illinois Press.
- Russell, D.
2004 Aboriginal-Makassan Interactions in the Eighteenth and Nineteenth Centuries in Northern Australia and Contemporary Sea Rights Claims. *Australian Aboriginal Studies* 1: 3–17.
- Samper Caro, S. C., S. O'Connor, J. Louys, S. Hawkins, and M. Mahirta
2015 Human Maritime Subsistence Strategies in the Lesser Sunda Islands during the Terminal

- Pleistocene-Early Holocene: New Evidence from Alor, Indonesia. *Quaternary International* 416: 64–79.
- Sheppard, P. J.
 2011 Lapita Colonization across the Near/Remote Oceania Boundary. *Current Anthropology* 52(6): 799–840.
- Sheppard, P. J. and R. C. Green
 1991 Spatial Analysis of the Nenumbo (SE-RF-2) Lapita Site, Solomon Islands. *Archaeology in Oceania* 26(3): 89–101.
- Shipton, C., S. O'Connor, N. Jankowski, J. O'Connor-Veth, T. Maloney, S. Kealy, and C. Boulanger
 2019 A New 44,000-Year Sequence from Asitau Kuru (Jerimalai), Timor-Leste, Indicates Long-Term Continuity in Human Behaviour. *Archaeological and Anthropological Sciences* 11: 5717–5741. DOI: 10.1007/s12520-019-00840-5
- Smythe, W. E.
 1970 *Melanesian, Micronesian, and Indonesian Features in Languages of the Admiralty Islands* (Pacific Linguistics C-13). Canberra: Department of Linguistics, Research School of Pacific Studies, Australian National University.
- Sondaar, P. Y.
 1989 Did Man Reach Australia via the Giant Rat and Dingo Route? *Publication of the Geological Research and Development Centre, Paleontology Series* 5: 76–83.
- Specht, J.
 1981 Obsidian Sources at Talasea, West New Britain, Papua New Guinea. *The Journal of the Polynesian Society* 90(3): 337–356.
 2005a Obsidian Stemmed Tools in New Britain: Aspects of Their Role and Value in Mid-Holocene Papua New Guinea. In I. Macfarlane, M.-J. Mountain, and R. Paton (eds.) *Many Exchanges: Archaeology, History, Community and the Work of Isabel McBryde* (Aboriginal History Monograph 11), pp. 373–392. Canberra: Aboriginal History Inc.
 2005b Revisiting the Bismarck: Some Alternative Views. In A. Pawley, R. Attenborough, J. Golson, and R. Hide (eds.) *Papuan Pasts: Cultural, Linguistic and Biological Histories of Papuan-Speaking Peoples* (Pacific Linguistics 572), pp. 235–288. Canberra: Pacific Linguistics, Research School of Pacific and Asian Studies, The Australian National University.
- Specht, J. and C. Gosden
 1997 Dating Lapita Pottery in the Bismarck Archipelago, Papua New Guinea. *Asian Perspectives* 36(2): 175–199.
- Summerhayes, G. R.
 2001 Defining the Chronology of Lapita in the Bismarck Archipelago. In G. R. Clark, A. J. Anderson, and T. Vunidilo (eds.) *The Archaeology of Lapita Dispersal in Oceania* (Terra Australis 17), pp. 25–38. Canberra: ANU Press.
 2003 Modelling Differences between Lapita Obsidian and Pottery Distribution Patterns in the Bismarck Archipelago, Papua New Guinea. In C. Sand (ed.) *Pacific Archaeology: Assessments and Prospects* (Proceedings of the International Conference for the 50th Anniversary of the First Lapita Excavation, July 2002, Koné-Nouméa, Les Cahiers de L'Archéologie en Nouvelle-Calédonie 15), pp. 139–149. Nouméa: Musée de Nouvelle-Calédonie.
 2007 Island Melanesian Pasts: A View from Archeology. In J. S. Friedlaender (ed.) *Genes, Language and Culture History in the Southwest Pacific*, pp. 10–35. Oxford: Oxford University Press.
 2009 Obsidian Network Patterns in Melanesia: Sources, Characterization and Distribution. *Bulletin of the Indo-Pacific Prehistory Association* 29: 109–123.
- Summerhayes, G. R. and J. Allen
 1993 The Transport of Mopir Obsidian to Late Pleistocene New Ireland. *Archaeology in Oceania* 28(3): 144–148.
- Summerhayes, G. R., M. Leavesley, A. Fairbairn, H. Mandui, J. Field, A. Ford, and R. Fullagar
 2010 Human Adaptation and Plant Use in Highland New Guinea 49,000 to 44,000 Years Ago.

- Science* 330(6000): 78–81.
- Sutikna, T., M. W. Tocheri, J. T. Faith, Jatmiko, R. D. Awe, H. J. M. Meijer, E. W. Saptomo, and R. G. Roberts
2018 The Spatio-Temporal Distribution of Archaeological and Faunal Finds at Liang Bua (Flores, Indonesia) in Light of the Revised Chronology for Homo Floresiensis. *Journal of Human Evolution* 124: 52–74.
- Sutikna, T., M. W. Tocheri, M. J. Morwood, E. W. Saptomo, Jatmiko, R. D. Awe, S. Wasisto, K. E. Westaway, M. Aubert, B. Li, J.-x. Zhao, M. Storey, B. V. Alloway, M. W. Morley, H. J. M. Meijer, G. D. van den Bergh, R. Grün, A. Dosseto, A. Brumm, W. L. Jungers, and R. G. Roberts
2016 Revised Stratigraphy and Chronology for Homo Floresiensis at Liang Bua in Indonesia. *Nature* 532(7599): 366–369.
- Tanudirjo, D.
2001 Islands in Between: Prehistory of the Northeastern Indonesian Archipelago. Ph.D. dissertation, The Australian National University, Canberra.
2005 Long-Continuous or Short-Occasional Occupation? The Human Use of Leang Saru Rock-Shelter in the Talaud Islands, North Eastern Indonesia. *Bulletin of Indo-Pacific Prehistory Association* 25: 15–19.
- Terrell, J.
1986 *Prehistory in the Pacific Islands: A Study of Variation in Language, Customs, and Human Biology*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Thorne, A. and R. Raymond
1989 *Man on the Rim: The Peopling of the Pacific*. Angus: North Ryde.
- Torrence, R. and P. Swadling
2008 Social Networks and the Spread of Lapita. *Antiquity* 82(317): 600–616.
- Tryon, D.
2009 Linguistic Encounter and Responses in the South Pacific. In M. Jolly, S. Tcherkézoff, and D. Tryon (eds.) *Oceanic Encounters: Exchange, Desire, Violence*, pp. 37–55. Canberra: ANU E Press.
- Tsujio, E.
2000 Nihon kuribune kankei shiryō shusei (Hokkaido–Tokai to Taiheiyo engan yosatsu hokoku 1) *Yusei koko kiyo* 37(28): 1–18. (in Japanese)
- Tykot, R. H. and S. Chia
1997 Long-Distance Obsidian Trade in Indonesia. *MRS Online Proceedings Library (OPL)* 462: 175–180.
- Wallace, A.
1869 *The Malay Archipelago: The Land of the Orang-Utan and the Bird of Paradise. A Narrative of Travel with Studies of Man and Nature*. 2 vols. London: Macmillan and Co. (Reprinted version 1986. Oxford: Oxford University Press.)
- Watson, V. D. and J. D. Cole
1978 *Prehistory of the Eastern Highlands of New Guinea*. Canberra: Australian National University Press.
- White, J. P. and M. N. Harris
1997 Changing Sources: Early Lapita Period Obsidian in the Bismarck Archipelago. *Archaeology in Oceania* 32(1): 97–107.
- Wickler, S.
2001 *The Prehistory of Buka: A Stepping Stone Island in the Northern Solomons* (Terra Australis 16). Canberra: Department of Archaeology and Natural History and Centre for Archaeological Research, The Australian National University.
- Xhaufflaire, H.
2014 Plant Use in the Subsistence Strategies of Prehistoric Hunter-Gatherers in Palawan Island Assessed from the Lithic Industry. Building up a Reference Collection. Ph.D. Thesis, Muséum national d'Histoire naturelle, Paris.

Xhaufflaire, H., A. Pawlik, C. Gaillard, H. Forestier, T. J. Viales, J. R. Callado, D. Tandang, N. Amano, D. Manipon, and E. Dizon

- 2016 Characterisation of the Use-Wear Resulting from Bamboo Working and Its Importance to Address the Hypothesis of the Existence of a Bamboo Industry in Prehistoric Southeast Asia. *Quaternary International* 416: 95–125.

Xhaufflaire, H., N. Revel, T. J. Viales, J. R. Callado, D. Tandang, C. Gaillard, H. Forestier, E. Dizon, and A. Pawlik

- 2017 What Plants Might Potentially Have Been Used in the Forests of Prehistoric Southeast Asia? An Insight from the Resources Used Nowadays by Local Communities in the Forested Highlands of Palawan Island. *Quaternary International* 448: 169–189.

『国立民族学博物館研究報告』投稿規程

平成 28 年 7 月 4 日

研究出版委員会

1. 『国立民族学博物館研究報告』（以下「研究報告」という。）の目的

文化人類学及びその関連分野に関する論文、書評論文、研究ノート、資料（以下「論文等」という。）を掲載する。

2. 投稿資格

研究報告に投稿することができる者は、次のとおりとする。

- (1) 本館の専任研究教育職員、客員教員・特別客員教員及び本館の活動に関わる各種研究員（機関研究員、特任研究員、外国人研究員、特定教授、共同研究員、外来研究員、特別共同利用研究員等）
- (2) 本館の組織・運営に関与する者及び関与した者
- (3) 本館の専任研究教育職員を研究代表者として組織された研究プロジェクトの研究分担者及び研究協力者
- (4) その他研究出版委員会（以下「委員会」という。）が適当と認めた者

3. 投稿区分

- (1) 「研究報告」の投稿区分は次のとおりとする。

「論文」：文化人類学及びその関連分野に関するオリジナルな研究の成果をまとめたもの。

「書評論文」：あるテーマに関連する複数の研究書や研究論文を取り上げ、研究動向の考察を試みるもの。

「研究ノート」：文化人類学及びその関連分野の発展に寄与する研究の過程で得られた、新しい発見や仮説を提示したもの。

「資料」：文化人類学及びその関連分野の発展に寄与する資料や情報を開示・紹介するもの。たとえば、研究で新たに得られた資料やデータの解説、海外の研究動向や学会動向の紹介、

展覧会の批評など。

- (2) 前項「投稿区分」のうち「論文」「研究ノート」の複数の論文等で構成するものを「特集」という。

なお、「特集」を出版するに当たり必要な事項は別に定める。

4. 投稿条件

- (1) 未公開・未公開の論文等に限る。
- (2) 同一又は、極めて類似した内容の論文等を他に投稿中あるいは既公開（電子媒体での公開含む）、掲載予定となっているものは二重投稿とみなし受理しない。（二重投稿である場合は、原則として審査の対象としない。なお、掲載後に二重投稿であることが判明した場合は、取り消しや罰則を科す場合がある。）
- (3) 論文等の投稿は、別に定める執筆要領に従って執筆し、行うものとする。執筆要領に従っていない論文等は受理しない。

5. 使用言語、文字

論文等において使用する言語は、日本語、英語、フランス語、ドイツ語、スペイン語、ロシア語、中国語のいずれかとするが、それ以外の言語で書く必要がある場合は、投稿に先立って委員会にその旨申し出ること。原稿に特殊な文字・記号を用いる場合も同様である。

6. 原稿の文字数

特に制限は設けないが、論文の場合は「ひとつの論文」として完結する内容と構成であることを要する。

7. 引用の際の注意

他の刊行物から、図・表・写真を転載する場合は、投稿者の責任において著者及び発行者の許可を求めなければならない。

また、文献の引用に著作権・版權所有者の許可が必要な場合、あるいは図版や写真を掲

載するために著作権の取得が必要な場合は、投稿者が手続きを行い、費用を負担する。

8. 投稿時の提出物

毎月月末までに以下のものを提出する。

- (1) 原稿（図・表・写真は本文に挿入し、ネイティブチェックは各自で済ませておくこと。）

- (2) 「セルフチェックシート」

- (3) 「投稿申請書」

※出力原稿とともにデジタルデータも提出する。図は、明瞭な出力原稿またはデジタルデータのいずれかを提出する。

9. 審査

投稿された原稿を掲載するか否かは、別に定める査読要領に基づいて委員会で審査のうえ決定する。なお、原稿（図・表・写真などを含む）は採否にかかわらず返却しない。

10. 異議申立て

- (1) 投稿者は、投稿した論文等の委員会決定に異議がある場合は、異議申立てをすることができる。異議申立ては書面により、論文名・著者名・異議申立て事項・理由を具体的に記載して委員会宛に提出するものとする。

異議申立ての期限は、最初の委員会決定の通知日より1ヵ月以内とする。

- (2) 異議申立てがあったときは、委員会は再審査又は異議申立ての却下を判定する。再審査の場合、委員会は再審査のための審査員を選定し、再度審査する。
- (3) 委員会は判定結果及び審査結果を速やかに投稿者へ通知する。
- (4) 同一の論文等にかかる異議申立ては1回限りとし、異議申立てにかかる判定結果に対する異議申立ては受付けない。

11. 投稿者による改稿

投稿された論文等について、委員会が掲載を決定するまでの間に、必要に応じて投稿者に改稿を求めることがある。なお、一定期間内に改稿の提出がない場合は、採用等を取り消すことがある。

12. 校正

校正は原則として著者校正のみで、内容のみならず、投稿規程及び執筆要領に則った形式に訂正することも校正作業に含まれる。採用決定後に行われる初校の段階での誤植以外の修正は原則として認めない。なお、再校は初校段階の訂正を確認するだけの作業となる。

13. 原稿料等

原稿料の支払い、掲載料の徴収はしない。

14. 著作権等

論文等の著作権は、著者に帰属する。ただし、本館はそれらの論文等を国立民族学博物館学術情報リポジトリ(みんぱくりポジトリ)で公開する権利を保有する。その場合、本館は公開される論文等の著者を明記する。公開に適さない箇所があれば、その部分を抹消するため、投稿時に委員会までその旨を申し出ること。また、刊行された論文等を他の刊行物に転載する場合には、事前に委員会に申請しなければならない。

15. その他

- (1) 執筆者用の配布部数は3冊とする。
- (2) 本規程に定めのない事項については、委員会において審議し決定する。

16. 提出先及びお問い合わせ

〒565-8511

大阪府吹田市千里万博公園10-1

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国立民族学博物館内 研究出版委員会

電話 (代)06-6876-2151

FAX 06-6878-8429

e-mail: editorial @ minpaku.ac.jp

附則

この規程は、平成28年7月4日から施行する。

この規程は、平成29年9月13日から施行する。

この規程は、平成30年3月14日から施行する。

この規程は、平成30年5月9日から施行する。

この規程は、平成30年10月10日から施行する。

この規程は、令和元年7月22日から施行する。

この規程は、令和4年4月20日から施行する。

この規程は、令和6年9月17日から施行する。

『国立民族学博物館研究報告』執筆要領

平成 28 年 7 月 4 日

研究出版委員会

1. 構成

論文・書評論文は、標題、著者名、要旨、キーワード、目次、本文、参照文献リスト、必要に応じて謝辞、注、図、表、写真から構成するものとする。

研究ノート・資料の場合は、要旨を省略する。

2. 原稿の媒体

投稿原稿は、横書きとする。原則としてデジタルデータと、A4 判の用紙に印刷した原稿との双方を提出する。

ファイルを作成するソフトは、一般に普及しているもの（MS ワード等）を使用し、特殊なフォントを用いる場合は、フォントデータを添付する。

特殊文字や記号、イタリック体文字、注番号、ルビ等には、印刷した原稿に赤で印を付ける。

3. 図表、写真の扱い

- (1) 図・表・写真などの引用・転載にあたっては、著者自身が原著者などの著作権所有者の許可をとるものとする。
- (2) 図・表・写真は著者から提出されたものをそのまま印刷に使用するので、著者の責任において完全なものを提出する。
- (3) 図・表・写真は、図 1、図 2、……、表 1、表 2……、写真 1、写真 2……などと通し番号をふる。英語の場合、Figure 1, Figure 2……, Table 1, Table 2……, Photo 1, Photo 2……, などと通し番号をふる。
- (4) 図・表・写真には内容を適切に表す表題（キャプション）説明、出典等を必ず付ける。
 - 表の場合は上部左に、「表 1 莫高窟北朝窟の分期」のように題名を記す。他の文献から引用する場合は、表の下部に（出典：敦煌研究院編 2014）のよ

うに、引用した文献を示す。

- 図の場合は、図の下部左に、「図 1 莫高窟の崖面における早期窟・西魏窟の配置図」のように題名を記す。引用する場合は、題名の横に、表の場合と同様に出自を示す。
 - 写真の場合は、写真の下部左に、「写真 1 莫高窟遠景（2016 年 8 月 22 日筆者撮影）」のように題名、撮影日、撮影者を記す。
- (5) カラー写真を必要とする場合は、研究出版委員会（以下、委員会）に相談すること。
 - (6) 原則として、図・表・写真は本文に挿入した状態で提出すること。

4. 表記の原則

(1) 日本語表記

日本語の表記は常用漢字、現代かなづかいを用いる。年号、月日その他の数字はアラビア数字を用いる。ただし、慣用されている熟語や序数については著者の判断に委ねるが、個々の論文において一貫性を維持する。

年号は西暦を用いる。元号を使用するときには、「昭和 29（1954）年」のように記す。外来語は慣用に従う。人名、地名は、現地の発音に近いカタカナ表記を採用する。いずれの場合も、必要に応じて現地語を丸括弧内に附記する。

(2) 漢字表記

現地の言語が漢字表記の場合、現地語単語を日本字で表記する。固有名詞以外はカギ括弧で括る。現地の漢字表記がそれに対応する日本字と異なる場合（中国語の簡体字等）、初出の個所に丸括弧で括って、現地表記を附記する。

(3) 人名表記

アルファベットによる人名表記は、後述する参考文献リストの見出し人名のみを例外として、論文等の使用言語にかかわらず、日本人氏名のローマ字表記も含めて、名、姓の順に記し、いずれも頭文字は大文字、それ以降は小文字で表記する。

5. 書式細目

(1) 標題、著者名

本文が日本語又は中国語の場合は、本文と同じ言語での標題と著者名、次いで英語での標題とローマ字表記の著者名を、この順に記す。本文が欧文の場合は、同じ言語での標題と著者名、次いで日本語での標題と著者名を、この順に記す。

(2) 要旨

本文が日本語又は中国語の場合は、本文と同じ言語での要旨、次いで英語での要旨を、この順に記す。本文が欧文の場合は、同じ言語での要旨、次いで日本語での要旨を、この順に記す。

日本語の要旨は 400 字、英語の要旨は 200 語、中国語は 280 字を目安とする。

(3) キーワード

論文等には 5 語程度のキーワードをあげる。本文が日本語・中国語の場合は、それに対応する英語のキーワードを併記し、本文が英語の場合はそれに対応する日本語のキーワードを併記する。

(4) 注

注は論文全体で通し番号を付け、文末脚注とする。本文中での注番号は、半角の数字と片括弧で記入する。

例) ……である³⁾。

注の内容文は、本文の次（謝辞がある場合は謝辞の次）、参考文献リストの前に一括して、通し番号順に記入する。

注で言及した資料は、参考文献としてあげる。

6. 文献引用の表記

本文や注で参考文献を指示するには、丸括弧で括って、著者の姓、半角スペース、刊行年、コロン、半角スペース、引用ページ数の順に記す。ページの桁は省略しない。ibid., op.cit., idem. などとせず、上記方式の表記をくりかえす。

例) ……である（鳥居 1927: 468–469）

鳥居（1975: 468–469）は……であると指摘している。

（秋葉・赤松 1935; Marcus and Fischer 1986）

（鳥居 1913; 1927）

（石田幹之助 1942; 石田英一郎 1951）

（Geertz, C. 1960; Geertz, H. 1960）

（鳥居 1913a; 1913b）

（劉 1992: 6）

7. 参考文献リスト

(1) 配列順

原稿末尾の参考文献リストには、本文や注で言及している文献のみ載せる。文献の詳細な書誌情報は、著者姓名のアルファベット順か五十音順とする。文献の言語が日本語・英語・中国語のように多岐に渡る場合、それぞれの言語ごとに分類し表記する。同一著者の文献が複数あれば、刊行年順に列挙する。同一著者の同じ刊行年の複数の文献を参照している場合には、刊行年にアルファベットの小文字をつけて区別し、アルファベット順に配列する。

以下、記入すべき書誌情報の要領を日本語文献、欧文文献、中国語文献の 3 種にわたって述べる。

(2) 書誌情報

日本語文献では、論文名はカギ括弧、収録書名（ないし雑誌名）は二重カギ括弧で括る。雑誌の巻号は原則としてアラビア数字を用いる。著者・編者名は、姓、名の順に記す。

欧文文献では、論文名はローマン体、収録書名（ないし雑誌名）はイタリック体で区別する。論文名、書名ないし雑誌名はいずれも、非独立語を除き先頭の文字を大文字で記す。見出しとなる著者・編者名のみ、姓、名の順に記し、間をコンマで区切る。共著、共編の場合、二番目以降の著者・編者名は名、姓の順に記す。

中国語文献では、日本語文献の書式に準ずる。

なお、日本語・中国語文献の著者名（漢字）はフルネームとし、欧語文献の著者名は、姓以外はイニシャルのみとする。著者の姓と名との区別ができないなどの場合には、著者との協議により、委員会が判断する。

a. 雑誌論文

著者、刊行年、論文の標題、収録雑誌、巻号、収録ページ、（必要に応じて）雑誌の出版地及び出版社を記す。

石田英一郎

- 1948 「文化史的民族学成立の基本問題」『民族学研究』13(4): 311-330。

Keesing, R. M.

- 1989 *Creating the Past: Custom and Identity in the Contemporary Pacific. The Contemporary Pacific* 1(1&2): 19-42.

黄才貴

- 1993 「侗族住居空間構成的調査報告」『国立民族学博物館研究報告』18(2): 303-346。

b. 論文集所収の論文

著者、刊行年、論文名、収録書の著者又は編者名、書名、収録ページ、出版地と出版社を記す。欧文の場合は、収録書をInで指示し、編者名はすべて名、姓の順に記す。収録書のそれ以外の情報は、下記単行本の書誌情報の要領に従う。

鳥居龍蔵

- 1975 「日本人類学の発達」鳥居龍蔵『鳥居龍蔵全集』pp. 459-470, 東

京：朝日新聞社（初出は1927年）。

バーンズ, J. A.

- 1981 「ニューギニア高地におけるアフリカン・モデル」笠原政治訳、武村精一編『家族と親族』pp. 116-134, 東京：未来社。

Schneider, D.

- 1976 *Notes toward a Theory of Culture*. In K. Basso and H. Selby (eds.) *Meaning in Anthropology*, pp. 197-220. Albuquerque: University of New Mexico Press.

克里佛徳, J.

- 2005 「広範的实践—田野、旅行与人類学訓練」A. 古塔, J. 佛格森編『人類学定位—田野科学的界限与基礎』駱建建, 袁同凱, 郭立新訳, pp. 189-228, 北京：華夏出版社。

c. シリーズの論文集所収の論文

シリーズ名を書名に続けて丸括弧内に記す。欧文文献の場合、シリーズ名はローマン体とする。

Ardener, E. W.

- 1985 *Social Anthropology and the Decline of Modernism*. In J. Overing (ed.) *Reason and Morality* (A.S.A Monographs 24), pp. 47-70. London and New York: Tavistock Publications.

d. 単行本

著者ないし編者、刊行年、書名、出版地及び出版社を記す。欧文の場合、編者については、単編は(ed.), 共書は(eds.)で表す。

柳田国男編

- 1935 『日本民俗学』東京：岩波書店。

Clifford, J. and G. E. Marcus (eds.)

- 1986 *Writing Culture: The Poetics and Politics of Ethnography*. Berkeley, Los Angeles and London: University of California Press.

王国平主編

- 2004 『西湖文献集成 第二輯 宋代史志 西湖文献』杭州：杭州出版社。

e. 翻訳書

上記に加え翻訳者名を表記し、必要に応じて原文を括弧内に表記する。

エリアーデ, M.

- 1974 『シャーマニズム—古代的エクスタシー技術』堀一郎訳, 東京: 冬樹社。

Van Gennep, A.

- 1960 *The Rites of Passage*. Translated by M. B. Vizedom and G. L. Caffee. Chicago: University of Chicago Press.

f. 初版・初出も示す場合

荒 松雄

- 1992 『インドとまじわる』東京: 中央公論 (初出は1982年, 東京: 未来社)。

Daniels, Roger

- 2002 *Coming to America: A History of Immigration and Ethnicity in American Life*. 2nd ed. New York: Harper Perennial.

宿白

- 1996 「参観敦煌莫高窟第二八五窟礼記」『中国石窟寺研究』pp. 206-213, 北京: 文物出版社 (初出: 1956 『文物参考資料』1956年第2期, 北京: 文物出版社)。

g. 和文文献の欧文表記

Ashizawa Noriyuki (芦沢紀之)

- 1972 「実録・総戦力研究所—太平洋戦争開始前後」『歴史と人物』10: 73-95. (The Document: the Institute of Total War Abilities. *History and Persons* 10: 73-95.)

Kawakita Jiro (川喜田二郎)

- 1987 『素朴と文明』(*Primitive and Civilization*) 東京: 講談社 (Kodansha)。

Inoue Mitsusada

- 1960 *Nihon kokka no kigen (Origin of the Japanese State)*, (Iwanami shinsho 380). Tokyo: Iwanami Shoten.

h. ウェブサイト

以下の例を参考に最終閲覧日を記載すること。

法務省入国管理局

「平成22年における難民人定者数等について」
http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri03_00077.html (2014年8月1日閲覧)

鈴木 紀

- 2015 「ミュージアムの中の古代アメリカ文明」『民博通信』152: 4-9.
(<http://www.minpaku.ac.jp/sites/default/files/research/activity/publication/periodical/tsushin/pdf/tsushin152-01.pdf> 2017年7月14日閲覧)

Demmert, W. and R. Arnold

- 1996 Language Policy. In G. Cantoni (ed.) *Stabilizing Indigenous Languages* (Center for Excellence in Education Monograph). Flagstaff: Northern Arizona University (Internet, 26 July 2001, <http://www.ncbe.gwu.edu/miscpubs/stabilize/ii-policy/index.htm#Abstract>)

Federation of American Scientists

Resolution comparison: Reading license plates and headlines. <http://www.fas.org/irp/imint/resolve5.html> (accessed June 1, 2005)

附則

この要領は, 平成28年7月4日から施行する。

この要領は, 平成29年9月13日から施行する。

この要領は, 平成30年3月13日から施行する。

この要領は, 平成30年10月10日から施行する。

国立民族学博物館研究報告 49 卷 3 号

〔監 修〕

關 雄 二

〔編 集 長〕

野 林 厚 志

〔編 集 委 員〕

マーク・ウィンチェスター

上 羽 陽 子

韓 敏

鈴 木 昂 太

鈴 木 英 明

南 真 木 人

藤 井 真 一

八 木 百 合 子

吉 岡 乾

令和 7 年 10 月 31 日 発 行

国立民族学博物館研究報告 49 卷 3 号

編集・発行 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国 立 民 族 学 博 物 館

〒565-8511 吹田市千里万博公園 10-1

TEL 06(6876)2151 (代表)

印 刷 株 式 会 社 遊 文 舎

〒532-0012 大阪市淀川区木川東 4 丁目 17-31

TEL 06(6304)9325 (代表)
